中央公論

第拾五年
第五號

毎月三回五の日發行

教育時論

●壹冊(郵税共)六錢五厘
●十冊　前金六十三錢
●廿冊　前金一圓貳拾錢
●卅冊　前金壹圓七十七錢
(此割引表は前金に限る)

教育時論は特立獨行誠實公明に教育上の諸問題を研究し以て國家の爲め貢献せんとする一大教育雑誌なり●社説欄に於ては教育界に於ける政務上或は學理上の大問題に就き本社の意見を發表し●學説政務欄には學説政務に關する内外識者の意見を紹介し●教授管理欄には實地教育家の研究實驗の結果を●理科哲學欄には斯學に關する有益多趣の論文を採録し●内外雑纂欄には内外教育の近況を最詳細に最迅速に網羅報道し讀者をして一見教育界最近の事情に通曉せしむ●又教育論叢欄に於ては全國教育家の各方面より寄投せられたる學政上の意見及び教授上の意見を收録し●時事寓感欄に於ては教育界の時事に論評を加へて社會を警醒す請ふ江湖諸賢愛讀の榮を賜へ

發行所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　開發社

馬鹿に輕るい

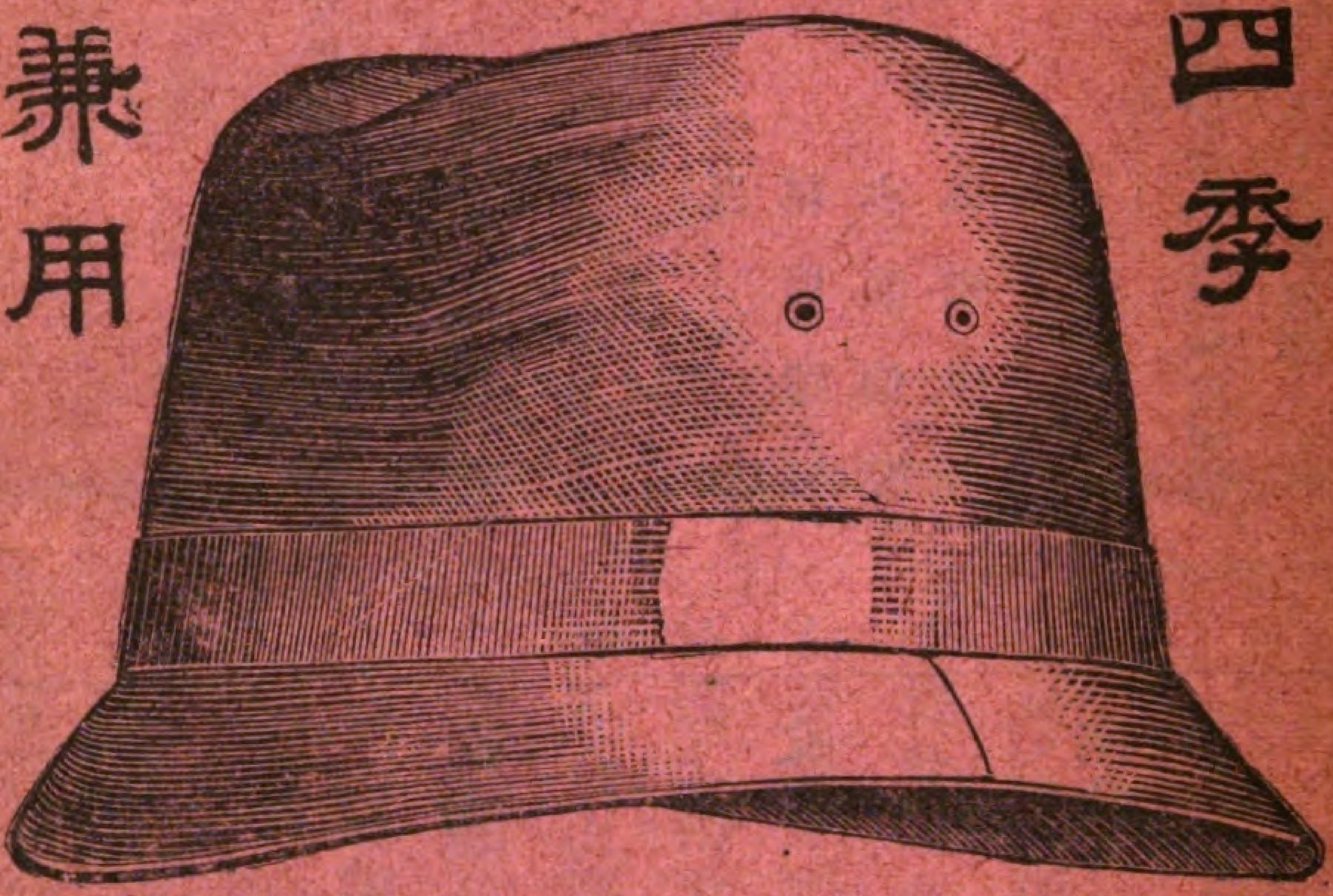
最も品位ある…………

……最も便宜なる

佛教通用帽

(一名燕尾帽)

四季兼用



●帽子の種類夥多ありと雖、皆な鄙俗に流れ、儼然たる諸賢に叶ふ者なし、仍て弊店年來考究し、各宗諸師の御專用に適する、通用帽を鑒製せし處、各位より非常なる御高評を賜はり、弊店の光榮之に過ぎず、依て倍原料を選み無比の優品を製調し、眷顧諸德に酬ひんとす、冀は陸續御贊用あらん事を

定價 金貳圓 品質 黒一本綾羅紗地繻子裏 白金巾日覆袋附木箱入

小包郵税 百里迄拾貳錢 百里外廿錢 五個以上は無運賃

御注意

●帽は(小形)(普通形)(大形)の三種に分つ

●故に御注文の際は(何形)と御明記を乞ふ

●御記載なき分は總て普通形を遞送す

●爲替は京都郵便本局拂に御取組を乞ふ着金次第即時に發送す

製造發賣元 林勘兵衛

京都市烏丸通六角南入

●通用帽(一名燕尾帽)は高雅なる意匠に優美の體裁を具へ、形容に一種言ふべからざる威嚴を備ふるのみならず、他の帽と異なり變形の憂ひなき實用帽なり、就中構造の如きは、嶄新の考案にして特に衞生を重んじ、無比の輕量とし(空氣拔き)日覆袋)を添へたれば夏季更に亦清涼なり

●本帽は唯だ價格一點の競爭に泥まざる優品にして、御僧侶諸師專用の帽子界の大王なり

中央公論

本號目次

雅頌一篇

社論

◎皇室と人民

◎地方の腐敗

論説

◎信仰論　文學士 福來友吉

◎婚姻論　河上翠陵

◎名家の根源　西脇玉峰

雜録

◎東京詩人評判記　磊々生

◎坐禪談　福田犢村

◎現今の博物館を評す　水雲仙客

◎錢財の性質　枇杷山人

海外新潮

大勢　西太后の戰爭的政策○佛蘭伊太利及三角同盟等

雜纂　ボア婦人と南阿戰爭○トラストの利益等

詞藻

新躰詩(有明)詩(觀海、世耕、止舟)俳(四方太撰)

評論

政治　政界の休息時代○進歩黨の外交論○文官任用令の改正等

經濟　經濟時事

教育　四人の教育○籠城主義と躰格○學年の始期と終期等

社會　改良と空論○宴會改良○花牌トランプの課税等○太平危言(月嶺)

文學　手向の笛を讀む○新聞讀者の變遷○惡好奇心の增長等

宗教　宗教學校と京都○寺務所と東京○僞善の權化等○日く錄。日野義淵氏(小觀)

新刊　上世印度宗教史等批評

報道　時事、教育、宗教、社會

中央公論
第十五年
第五號

奉賀東宮慶成
恭賦五言一律
群木蓁其茂　青宮正有慶
邦媛選冠族　貞淑配元良
合調瑟琴鼓　和鳴鸞鳳翔
天潢流滾々　皇運祝無疆

社論

皇室と人民

世界に比類なき歴史と德性を有せらるゝ吾皇室が人民に對せらるゝ盛德は今更ら數へ上るも畏れ多し、二千五百幾十年間上下熙々として東海の波濤に一大仙源を拓開し得たる抑も亦誰の賜ぞ。

特に今上陛下その仁天の如く、その德神の如く、登極の始め數百年の舊習を一洗し、萬國對等の交誼を脩せられ、吾國をして今日の盛運に上らしめ給ひたるさへあるに、憲法を發布して大權の一部を割て、人民に賛政の權を附與し給ひたるが如き、決して西洋各君主國に其例を知らざるの盛德として、吾人日本國民が記して忘る能はざる處、爾かのみならず陛下が常に民人の疾苦を宸襟に懸けさせらるゝも亦歷代稀に見奉る所の一大盛事にして、近來各地の天災時變頻々として殆ん

ど年として之れ起らざるなきにかゝはらず、その都度數百金若しくは數千金若しくは數万金をその地に下し賜ひ、特に侍從を遣はし親しく實際を視察せしめ給ふが如き今日に在ては殆んど常例をなせり、而して皇后陛下の御慈德も亦申し上くだに畏く、赤十字社を始め公私各種の慈善團隊には屢多額の御手元金を下賜あらせられ、今春寒氣の身にしみて殊に堪へ難きの候に於ては、慈惠病院、赤十字社病院、大學附屬病院の各患者を憫然に思召させられ、服地及び裁縫料を賜はらせられたるが如き、天恩の優渥に感泣せしもの獨り該患者のみならざりし也。

今回東宮殿下の鸞儀を擧げさせられたるに於ても東西兩京に多額の敎育費を下賜あらせられ、就中無冠の一平民福澤諭吉氏に賜ふに優渥なる御沙汰書と共に五万圓の巨金を以てせられたるが如き、何れも皆皇室が如何に人民を憐恤し親昵し給ふやを感戴し奉るに餘りあり。

然れども隴を得て蜀を望むは下民の情也、吾人をして尙一層の希望を吐發するの自由を得せしめんか、吾人は今後吾民人即ち**無位無冠の平民が尙一層皇室に咫尺し奉るの機會あらんことを**祈らざる能はず、今日の如くにては或は拜賀のため、或は謁見のため、二重橋上を渡て、天門に朝參するものは例令幾千人の多きに上るも、悉く皆勳光赫灼たる貴族若しくは有位有勳者其他の官吏に非るなく、未だ一平民の徒にして無位にして、無勳にして、龍顏に咫尺し奉て親しく天大の恩光を拜したるものありしを聽かず、是の如きは恰も一部少數の華族有勳者をして國民五千餘万が齊しく奉戴し奉る皇室を私しせしむるの嫌なき能はず、蓋し是れ陛下一視同仁の大御心に叶ふたるものに非ざるは勿論之よりして國民が華族若しくは官吏の徒に對して何となく面白からざるの感をなし往々にして過激の言論を弄して世を驚かすものすら生せんとするは吾人の私かに殘懷に堪へざる所となす。

天皇を拜し奉れば盲目となる可しとの警語は、已に前世紀の遺物に屬し、階前万里九重深ふして奧を知らざ

るが如きは未だ以て天皇の尊嚴を保有し奉る所以に非ず。皇室は愈人民と相接して愈其尊嚴を增殖し給ふ可く、人民は愈皇室に親昵し奉て愈仰慕の念深きを致さん、吾人は事情の許す限り、今回の如き御慶事に際しては大に宮門を洞開して如何なる無位無冠の一平民も自由に朝參拜賀するを得るに至らんことを祈らざる可らず、爾れども物自ら順序あり、皇室の御都合に於て未だ俄かに是の如くなる能はざるものありとなさんか、少くとも都下名譽職の輩のみにても、親しく御車寄に近て敬意を表し奉ることを得、更に一般人民の如きは別に宮城前に於て大なる名刺嚢あり各自名刺を捧げて遙かに賀意を表し奉る事を得るに至らば、希くは誠忠無比の人民が至仁至慈の皇室に咫尺し奉るの情に於て、層一層の厚きを加ん、是れ或は虚禮也兒戯也と云はん、而も其虚禮とし兒戯とするもの何ぞ又國民の至情に關するの大ならざるを知らんや。一小雜誌記者の微言、知らず取るものあるや如何。

地方の腐敗

都會の腐敗は今將た之を説くの要なし、唯地方の腐敗も亦都會に讓らざらんとするに至ては頗る慨然たらざる可らず。

封建の世、交通の便大に開けず、都會と地方と相疎隔して風氣の通し易からざる時に在ては、都會の腐敗は地方に浸染する太だ稀にして、都會は如何に淫靡華奢、腐心蠹腸の徒を以て充滿せらるゝも、地方人士は淸健高潔依然として能く質實の資を保全し得可しと雖も、今日の如く四通八達郵便あり、電信あり、陸には鐵道あり、海には滊船あり、加ふるに各種の新聞紙は都會の事情を一括して細大餘すとなく、旬日を出でずして全國の讀者の手に上らしめ、交通の頻繁なる地方都會は宛も一家も啻ならんとするに至ては、獨り都會の腐敗が滔々として來て地方人士を漂蕩するを拒く能はず。地方人士が勤儉の美德を失却して、著しく奢侈贅澤の風に趣きたるは、獨り村落の駄菓子屋にビール正宗の

酒瓶を發見し、ヒーロービンヘットの煙草を認むるに至りたるに止らず、衣服飲食總てに於て相競て時流を趁ひ、往々にして都人士を壓倒せんとするものあり、抑も地方人をして是の如くに至らしめたるの原因、素より一なる能はず、或は戰爭の結果として吾國が多額の償金を得たるが爲に、自ら地方經濟を搖撼して爾るものもある可く、或は征淸兵士が一時の賜金を携へて地方に歸り金錢の有るが儘に消費したるより起りたるもある可く、或は又國運の進歩は實際に富の程度を高昇して、是の如く生活の上進を促したるもあるべし、而れども要するに地方人士が勤儉の美德を失して、次第に奢侈の風を馴致したるは遂に掩ふ能はず、從て淳樸の氣風日に消散して、人情輕薄、狡獪姦譎の徒日に增殖して、詐僞、盜印、持ち逃け、遣ひ込みの事、獨り都會の出來事のみならざらんとし、古は如何なる事件も率ぬ訴訟沙汰と爲さゝるを以て家の名譽となしたるの風ありしに、今日に在ては裁判訴訟を爲すを以て、却て得意となさゝる可らざるに至ては、地方人士の墮落亦想ふ可きに非ずや。

從來地方に在て人を撰擧して名譽の職に就かしむるには、必ず一鄕の德望者を以てし、爾らざるも尙成る可く地位あり名望ある有爲の人物を得て、その地方を辱かしめざらんと勉めたりしを以て、地位なき名望なき野心家にして、一躍して直に代議士たり、縣會議員たるか如き太だ容易の事にあらざりしが、地方人士が一度賄賂の味を覺知してより、今日に至ては、總ての撰擧、國會議員、縣會議員、郡會、市町村會議員若しくは村長市町長を撰擧し、其他撰擧の方法に依て、人を撰出するものは、悉く不潔なる黃白の力に決せざるものあらず、其人物の如何は寧ろ第二第三の問題、否無能にても不品行にても、人物の價格は寧ろ資格に於て關係する所にあらず、要する所のものは金力の如何に在り、十錢にても二十錢にても高價なるものに向て投票を賣る是れ今日地方人士撰擧の狀況なりとす。

是の如き不潔の勢力によつて、縣會議員となり、代議士となる、所謂地方の政治家なるものも亦之を知るに

難からず、素より高尚なる道念あり、確實の政見あり、一意國利民福を謀るに孜々たる人物の如きは寥々として眞に人なくして、苟も政治家と稱せらるゝものは、率ね山に千年、河に千年、都鄙に流落して久しく一門の厄介物たりしものか爾らずんば即ち賭博もなし、藝者買もなし、先祖傳來の動産も不動産も、悉く賣り飛はし若しくは飛ばさんとするものに多く、別して縣會議員等の人物と素行に至ては尤も嘔吐するに堪へたるものあり、東京附近の或る一縣に在ては縣會議員にして吉原を以て宿泊所となして、日々縣會に通ふものすら其數に於て乏しかずと稱し、是の如く太しきに至らざるも、倘藝妓を受け出し、醜業婦を根引きし、各種の會合は、必す待合妓樓に於て開くといふは各縣比々として皆爾らざるなきか如し、記者の知人なる地方撰出の或る國會議員の如きは、首府に於ける各政客の比較的清潔なるに驚きたるものあり、都下今日の腐敗殊に政治家の腐敗は已に一世の痛疾たらんとするに際し却つて地方人士が其の清潔に一驚を喫すといふ、以て地方政客の腐敗が如何に極度に達したるかを見る可き也、近來各縣會に於ける公娼新設の動議が滔々一潟千里の勢力を以て議場に於て可決せられんとす亦怪しむに足らざる也。

而して地方敎育界は如何なる狀ぞ、小學校敎員の不始末は屢世の識者の視聽を駭かし、女敎員云云、女生徒云云は如何に屢良家の父兄をして憂懼措く能はしむるものぞ、中學校の如きは雨後の新筍の如く、各縣各地年に月に其數を加ふるは吾國敎育の爲め賀せざる可らずと云へども、玆に敎員となり、校長となる、その人物の中には頗る粗末千万と稱す可きもの亦其人に乏しからず、吾人の知る所によるも、その學生時代に在ては屢落第し、屢高利貸に窮迫せられ、當時彼に交るもの殆んど之れなかりし人物にして、今は堂々たる何縣何中學の校長とし、手腕家として、頗る名望ありと傳へらる、而してその手腕といふは、能く地方の縣會議員と交際し、共に花を引き、共に藝者買を敢てする所に在りといふ、嗟乎亦た驚く可き手腕にあらずや、素より全國の各中

學悉く皆是の如き校長教員を以て充滿するといふに非ず、右は寧ろ異數中の異數にして、多數に於ては率ね有德の君子に非ずと云はずと雖も、已に一人にても二人にても、是の如き人物の地方中學に適任者として能く地位を保ち、而も羽振をきかすを見ては、地方政界と共に、教育界も亦如何に淸潔ならざるかを卜す可らざるか、是の如き教育界に生育したる地方學生にして、德操識見の卓拔なるものを輩出し得ざるは數の自然にして、都下今日の風儀は書生を腐敗し墮落すと絶叫する所なりと雖も、彼等は都門に入るに先ちて、已に業に墮落腐敗し居るものなるを忘る可らず。

地方人士の腐敗率ね皆是の如きものなり、而して是等の腐敗墮落を矯正す可き勢力として、從來地方に在て名門望族として閭里の重を任し、鄕黨の風儀を支配したりし家柄と稱するものも、次第に其數を減却し、偶、之れあるも或は撰擧競爭の爲に、或は商業上の手違の爲に、或は一身の遊蕩の爲に、多少負傷せざるものの太だ少く、又先輩として學識あり德望ある人士は、率ね都門に移任し、地方に在て後進を誘掖し、その向ふ所を指示するもの全く之れなし、而して從來宗教少くとも眞宗繁榮の地方に在ては、地方人士高潔の理想を養ふたりしは、儒教の外には佛教ありしが、今や地方僧侶の學問道德は共に地方人士を風動するに足らざるのみならず、彼等從來の信仰をすら却て冷却せしめんとす、宗教は唯下等翁媼のみ信する所となり、苟も政治運動をなし、若しくは教育を云云し、其他地方有力の分子にして宗教信仰を語るもの殆んど之れなからんとす。要するに地方人士は唯墮落腐敗し去るのみにして之を救治す可き一の勢力を有せず、地方道德の危機蓋し今日より大なるものあらざる也。

都會は各種誘惑の相交錯する所、華奢淫靡、墮落腐敗する亦た免る能はず、唯地方人士の淸健にして質實なる幸にして一國の元氣を保全して枯渇せざらしむべし、而して今や地方の腐敗亦是の如し、國運の消長の爲め識者の三たび意を致す可き所、實に又此邊に存せざるか。

信仰論

文學士　福來友吉

第一　信仰の對象。

信仰なる意識は或る爾他の意識に伴隨して現はるゝ者なり。爾他の意識に伴隨する事なくして、只信仰ばかりが自家孤立して現はるゝが如きは曾て之れ無き事なり。即ち吾人が信仰すと言へば、是れ已に信仰せらるべき意識即ち信仰の對象を豫想す、吾人は信仰の對象なしに、只單に信仰すると能はさるなり。夫れ然り、然らば其の種類の如何なるを問はず、一切の意識に伴隨して、信仰は現はるゝを得る者なりや、或は一定種の意識に限りて、此に伴隨して現はるゝ者なりや、換言すれば、

信仰の對象は如何なる意識なりや。

先づ單一無雜なる意識は信仰の對象とならざるなり。例へば吾人が只單に「寒し」又は「暑し」と感ずるに止りて、其他何等の意識をも有せざるが如き場合は如何。此の如き場合に於ける吾人の心意狀態は、夫のコンヂラック氏が言へりしが如く、「吾人が寒さを感ず」又は「吾人が暑さを感ず」にあらずして、只單に「吾人＝寒し」又は「吾人＝暑し」なりとす。換言すれば、吾人の全意識界は只「寒し」又は「暑し」と言へる意識の充盈する所となりて、吾人は此に對して信仰も感せず、又不信仰も感せず、只單に「寒し」又は「暑し」なり、言はゞ信仰不信仰の境界を超越する者と稱すべきなり。」

次に單なる觀念連合は信仰の對象とならず。例へば吾人が眠に就くの前に當りて屢經驗するが如く、種々雜多なる觀念が一定の順序もなく、只單に吾人の心面に於て相前後して新陳代謝するが如き場合は如何。此の如き場合に於ては、吾人は此の新陳代謝する觀念と觀念との間に、何等の類似的又は接近的關係をも見るとあり、只單に彼此甲乙の觀念が前後相次ぎて心面に往

來するばかりなり。即ち夫の單一無雜なる意識の場合に於けるが如く、此の場合には、只單に相前後して往來する所の彼此甲乙の觀念ある耳。「吾人が彼此甲乙の觀念の連合を意識す」にあらずして、彼觀念が心面に現はるゝ時には「吾人＝彼觀念」なり、此觀念が心面に現はるゝ時には「吾人＝此觀念」なり、甲觀念の時には「吾人＝甲觀念」、乙觀念の時には「吾人＝乙觀念」なり。故に單なる觀念連合にありては、其の瞬間其の瞬間に於ける觀念が吾人の意識界に充盈し、吾人は此に對して信仰も感せず、又不信仰も感せず、只單に觀念の新陳代謝なり。故に單なる觀念連合は又信仰の對象にあらざるなり。

蓋し意識を其の形式の上より區別すれば次の三種にすぎざるべし。

第一　單一無雜なる觀念、

第二　單なる觀念連合、

第三　連合する觀念と其の連合するの有樣が共に意識に現はれたる觀念連合、

是なり。第一と第二とに付きては、既に其の大畧を論せり。故に余は第三の觀念連合は如何なる者なりやを、實例を以て示さんとす。例へば「砂糖は甘し」と言ふ命題に對するの意識狀態を内省せよ。蓋し「砂糖」と言へる意識は只單に「甘し」と言へる單一無雜なる意識にあらず。此の意識は一定の視的觀念例へば「白き色」「微砂の如き形」や味的觀念(即ち「甘し」と言ふ意識)觸的觀念、嗅的觀念等結合したる意識なり。故に「砂糖は甘し」と言ふ事は只單に「砂糖＝甘し」と言ふ事にあらず。吾人は「砂糖は甘し」と言ふ事により、只單に「甘し」を意味するのみならず、又此と同時に一定の視的觀念、一定の觸的觀念一定の嗅的感覺等を連想す。啻に此等を連想するのみならず、兼て又此等觀念が「甘し」なる味的觀念と如何樣に關係するやをも意識す、換言すれば觀念の連合する有樣を意識す。故に「砂糖は甘し」と言ふ事は只單に「甘し」と言ふ事にあらず、此は「甘し」なる觀念と同時に此と連合する視的觀念や觸的觀念や嗅的觀念を意味し、又此等觀念の連合する有樣

をも意味す。只「砂糖は甘し」と言ふて、殊に其の味的觀念を掲示したるは、是れ只砂糖を形成する種々の觀念群の中にて、其の味的觀念を意識の中心となしたるのみ、換言すれば味的觀念に注意を向けたる耳。假令吾人の注意が味的觀念に向けられたればとて、吾人の意識界中には、只味的觀念ばかりが存在して、其他一切の觀念は此れ無きにあらざるなり。吾人は味的觀念を意識すると同時に、此と連合する他の觀念を意識し、兼て又其の連合法を意識す。今此を視界に譬へて言はゞ、命題の賓辭に對する觀念は注視位の如く此れ連合すべき爾他觀念は瞻視位の如きなり。眼を開きて前庭を見、殊に其の中の一定の樹木例へば松樹を注意して視よ。此の時吾人兩眼の視軸は松樹に向つて輻湊するのみならず、兩眼の璉珠は此の松樹に向つて調節すべし。此の如く一定の物躰に視軸を輻湊し、且つ此に璉珠を調節して此を視るの作用を名けて注視と稱し、注視されたる物躰を注視躰と稱す。注視されたる物躰は最も分明に見ゆる者なり。然れども苟も吾人が見る所の者は只單に注視されたる物躰に限るにあらず。吾人が前庭の松樹を注視するの際、吾人の視界にある者は只獨り松樹の耳にあらず。松樹の右方に桐樹あり、松樹の左方奇石あり、松樹の前方に燈籠あり、松樹の後方に生垣あり。吾人は松樹を注視すると同時に、其の左右前後の後躰をも視、且つ松樹が其の周圍の物躰と如何なる關係を有するやをも見るなり。此の如く注視するの外に、其の注視躰の周圍の物躰を視るの作用を名けて瞻視と稱し、瞻視されたる物躰を瞻視躰と稱す。瞻視躰は注視躰よりも不分明なり。然れども吾人は此を見ざるにあらず。吾人の視界は注視躰と瞻視躰とより成立する者なり。吾人の意識界も此の如し。吾人が「砂糖は甘し」と言へる時には只「甘し」のみが意識界に於て、其の他の觀念が意識界に無きにあらず。味的觀念、視的觀念、觸的觀念嗅的觀念が同時に意識界に存在するのみならず、且つ此等觀念相互の關係も意識界に現はれ居れとも、只味的觀念が意識界の主坐に居りて、爾他の觀念は其の周圍部に居るのみ。換言すれば、味的觀念は

意識界の注視位に居り、爾他の觀念は其の瞻視位に居るなり。ウント氏は或る觀念を意識界の注視位に持ち來るの作用を名けてアッパーセプチオンと稱し、注視位に持ち來たされたる觀念をアッパーセプトされたる觀念と稱せり。故にウント氏の語を「砂糖は甘し」と言へる命題に應用する時は、此の命題に對する心意の狀態はアッパーセプチオンにして、「甘し」は アッパーセプトされたる觀念、爾他の觀念はアッパーセプトされざる觀念なり。

已に單一無雜なる觀念は信仰の對象にあらす、又單なる觀念連合は信仰の對象にあらず。果して然らば信仰の對象は遂に如何なる意識なりや。是れ必ず連合する觀念と其の連合する有樣とが共に意識に現はれたる所の觀念連合、即ち認知されたる所の關係を以て相連合する所の觀念群ならさるべからず。何となれば吾人の意識中より、其の單一無雜なる觀念並に單なる觀念連合を、信仰の對象にあらずとして、此を除く時は、其の殘留する所の者は只獨り認知されたる關係によりて相連合する所の觀念群是のみ、從つて若し信仰の對象なる者果して之れ有りとせば、其の對象は即ち此の觀念群ならさるべからざればなり。而して實際に於て此の如き觀念群は信仰の對象となり得べき者なり。即ち「白し」(砂糖の視的觀念)「甘し」(砂糖の味的觀念) 又は糖嗅(砂糖の嗅的觀念)を信仰すと言ふ事は實に無意味なれとも、此の「白し」「甘し」「糖嗅」や其の他種々の觀念が認知されたる關係によりて相連合する所の觀念群「砂糖」として、其の中より殊に「甘し」に注意して「砂糖は甘し」と言ふ時は、則ち吾人は此に對して信仰を感するに至るなり、即ち「砂糖は甘し」と信仰する事は意味を有するに至るなり。故に

信仰の對象は認知されたる關係によりて相連合する所の觀念群是なり。

余は便宜の爲め、右の如き意味に於ける觀念群を稱して觀念系統と言はんとす。故に

信仰の對象は觀念系統是なり。

觀念系統は其の係る所の觀念の數の増加と共に廣大と

なり、其の觀念相互間の關係の緻密になると共に整頓す。物理學は物理現象と言ふなる外界に係る觀念系統なり、物理學は生活現象と言へる外界に係る觀念系統なり、心理學は心意現象と稱する內界に係る觀念系統なり。要するに一切科學なる者は廣大なる觀念系統にすぎざるなり。然れども科學にても、最初よりして、今日の如く廣大なる觀念系統にあらざるべし。蓋し其の初は極めて單一なる觀念系統が相分離して多く存在し、此等が其の相互間の關係を認知せられて、次第に連合し、以て今日の如き廣大なる觀念系統となりしならん。故に科學即ち廣大なる觀念系統は、數多の單一なる觀念系統が認知されたる關係によりて連合する所の觀念系統群、即ち觀念系統の系統にすぎざるなり。而して其の單一なる觀念系統の中にて、最も單一なる者は、少くとも三個の意識よりなる、即ち連合する二個の單純觀念と、其の相互の關係の認知と是なり。然れども實際に於て、純粹に單純なる二個の觀念と、其の相互關係の認知とのみより成立する所の觀念系統は殆んど之れ無き程なり。如何程單一なる觀念系統にても、大抵は三個以上の觀念と、其の相互關係の認知とより成立す。例へば「砂糖は甘し」と言ふ事は隨分單一なる觀念系統なれども、尙一定の視的觀念、一定の觸的觀念、一定の嗅的觀念、一定の味的觀念、及び其の相互關係の認知より成立す、即ち四個の觀念と、其の相互關係の認知より成立す。盲目者の意識界には、視的觀念は皆無なるが故に、「砂糖は甘し」と言ふ事に對する彼の觀念系統は、吾一の者よりも單一なり。然れとも尙三個の觀念(觸的觀念、嗅的觀念、味的觀念)と、其の相互關係の認知とより成立す。然れども兎に角右の如き單一なる觀念系統が數多相集合し、其の相互關係の認知によりて相連合するとによりて、科學の如き廣大なる觀念系統が出來るなり。故に科學の原素は右の如き單一なる觀念系統なり。此の單一なる觀念系統を生するに至るの經過を判斷作用、或は單に判斷と稱し、此の判斷に對する意識を判斷識と稱し、判斷識の言語に表したる者を命題と稱す。故に科學の原素は判

斷識是なり、判斷識が組織的に集合して以て科學となる。故に科學即ち廣大なる觀念系統が信仰の對象となるを得るは、畢竟其の原素的觀念系統即ち判斷識が信仰の對象となるを得るによるなり。故に余は次の如く言ふを得、即ち

　信仰の對象は判斷識是なり。

信仰の對象に付きて、ジェームス、ミル氏は次の如く言へり。

　吾人が感覺を感する時には、吾人は吾人が該感覺を感ずと言ふ事を信仰するなり。……蓋し感覺を感する事と、吾人が該感覺を感ずと言ふ事を信仰する事とは、別々の事柄にあらざるなり。「余は感覺す」と言ふ事と、「余は余が感覺する事を信仰す」と言ふ事とは、二個の別々なる意識狀態を言ひ表はしたるにあらずして、全く同一なる意識狀態を言ひ表はしたる者なり。元來感覺は一の感識なり。然とも此の感識と、此の感識を信仰する事とは同一なり。……感識は一にして、唯名に二個あるのみ。（人間心意の分解）、

（因に記す。左の引用文に於て、余は主として原著者の意を取るに勤め、必すしも其の文辭に拘泥せず。以下此に倣ふべし）。

此の言や、恰も單一無雜なる感覺が信仰の對象となり得と言ふが如くに見ゆるなり。果して然りや。其の行文稍曖昧にして、ミル氏の眞意は「余は感覺す」と言へる判斷識が信仰の對象となると言ふにありや、又は單一無雜なる「感覺」が信仰の對象となると言ふにありや、余は只此文にてはミル氏の眞意の那邊にあるやを知るに困むなり。然れども

論者或は言はん、「余は感覺す」と言ふ時には、是れ只外官より得られたる單一なる感識を言ひ表はすなり。然れとも「余は余が感覺する事を信仰す」と言ふ時には、是れ二個の事を言ひ表はすなり。即ち單一なる感覺と、此と連合する所の著しき觀念、則ち自我の觀念との二個を言ひ表はす者なりと。然れども余を以て之を見るに、其の連合たる事は、兩方の場

合に於て同一なり。吾人は位置の觀念、幷に統一の觀念を連想する事なしに、只事物の感覺例へば薔薇の視的感覺ばかりを意識する能はず。‥‥從つて吾人は自我の觀念を連想する事なしに、只單に感覺ばかりを意識する能はざるなり。‥‥余の感覺が在りと言ふ時には、何時でも、此と同時に自我の觀念が在るなり。(同書)。

と言ふに至りて、ミル氏の眞意は大に明白なり。即ち自我の觀念なくんば、則ち感覺なしと言ふ事、是れミル氏の眞意の存する所なり。若し果して然らんか、人間は單なる感覺、即ち「余＝感覺」を以て其の經驗を初むる者にあらずして、「余は感覺す」なる判斷識を以て其の經驗を初むる者なり。然れども是れ大なる誤謬なり。人間最初の經驗は「余は感覺す」にあらずして、只「感覺」是なり。例へば「赤兒が其の經驗の第一步として飢餓を感するとせんか、赤兒の意識中豈に「余は飢餓を感ず」の余なる者にあらんや、彼の意識中には只「飢餓」是在るのみ。勿論彼の意識中に飢餓と言ふ名辭ありと言ふにあらず。彼の意識中には、只吾人が飢餓と稱する所の名辭に對する、一種無名の感覺あるのみなり。然るにミル氏の見は此に至らずして、氏は「余は感覺す」と言ふ事の前に於て、更に單一無雜なる「感覺」なる者あるを知らざるなり。故にミル氏の見解中には、眞正に單一無雜なる感覺は之れ無きなり。氏が稱して單一無雜なる感覺と言ふ所の者は、眞に單一無雜なる感覺にあらずして、其の實「余は感覺す」と言へる判斷識なり。從ふて氏が單一なる感覺も信仰の對象となると言ふは、眞に單一無雜なる感覺が信仰の對象となると言ふにあらずして、其の實「余は感覺す」と言へる判斷識が信仰の對象となると言ふに外ならざるなり。氏が自我の觀念なくんば感覺はなしと言ふ事は大に非なり。然れども此の意味に於て單一なる感覺は信仰の對象となると言ふ事は、則ち余の所謂「信仰の對象は判斷識是なり」と言ふ事と相調和する者なり。

第二　信仰なる意識自家。

以上論したる所によりて、信仰の對象の何たるやは畧

明になりたりと信ず。次に起る問題は

信仰其物は如何なる意識なりや、

と言ふ事是なり、此に付きては先つ吾人をしてシェームス、ミル氏の言ふ所を聞かしめよ。氏は曰く、

信仰と單なる想像との間には、何等の種類的差別なし、只觀念連合の力度の差別あるのみなり、即ち二個の事實の繼續的連合又は其の同時的連合を信仰するとは、吾人が此の二個の觀念中の一個を意識する毎に、必ずや吾人は他の一個をも意識せざるを得ざる程、此の兩個の觀念が强固密着に連合する事に外ならざるなり。(同書)。

蓋し觀念連合の力度なる者は、觀念の連合する難易によりて量るより外なかるへし。吾人が甲觀念を意識するや、此に次きて直に乙觀念を意識するを得ば、是れ甲觀念と乙觀念との連合が易きなり、即ち其の連合力度が强きなり。否らざる時は、此の兩觀念の連合が難きなり、即ち連合力度が弱きなり。若し甲乙觀念の連合にして難からんか、則ち此に對するの信仰も或は生せらるべきか。然れども甲乙觀念の連合の易き事の感識が、即ち甲乙觀念より成立する判斷識に對するの信仰其物なりや否や。是れ未だ俄に斷定すべからざる所あるなり。

屢反復されたる觀念連合は大に連合し易く、餘り屢反復されざる觀念連合は大に連合し難し。故にミル氏の說による時は、屢反復されて連合し易くなりたる觀念連合は、屢反復されずして連合の難き觀念連合よりも多く信仰さるべき筈なり。然れとも果して反復の多少によりて生ずる觀念連合の難易が、此に對するの信仰を支配する者なりや。「十一月三日」と言ふ觀念と「天長節」と言ふ觀念とは、屢の反復によりて固く相連合し、「十一月三日」と意識せば直に「天長節」を思ひ出し、「天長節」と意識せば直に「十一月三日」と思ひ出し、以て「十一月三日は天長節なり」と言ふ事は、大に强き力度の觀念連合となり居るなり。此に反して「明治三十三年三月廿五日」なる觀念と、「日曜日」なる觀念とは余の意識界中に於て、餘り强き連合をなし居ら

ず。即ち「明治三十三年三月廿五日は日曜日なり」と言ふ觀念連合の連合力度は、「十一月三日は長節なり」と言ふ觀念連合の連合力度よりも大に弱きなり。然れども實際に於て「十一月三日は天長節なり」と言ふ事も、「明治三十三年三月廿五日は日曜日なり」と言ふ事も事實なり。從ふて余は此の兩者に對して同一程度の信仰を感ず、余は前者が後者よりも強き連合を有する事を自覺すれども、余が此の兩者に對するの信仰は此が爲に甲乙の差を生する事なり。若しミル氏の言へるが如く、連合力度の感即ち信仰なりとせば、前者の連合力度が後者のよりも強き故を以て、吾人は後者に對してよりも、前者に對してより多くの信仰を感せざるべからざるの理にあらずや。然れとも實際に於て此の如き事なし、是れミル氏の說を以て解すべからざる事なり。殊に面白き事實は吾人が或る一觀念を明に意識し居り、此に續きて他の或る觀念が連合せざるべからざる事を確知しながら倘吾人の記憶の不完全なるが爲に、吾人は其の連合すべき觀念を連合せしむ能はざる場合是なり。如何なる機因にやあらん、一日突如として人の顏面の形が余の心面に現はれたることあり。余は種々工夫想像を回くらして、此の顏形を思ひ出したるにあらずして、只突如として俄に余の心面に現はれたるなり。然るに此の顏形は只單に余の心面に現はれたるに止まらずして、余は此に次きて他の事を感せり、即ち余は何處かに於て、此の顏形に對する實の人を見し事ありと言ふ事を感せり。其の處は如何なる處なるやは知れず。然れとも兎に角何處かに此の顏の人を見しことありと言ふ事を慥に感ぜり。余は其の見たるの所は如何なる場所なるやを思ひ出さんと勤むれとも、思ひ出す能はず、只何處かに於て此の顏の人を見たるに相違なしと感したるに止まりき。其の後三回右と同一の事を經驗し、其の度每に如何なる場所なるやを思ひ出す能はず、只何處かに於て此の顏の人を見たることありと言ふ感じばかりにて止りしが、其の後第四回の經驗に於て、例の如く突如として彼の顏形が心面に現はれたるが、此に次きて暫時の苦心（此の顏を見たる

の場所を思ひ出さんとするの苦心)の後に、又突如として此の顔を見たる場合の觀念が甚だ明瞭に心面に現はれたり。是に於て余は「此の顔を斯々の場所に於て見たり」と言ふなる觀念連合を生じ、而も此に對して惜なる信仰を感ぜり。此によりて之を見る時は、信仰なる意識は必すしも觀念連合の易き事の感にあらず、即ち觀念の連合力度の感にあらざるが如きなり。

ミル氏は「二個の事實の繼續的連合、又は同時的連合を信仰する事は、吾人が其の二個の觀念中の一個を意識する毎に、必すや吾人は他の一個をも意識せざるを得ざる程、此の兩個の觀念が強固密着に連合する事に外ならず」と稱して、恰も信仰とは觀念の必然的連合の意識なるが如くに說く。若し吾人の信仰の對象となり居る所の觀念系統にして、悉く觀念の必然的連合より成立する所の者ばかりならんには、信仰は觀念の必然的連合の意識に外ならずと言ふも可ならん。然れども吾人の信仰の對象となり居る所の者は、必すしも觀念の必然的連合によりて成立する所の觀念系統のみなりや否。事實は其の反對を證するなり。吾人は「明日太陽は東天に上る」と信仰す。「明日」と「太陽」と「東天」と「上る」との四觀念の間には何等の必然的連合もなし。吾人は此の四觀念を連合せざるべからずと感ぜず。若し「明日太陽は西天に上る」と言はゞ如何。「明日」と「太陽」と「東天」と「上る」との間に必然的連合の無きは、「明日」と「太陽」と「西天」と「上る」との間に必然的連合の無きと同一なり。然れども實際に於て、吾人は「明日太陽は東天に上る」と信仰して、「明日太陽は西天に上る」と信仰せず。何故に然るや。其の理由は觀念連合の力度のみにあらざるが如し。若し觀念連合の力度の感即ち信仰なりとせば、吾人は同一なる觀念系統に對して、常に同一程度の信仰を感すべき筈なり。然れども事實は吾人に其の必すしも然るにあらざるの例證を與ふ。今日に於て吾人は「人間に貴ぶべき所の者は金錢なり」と信するかと思ひ居る中に、明日に至りて或る感情の爲めに動されて、「人間に貴ぶべき所の者は學問なり」と信するにいたり、斯くあるかと思ひ

居る中に、又其の後に至りて心意が變化して、「又人間に貴ふべき所の者は金錢なり」と信ずるに至る。此の如く其所信が時によりて動搖變化する事は、是れ思想の不確乎なる青年者に往々之れ有る事なり。何故に此の如く動搖變化するや。若しミル氏の説が可なりとせば、此れ全く「人間に貴ぶべき者」なる觀念が、其の「金錢」なる觀念と「學問」なる觀念とに對する連合力の動搖變化によりて生ずべき結果ならざるべからず。然れども果して此の如くなるか。「人間に貴ぶべき所の者は金錢なり」と信仰する時に於て、「人間に貴ふべき所の者」なる觀念と「學問」なる觀念との連合の易きは、「人間に貴ぶべき所の者は學問なり」と信仰する時に於ける連合の易きに同じ。「人間に貴ぶべき所の者」なる觀念と「金錢」なる觀念との連合の易きも又此の如し。故に吾人の信仰は「人間に貴ぶべき所の者は金錢なり」と「人間に貴ぶべき所の者は學問なり」との間に動搖す、然れとも此の兩者の觀念連合の易きは、此に對する信仰と共に動搖せず。故に信仰は觀念連合の力度の意識にあらず、信仰は觀念連合の力度外の或る意識なるべきなり。

トンプソン氏の如きは、

信仰は豫期の念より成立す。（マインド雜誌第七號）

と稱し、更に豫期の念を定義して、

經驗を再理的の者として認識する事なり。（同上）

と言ひ、從ふて

信仰は再理的認識なり。一層精密に言はゞ、再理的としての經驗を認識する事なり。（同上）

と言へり。蓋し經驗を再理的の者として、此を認識するは、是れ一種の判斷なり。故にトンプソン氏の言ふ所は、只仰信の對家となるべき者に關す、信仰其物の意識に分らざるなり。

然らば信仰なる意識は終に如何なる者なりや。曰はく、信仰はミル氏が言へる如くに觀念連合の力度の感にあらず、又トンプソン氏が言へるが如くに、經驗を再理的の者として認識する事にもあらず。信仰は信仰とし

て全く一種特殊の情的意識なり。ブレンタイ氏曰はく、思想と此に對する信仰との關係は、思想と此に對する欲望との關係の如し。吾人は或る者を思惟することなくして、只單に欲望する能はず。然れども欲望は思想自家にあらず。欲望一思想されたる事物に對するの全く新しき特殊の意識狀態なり。此と同樣に、吾人は或る者を思想することなくして、只單に信仰すること能はず。然れども信仰は思想自家にあらず。思想が信仰の對象となるに及びては、意識は單なる思想と全然別種なる一新狀態となりたるなり。故に思想と此に對するの信仰とは、意識中にありて二個の別異狀態なりとす。其の別異なるは、恰も思想と此に對する欲望との別異なるが如きなり。(ブレンタイ氏心理學)

實にブレンタイ氏が言ふが如く、思想と此に對する信仰とは全く別物なり。例へば「明日太陽は東天に上るべし」と言ふ思想即ち制斷識と、此に對する信仰とは全く別物なり。故に吾人は「明日太陽は東天に上るべし」と言ふ事を信仰すと雖、吾人は如何程此の命題を解剖分拆するとも、吾人は其の內に信仰の原素を發見する能はざるなり。是れ信仰なる者は、此の命題中に含まる所の者にあらずして、吾人が此の命題に對するの一種の感情にすぎざればなり。

凡そ定義なる者は、分子又は分部より合成せる複合意識を分解して、其の分子又は分部に還元し、以て斯く還元されたる分子又は分部を列記する事に外ならず。故に定義し得らるべき意識は、必ずや複合意識ならざるべからず。單一無雜なる意識は定義を以て說する能はざるなり。例へば「雪は白き冷なる物なり」と言ふ事を以て、雪の定義とせよ。苟も此の如く定義に付せらるゝを得るは、是れ雪なる觀念が少くとも「白き」と「冷」との二個の單文意識に還元せらるゝを得るが故なり。然るに今更に進んで、「白き」の定義は如何、「冷」の定義は如何と問はるゝに至らば、余は此に答ふるに何の辭を以てすべきやを知らざるなり。是れ「白き」と「冷」とは單一無雜なる意識にして、更に此を他の分子

又は分部に還元するを得ざるが故なり。信仰も全く單一無雜なる一個の情的意識なり、恰も「白き」や「冷」が單一無雜なるが如くに單一無雜なり。故に信仰には定義の附すべき樣なし、强ひて之を言はゞ、

信仰は觀念に對する一種の情的意識なり、

と言ふより外なきなり。故に余はヒユーム氏の言を以て大に味ある者と信ずるなり。氏は曰はく、

信仰は觀念の特殊なる性質又は其の特殊なる連合順序より成立する者にあらずして、……心意が該觀念に對して感ずる所の感情より成る者とす。實に余は此の感情の何たるやを説明する能はず。只其の眞正固有の名は即ち信仰なりと言ふを得るのみ。信仰の言たるや、何人と雖、其の日用生活に於て常に充分に理會する所なり。然り而して此を説明するに至りては、哲學に於てと雖、信仰は制斷の觀念と想像の觀念とを辨別し得るの性能を具へたる心意によりて、感ぜられたる或る物なりと言ふより以上の事は出來ざるなり。（ヒユーム氏ヒユーマン、アンダースタンヂング、第五節）、

信仰は觀念系統に對する一種の情的意識なり。然れども情的意識には二種あり、(一)快なる情的意識と、(二)不快なる情的意識と是なり。今信仰なる意識は此の二種類中、孰れの情的意識に屬するやと言ふに、此は快なる方に屬する者なり。尤も凡て快なる意識状態は、其の最初の程は大に快なる者なれども、吾人が此に馴るるに從ふて、次第に其の性感が減少し、遂に殆んど中性の意識に歸する者なり。信仰も又然り。吾人は斬新にして且つ意味の深き制斷識を得たる當時には、吾人は此の制斷識に對して一種新鋭なる快感を負ぶ所の信仰を感ずる者なり。然れども吾人が此の制斷識に馴るるに從ふて、其の快感は次第に減少して、只純粹中性なる信仰、即ち確實なる意識となるなり。純粹中性なる信仰は一種の平和的意識にして、只不快感の無き有樣に止り、別段積極的性感を有せざる者なり。然れども倘此でも、吾人は此の中性信仰を絶待的に中性無頓着の意識なりと言ふ能はざる所以の者は、此の中性信

仰が一旦害せらるゝに及びて、吾人は强大なる不快感を感ずるが故なり。吾人が平生別段の快感も感ぜずして、只單に信仰する所の事柄が、他人によりて反對否定さるゝに出會する時は、吾人は直に强大なる一種の不快を感じ、其の不快感が次第に高まるに至りては、終に憤怒、驚怖、悲憂等の感情を生ずるに至る事は、吾人の常に經驗する所なり。平素酒を飲む人の中には、酒を飲む事によりて別段積極的快感を感ぜざれども、此を飲まざることによりて激烈なる生理的不快を感ずるが故にとて飲酒する人あり。此の如き飲酒家に取りては、酒の味は積極的快感を生ぜざるも、少くとも此を飲むことによりて、若し此を飲まずんば生ずべき生理的不快を生ぜしめざる事に於て、酒味は絶待的に無頓着なる者にあらず。此れ丈の意味に於て酒味は彼に取りて快なりと言ふを得るなり。信仰も又此の如き者にて、吾人が平素信仰する時には、此の信仰に何等の積極的快感も附帶ぜざれども、其の一旦害せらるゝに及びて、大に不快感を生ずと言ふ點に於て、信仰は絶待的に無頓着なる意識にあらずして、寧ろ快感の方に屬する者と稱すべきなり。

此の故に信仰は觀念系統に對する一種の快的情操なり、少くとも一種の平和的情操なり。然るに凡て吾人が快的情を以て對象を感識するは、即ち吾人が此の對象の價値を認知することに外ならず。故に或る方面より見れば、

信仰は觀念系統の價値の感なり、

と言ふを得るなり。然れども價値の感には大躰二種あり、(一)直接と(二)間接と是なり。名人の繪畫を見る時は、吾人は一種の美的快感を感じ、吾人は此の繪畫を以て可なり(有價値)となす。繪畫が直接に美的快感を吾人の心意に生ず。此の如き場合に於て、繪畫の價値は直接的の者なり。然るに此の繪畫を購求する爲には金錢を要す。此の金錢自家は何の價値をも有せざれども、其の繪畫を購求するを得る所以の手段たるの點に於て價値を有するなり。此の如き價値は間接的の者なり。吾人が觀念系統に對しても、又此と同樣の事あり。觀

念系統が只單に其の系統の大に論理的に整頓するとによりて、信仰の對象となるとあり、理性的信仰は是なり。然るに又觀念系統が、其の系統の整頓せると否とに拘らず、吾人生得の情的要求を滿足せしむるに足るとによりて、信仰の對象となることあり、情性的信仰是なり。前者は觀念系統の形式自家の價値の感なり。後者は觀念系統を情的要求を滿足せしむる所以の手段と見ての價値の感なり。故に前者は直接的にして、後者は間接的なりと見ふを得べし。併し孰にしても、信仰は觀念系統の價値の感なりと言ふを得るなり。

婚姻論

河上翠陵

家庭は樂園なり＝唯物的進化論者の婚姻觀＝共同的婚姻は原始時代にも行はれず＝四千年前の兩性關係＝一夫一婦制は人類の至情に出づ＝眞正の婚姻＝モーセとモハメッドの婚姻觀＝婚姻は契約に非ず＝夫と婦とは君主と議會との如し＝保羅の夫婦論＝婚姻を解くの原因は只二のみ

家庭は神の庭なり、天國の樂園なり。「望」の光此に輝き、「愛」の花此に咲く。世の波濤高き時は、家庭は是が防波堤たり。浮世の暴風吹き荒む時にも家庭は常に平和ならざるべからず。されど現今の家庭は果して吾人の理想するが如き美はしきものなるか。近世の過激なる社會主義者は動もすれば家族的結合を絶滅せんと欲し、極端なる法理論者は、婚姻を以て契約と爲し、唯物的進化論者は、今日の婚姻は共同的婚姻の進化したる者なりと言ふ。婚姻に對する觀念が斯くの如く非倫理的なるに及んで、世人は漸く婚姻の神聖を疑ひ、家庭的結合は漸く微弱となりぬ。是に於てか吾人は婚姻の眞相を論じて、美はしく、樂しき家庭の由來する所を明にせんと欲す。

唯物的進化論者は謂へらく、「家族の原始的狀態は、共同的婚姻なりき、換言すれば一種族の間には制限なき兩性の交情行はれたり。次ひて掠奪婚となり賣買婚となるに及んで、共同的婚姻は廢れて、占有的婚姻は起れり、一夫數妻と言ひ、一夫一婦と言ふも、只此の占有的婚姻の態樣に外ならず。されば妻を占有するの風

を順致したる者は只暴力(フォース)のみ。現今諸國は法律を以て夫妻の關係を定むるも、其源や實に暴力を以て妻を掠奪買收したるに始まれり」と。此の說や結婚の源を以て全然腕力に歸したるものなり。されど唯物的進化論者にして、共同的婚姻が原始時代の家族的狀態なりしことを主張せんと欲せば、多くの正確なる證據を擧げて、明に自說の正當なる所以を證せざるべからず。敢へて問ふ原始の時代に於ては、女子は凡べての男子の妻なりしか。男子は凡べての女子の夫たりしか。吾人は之を史乘に徵し、之を傳說に考ふるに、何の國、何の時代に於ても、人類の家族的觀念と風習とは、大抵現今の狀態に類似し、常に一夫一婦の制度を離れざりしを認む印度歐羅巴(インドーユーロピアン)民族は古來曾て一男一女以外の婚姻を認許せず、一夫多妻若しくは一婦數夫の何ものたるを知らざりしが如し。西洋人が常に一夫多妻國の好適例とする支那に於てすら、婚姻の典式を重ずること極めて大にして、女子は二夫に見ゆるを屑とせず。されば其閨中には如何に多くの妾婦あるも眞に正妻たる者は只一人のみ。支那人が祖先を崇拜すること極めて大なるは、其の血統の亂れざるを尙ぶの證に非ずや。故に世人の所謂一夫多妻なる者は、只一夫一婦の制に蓄妾の風を加へたるに外ならず。是れ實に歷史の證明する所にして一點の疑を容れず。夫れ原始の男女關係を以て共同的交情となすこと唯物論者の說く所の如きは、是れ人類原始の狀態を以て野蠻禽獸に類すと爲すものなり。換言すれば人類は無數の年月と無限の困難とを經て漸次に最下等最劣等の狀態より脫化したりと曰ふものなり。故に「原始時代の婚姻は野合的共同婚なりしや、又は一夫一婦制なりしや」てふ問題は、「原始時代の人民は野獸的狀態に在りしや、將た理性的人類たりしや」てふ問題の一部分に外ならず。人類にして始めより理性を具へ、理解力を有したらんには、兩性の交情焉んぞ野獸と均しきを得んや。吾人は之を歷史に考ふるに、人類が原始時代に於て禽獸に類せしことを證明するの材料一も是ある無し。紀元前二千年に於て、人類は既に文化の曙光を放ちしことは、史乘の明記する所なり。即ち

今を距ること四千年以前に於て人類は最早禽獸的狀態に居らざりしなり。加之言語の發明は更に遠く其の以前に在りしことを知らば。人類は原始の當時實に充分の理性を具へし者なることを知るべし。ウィルヘルム、フォン、フンボールトは曰く言語を用ふるの法を知るは是れ人の特性なり。而して人類は言語を發明するに先て、既に人たるの理性を具へたるや明なりと。マクス、ミュレル亦曰く『吾人は人類が時（タイム）の上に印したる足跡を踏みて、歷史の最始に溯るに人類は開闢の當時既に智識の賜ものを有したるを認む。人間の心より生み出したる最上古の美術は即ち言語なり。文書未だ出でず傳記未だ成らざるの時にも言語は既に存在して、歷史の曙光を放ちしより現代に至るまでの間を連結するの鎖を爲せり。吾人が今日用ゐる所の言語は實に吾人の最初の祖先が發明したる所に外ならず。是れ豈人類が最初より理性を具へたるの證に非ずや。少くとも言語を發明する丈けの美術心を有したるを示せるものに非ずや』と。吾人は如何に歷史を討究するも、到底人類は原始に於て野獸的蠻民なりしことを證するの材料を發見する能はず。原始時代の人性が甚だ不完全なりしとは吾人も之を認む。されど人類は始めより人性を具へたり。換言すれば、人は始より万物の靈たる資格性質を具備したるなり。言語の發明に於て、技術の發達に於て理性を具備したる原始の人類が、豈に特り家族的生活に於てのみ禽獸と同じかりしの理あらんや。彼の一夫多妻的種族と稱せらるゝ國民の間にすら、婚姻は人生最大の儀式を以て目せられ、正妻と妾との區別を存したるを見れば、一夫一婦の制は、人性の至情に出で、世界開闢以來常に人類の家族的法則なりしことを知るに足らん。基督教の經典中創世紀の記する所は、よし荒唐不稽に類するの嫌あるも、猶微妙なる人生の哲理を吾人に教ゆるものあり。曰く、世界草創の始、神は已の容貌にかたどりて人類を造り、之を兩性に分ち、一男に配するに一女を以てし、エデンの樂園を以て新夫新婦の居と爲せりと、何等の優美、何等の高潔。若し唯物論者の如く、一夫一婦制は暴力を以て共同婚を制限

したるの結果なりとせば、家族の神聖なる者果して何處にかある。吾人は一夫一婦制を以て造化の指示したる、兩性必至の關係と爲すものなり。

婚姻の原始的狀態を討究して玆に到れば、吾人は愛を基礎としたる婚姻は倫理的關係並に倫理的狀態なることを論せざるを得ず。吾人の見る所を以てすれば、男女の區別は婚姻を組成する唯一原因に非ず。眞正の婚姻は心を以て心に配し、精神を以て精神に配するに在り。故に男女にして相補け相賴り、吉凶、禍福、悲喜、苦樂、貧富を與にするを豫期し得ざる限りは、決して婚姻を結ぶべからず。婚姻の神聖なる所以は此に存す。

ソロモンの歌ひし所の王と賤女との婚姻は、何ぞ其れ高潔神聖なる。王は賤女を娶りて毫も恥つると無く、徐に彼女を携へて婚賀の筵に上り、衆人稠座の中に之を紹介せり。彼女が門衞に辱しめられたるや、王は懇ろに之を慰撫し、敢へて之を厭ふと無かりき。悲哀の時にも、不幸の時にも、歡喜の時にも、王は常に彼女に親切なりき。彼女の姿色衰ふるの後にも王は猶滿腔の愛情を彼女に灑きたりき。噫是れ實に婚姻の眞相にして、猶太の經典に見はれたる婚姻觀がモハメッドの「コーラン」に見はれたる婚姻觀と異なる所以亦此に存す。モハメッドも亦多少の制限を一夫多妻制に附せざりしに非ざりしかども、而かも彼は敢へて一夫多妻の不法なるを唱へざりき。若し「アラビヤンナイツ」とソロモンの謠歌とを併せ誦せば、モハメッドとモーゼとは如何に愛に對する觀念を異にしたるかを知るに足らん。モハメッドの眼に映じたる愛は到底、肉軆の情欲と地上の慾念との外に超絶して理想の界に入る能はざりき。モーゼに至ては高潔なる心を以て常に理想界を見たり。地上を離れて高く清天白日を望めり。是れ猶太民族が常に一夫一婦の美風を成したる所以か。

一たび愛情を誓ひしものは決して漫に之を破るべからず。如何なる災厄も、如何なる痼疾も、愛の鎖を斷るべからず。人は老衰するも愛は之と共に衰ふるとあるべからず。年と與に深く、星霜を經るに從て愈々純潔なるべきものは即ち眞正の愛なり。是れ豈に倫理の大

道に合したるものに非ずや。倫理的分子は常に婚姻的關係を司配して、凡べての誘惑に勝たざるべからず。家庭の神聖は斯くの如くにして見るべし。之に反して、自由契約の觀念を以て同居するの夫婦は決して家庭を成す能はず。獨立せる男女が只契約に依りて同棲するものは、是れ一の倶樂部若しくは會社にして家庭に非ず。然り而して家族の倫理的結合を固うするには夫を以て婦の上に置かざるべからず。家庭は政府的ならずして秩序的組織的ならざるべからず。個人の群居に非ずして規律ある結合ならざるべからず。切言すれば、家庭は一の立憲王國、若しくは立憲共和國の如し。若し夫にして己れの權力を濫用せざると、立憲國の君主若しくは大統領の如くんば、是をして家族を統一せしむるも豈に暴虐を來すの恐あらんや。善美なる理想的家庭に於ては、夫は恰も君主の如く大統領の如くにして、婦は實に議會の如くならざるべからず。故に吾人は婦をして絕對的に夫に服從せしむるを好まざると同時に、夫をして漫りに婦を抑制せしむるを喜ばず。故に又男女同權論に反對すると同時に、東洋流の男尊女卑に賛成せず。是に於てか吾人は基督の弟子保羅の言に賛同せざる能はず。彼は一方に於ては、夫に與ふるに家族統率の權を以てして曰く、「妻たる者よ、爾は夫に事ふると猶基督に事ふるが如くならざるべからず。何となれば夫が妻の上に居るは猶基督が敎會の上に在るが如くなればなり」と、更に他方に於ては夫の權力を制限して曰はく「夫たる者よ、爾は妻を愛すると猶基督が敎會を愛して一身を犧牲に供したるが如くなれ」と。夫婦の關係斯くの如くにして婚姻の目的始めて達するを得べし。

婚姻は神聖なる誓約にして、私法上の契約と同じからず。契約は當事者の意思を以て自由に解除し得べきも、神聖なる誓約は、當事者の一方が他の一方に對して信實を破るに非ずんば決して離解するを得ず。故に婚姻を離解するの原因は唯造化の意思と當事者の悖信との二あるのみ。詳言すれば當事者の死亡、若しくは其の姦通を外にしては決して離婚の原因なきなり。婚姻を

重んずると斯くの如くに至らずんば家庭は決して高潔神聖なる能はざるなり。

以上吾人は唯物論者の婚姻觀を排撃し、法理論者の婚姻契約說を辯駁したり。顧みて我邦の現狀を見れば、兩性の關係の紊れたる、婚姻の重んぜられざる、實に憂ふべきものあり。今に於て此の弊風を改めずんは、日本は到底高潔、雄大なる國民たる能はざるべし。吾人が婚姻論を草する、實に此に見るあるが爲めなり。

名家の根源

西脇王峯

如何なる學派を問はす、凡そ一代を風靡する學派は必すやその起るへき根源基本なきを得す、老の黃帝に於ける、儒の先王に於ける、墨の夏政に於ける皆然らさるは莫し、蓋し蒼穹を摩する枝葉の繁茂は必すや寸尺の根幹に基し、汪洋の大水は必すや巖頭の涓滴に源せさるを得されば也、思想の發展も亦然らさる莫し、それ旣に然り、然らは名家の學亦豈戰國に至りて突然興起したるものならんや、必すその由來する所なかるへからす、是れ吾人が茲に論せんと欲する所のもの也、

然りと雖、吾人はその何故に名家の學か戰國に盛なりしかの原因は他日之を論するとして、茲には唯如何なる根源ありて起れるか、即如何なる經歷の下に成りしかを探究せんとするのみ、言を換へて之を謂へは唯その發達の系統を尋繹せんとするに過ぎさる也、

古より稱す、名家の學は禮官に出つと、然り一面に於いては名家の學は必す儒家と歷史的の關係を有するもの也、何となれば、孔子嘗て數正名の事を謂へは也、論語子路篇に曰はく、子路曰、衛君待子而爲政子將奚先、子曰、必也正名乎、子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正、子曰、野哉由也、君子於其所不知蓋闕如也、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所措手足、故君子名之必可言也、言之必可行也、君子於其言、無所者而已矣と、以て孔子か如何に名の正しふせさるへからさるを說きしかを見るべし、蓋し孔子の正名を謂へる

は君臣上下の分を攪亂せらるゝを恐れたれば也、仍て左傳成公に仲叔于奚か衛に功ありし時邑を辭して繁纓を請へるに就き記して曰はく、仲尼聞之曰、惜也不如多與之邑、唯器與名不可以假人、君之所司也、名以出信、信以守器、器以藏禮、禮以行義、義以生利、利以平民、政之大節也、若以假人、與人政也、政亡則國家從之、弗可止也已と、此等の言に徵して名家と儒家とは多少の關係あると推して知るへし、且つそれ大義名分とは是れ儒家の最も尊重する者たり、然るに名家亦之を尊重すると敢て儒家に讓らす、此の一事既に名家と儒家とは少からさる關係あるを想察するに足らん、何となれば名家はその學理の應用として君臣上下の分を正し、天下を一定不變の法に依て治めんとしたれば也、然りと雖、儒家の正名は單に一の假定に基きて之を實際に應用せんとなしたるに過きす、何故に正名せさるへからさるの根本原理はその探究する所にあらず、言を換へて之を謂へは儒家は唯定名以下の事を探究するに止まりて名は如何にして出て來りし所以を攻覈せさる也、されば名家と儒家との關係は單に名分に就きて歷史的關係即只從來時間的に變遷せし關係に過きさる也、未決して之を學理的に發達せし必然的關係あるものと認むるとを得す、何となれば名家にして若し單に儒家に基くものならしめんには、彼等は儒家の如く唯定名以下のとのみを論するに過きさりしならん、然るに彼等は一歩を進めて定名は何等のものに基くかを論し、名の由て起る所以を說きたれば也、是れ名家の學は他に大に由來する所ある所以にして、吾人か既に名家の學古の禮官に出つとなすは畢竟その一面の關係のみを見て他の至大なる關係あるを知らすとなすの言ある所以也、されとも儒家か定名以下の事を硏究したるは名家に少からさる刺戟を與へたるや決して疑ふへきことにあらす、彼等は此の原因ありて大に定名以上にその論究の歩を進めたるものならすんばあらず、然らば則ち名家か儒家の外に至大なる關係あるものとは何ぞ、その所謂必然的關係を有するものは何ぞや、他なし道家の學說是れ也、これ老子は社會刻下の紛亂を厭ひて太古の

揆一に歸せんとしたるものにあらすや、然るに名家は之に反して好て言を奇にし、論を怪にして益世の濁波を揚けんとしたるもの、一見豈奇異の觀なからんや、然りと雖、是れ決して奇怪の事にあらず、蓋し二者その出發點同一なるも、唯その方向を異にしたるに外ならされば也、然らば兩者は如何なる關係の下に立ちて道家より名家に轉下せしか、是れ吾人か玆に攻覈を要する主要なる點ならずんばあらす、

老子一たひ哲學を唱へ、その實躰說を掲けて以來如何に支那學術界を震盪せしか、道家の學者たる文子關尹を始めとして禦寇莊周の徒の歡天喜地して之を奉迎したりしは固より言ふに及はす、學問と云へは日常彜倫の仁義忠孝の外を知らさる儒家は絕學無憂の聲を聞きて、如何に與驚せしか、大道廢有仁義の說を耳にして如何に狼狽せしか、子思か先賢往聖に紹きて性道敎の三綱を揭げて、聖學の綱要を著はしたるは全く此の鋭鋒に當らんか爲ならさりしか、その他墨家と云ひ、法家と云ひ、兵家と云ひ、將た縱横家と云ひ、皆老子か哲學の影響を蒙らさるもの莫し、老子か哲學の支那學術界に影響を及せるの大なる、恰韓圖の哲學か最近世哲學に至大なる影響を及せるか如くなりき、只支那學者の實際的思想に富める禦寇莊周の外、その實躰の何にものたるかを探究するものなく、僅に老子か說きたる實躰に基きて、即老子の說を假定として演繹的に論述するに過きさりしと雖、そが所有學術に影響を及ほし、優に鄒魯の學者と對峙して別に荊楚の一大學派を作りしはその說豈偉大ならすとせんや、

老子は當時の繁文縟禮を厭ひ、太古醇樸の世を慕ひしもの、故に總て吾人か感官に觸るゝもの、眞僞錯綜、是非紛亂して殆その叔麥を辨ずべからず、嗚呼、澆季濁浪の世、誰か烏の雌雄を知らんや、如かず目に映し、耳に響く惣ての假象を棄てゝ本有の實躰に歸るには、所有現象は恃むべからず、若し現象界に於いてそが標準を求めんとするは猶井蛙の見を以て大海を計るが如し、共に海の大なるを語るに足らざる也、海の大を知らんと欲せば須く海に遊ぶべし、海實に百川の歸する

所、正に是れ衆妙の門、目得て見るべからず、耳得て聞くべからず、僅にその門影を窺ふて之を字して道と云ふ、道周行して一を生じ、一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生じ、人類成る、是に於いて眞の眞たり、僞の僞たるを悟るべし、然りと雖、眞實躰は固絶無限にして陰陽を兼ね、有無を合し、動靜を終へ、無始無終にして不增不減、深淵幽奥にして思議すべきものにあらず、故に實體は元是れ名あるものにあらず無名也、無爲也、無欲也、又吾人の得て之を名くべきにあらず、豈啻に實躰のみならんや、事物それ自身も元來名あるものにあらず、只之れ事物が實躰より發現し此に對待を生じて始めて名を有す、故に老子は言へり、道常無名、始制有名と、又曰はく、樸散則爲器と、斯くして無は有に轉化し、無名無爲の道は有名有爲の萬物に化成する也、老子は之を或は無名天地之始、有名萬物之母と云ひ、之を或は道常無爲、化而欲作と云へり、蓋しその意に以爲らく、宇宙の萬物は本來名なし、然れども萬物は終にその本來の無名を以て甘するものにあらず、對待の心は之に甲乙の名を與へ、萬物の實と觀念の名と對待せしむるもの也と、名家は此の道常無名、始制有名の原理を假定して立論したるもの、刑名の形式を以て法術に應用せし名家は如何に此の原理を適用せしか、是れ吾人が先づ知らんと欲する所のもの也、

名家の學之を概括して云へば事物の名實を明にし、君臣上下の分を正し、勢に據り、法を執り、術を用ひ、信賞必罰、以て治平の功を致さんと欲するもの也、而して分て之を論ずれば大凡そ形式論實質論の二種となる、形式論は道家に入りて道常無名始制有名に根源して刑名の關係を論じ、實質論は形式論によりて立てられたる原理と道家の道常無爲、化而欲作とに基きて名分の關係を說きて法術家に投じたるもの也、

刑名の關係是れ名家の學の眞髓にして所謂公孫龍の名實、尹文子の刑名と稱するもの也、刑は形也實也、對象の本性也、名は事物に對する觀念也、故に刑名の關係は取りも直さず對象と觀念との相互の關係を論ずるものにして、是れ全く老子の權理を根據としてその相互

の關係を論定せしものに外ならず、然らば名家は如何に老子の哲理を論據とせしか、曰はく對象それ自身に於いては恒常不變の性質を有す、所謂實と謂ひ形と謂ふもの是れ也、實と形その性質既に萬古依然たり、千秋不易のものたり、主觀の得て損益すべきものにあらず、即對象の實若くは形と稱する性質は觀念たる名に因て變化し得るものにあらず、尹文子の所謂形而不名、未必失其方圓白黑之實と謂ふもの是れ也、故に對象はその自然の性質より云へは本來實のみにして名あるものにあらず、即名は吾人の事物に與ふる稱呼にして心内の觀念に過ぎず、故に尹文子は大道無稱と謂ひぬ、然れども孝子が道常無爲而無不爲と謂へりしが如く事物は決して無名を以て終はるものにあらず、無名は必ず有名に轉化せざるべからず、言を換へて之を謂へは吾人の精神は客觀を主觀化せざれば息まざるもの也、是れ老子が無名天地之始、有名萬物之母と謂ひ、尹文子が大道無形、稱器有名と謂へりし所以也、是に於いて觀念と對象と相關し、對象は主觀の事物となり了はり、此に始めて觀念生じ名起る也、此に始めてその所謂名と實と相對立するもの也、名即觀念は實即對象に據て我主觀に生ずる精神現象にして物質現象たる形と元より全然同一なるものにあらず、二者は性質上根本的の差異をなし、決してその混同を容るさず、然りと雖、實なければ名獨存せず、名實に基かざればその名も畢竟空名に過ぎず、是故に二者その性質全然異なりと雖、抑亦その相互の關係なきを得ざる也、二者の關係審にして始めて刑名の理明也、故に尹文子の曰はく、有形者必有名、有名者未必有形、形而不名、未必失其方圓白黑之實、名而不可不尋、名以檢其差、故亦有名以檢形、形以定名、名以定事、事以檢名、察其所以然、則形名之與事物、無所隱其理矣と、既に二者の差異を審明し、名をして瞬昧に沒了せしめず、能く實に契合せしめ、以て實の實たるに背かしめざるは是れ事物の研究上極めて緊要のとたり、尹文が名也者正形者也、形正由名、則名不可差、故仲尼曰、必也正名乎、名不正則言不順也と謂へるも亦此の意に外ならざる也、蓋し名家はその名

の示すが如く孜々として名を正さんとなしたるは夫の形はその性質一定不變なれども之に對する名は變化窮なき精神現象たるを以て也、實に對する名は以上の如く精神現象なれども、元來實に基きて立てられたるものなれば之を分に比すればその性質上稍一定不動のものありて存す、何となれば名にして實に當らざれば既に名たる所以を失へば也、故に名はその性質上に於いては元來主觀的のものなれども亦その基く所は主として各觀に在るを以て、既に對象に因て定められたる觀念は確乎として不變のものたらざるべからず、是れ彼等が儒家より一歩を進めて一方に於いては定名以上の實を致覈し、一方に於いては恃むべからざる分に就いて大に論究したる所以也、然らば則彼等は如何にして實を檢せしか、彼等は以爲らく觀念は對象に基き、對象は觀念に依てその本性を顯はす、故に二者一を欠きても眞理の何にものたるを知るべからず、眞理は必す二者の契合一致に成立するもの也、而して對象の對象たる所以は其の本性に外ならす、對象の本性は即一定不變の理也、理を認識するは必す主觀に依らざるべからす、主觀の確實は必す客觀との一致にあり。主觀客觀一致して始めて對象の本性顯はれ、觀念の確實成り、以て萬世不易の眞理を成立すへき也、故に筦子九守篇に說きて曰はく、修名而督實、按實而定名、名實相生、反相爲情、名實當則活、不當則亂、名生於實、實生於德、德生於理、理生於智、智生於當と、

形式論は知力的に主觀と客觀との關係を論するものなるか故に純然たる學術上の論なり、之に反して實質論は感情的に主觀と客觀との關係を論するもの也、若し形式論を以て眞僞の標準を與ふるものとせば、實質論は善惡邪正の標準を與ふるものと謂ふべし、既に實質論は邪正の論善惡の辨に一定の標準を與ふるものなるか故に法術に關すると大也、而して實質論の論する所は主として名分の關係也、然らは分とは何ぞや、一種の名也、即事物に對する好惡の名稱是れ也、抑事物は元來名稱あるものにあらす、況んや好惡の名稱をや、然りと雖、吾人は感情的動物なるが故に事物に對して

好惡の感情を以て望み、その事物の或る性質を或は好愛し、或は憎惡す、是に於いて事物に對する好惡の名稱生す、然りと雖、此の好惡の名稱は形式論の名の如く事物の本性たる實を主としたる名にあらす、却て吾人か感情を主として與へたる名稱に過きす、換言せは形式論の名は主觀か客觀を主として與へたる名にして、此の好惡の名稱は客觀を主とせす、主觀か己自身を主として客觀に與へたる名稱に外ならず、故に此の名稱は決して事物に存する實を表彰するものにあらす、故に之を分と稱して名に分つ也、今それ物あり、或るものは之を好み、或るものは之を惡む、是れ物に在りては名を同しうするも、我に在りてはその分を異にするか爲也、然るに我に屬する分を以て彼か名となし、彼に屬する名を以て我か分となさは善を罰し惡を賞するに至らん、是れ名分の大に愼まさるへからざる所以也、故に世俗の賞罰親疏の正を得さるは畢竟此の名分の關係を誤るか爲ならすんはあらす、彼等は此の如く君臣上下の分を正し、信賞必罰の實を擧けんとして形式論の原理と老子の學說とに基きて實質論に於ける名分の關係を論せり、是れ以て如何に名家は道家と至大なる關係あるかを見るに足らん也、

以上は僅に名家の學の大綱を述へしに過きすと雖、敢て名家の學の根源を知るに難からざるへしと信す、吾人はその學の詳細なるとは之を他日に讓るととなすへし、之を要するに儒家と道家とは支那學術界の二大潮流にして多くの學說此の二流の影響を蒙らさる者莫し、殊に道家に至りては其波動の及ふ所決して儒家の比にあらす、故に名家と道家との關係に於いても儒家と名家との關係よりも一層親密なることも敢て察知するに難からさるへし、是を以て名家の學は歷史的に儒家と關係し、學理的に道家と關係し、此二關係の下に產れたる名家は屹然として當時の學術界に横行濶歩したるもの也、莊周荀卿の徒その之を恐るゝ恰も一敵國の如き觀ありしは洵に以ありと謂ふへきか、

雜　録

東京詩人評判記（其三）

磊々生

○野口寧齋嘗て青厓種竹槐南の三家を歌舞妓役者に見立てたることあり、即ち青厓は左團次、種竹は菊五郎、槐南に至りては諸體悉く妙絶譬へば團十郎の生丑淨且何役に扮するも必ず大當りを取るが如しと、是れ少しく好む所に佞するの誚を免れず、槐南の詩固より一代の冠冕たりと雖も、辭藻太だ過ぎて意味の晦澁を致し所謂花ありて實なきの憾あり團洲の腹藝は未だ十分呑み込む能はざるに似たり、舞臺に出でゝ何となく花々しきは新駒の賣出し當時にや比せん、

○或人問ふて曰く以上の三名家と雁行すべきものは誰ぞや、余は之に答ふるに寧齋湖村の二家を以するに躊躇せず、寧齋は槐南に師事して刻苦勵精造詣測るべからず、湖村も亦讀書涵養の深き當今稀に見る所なり、寧は才氣勵發述作頗る富みて湖は才鋒を歛め容易に指墨を弄せず、寧は詩を以て性命となし湖は詩人を以て稱せらるゝを耻ぢ、寧は槐南崇拜の極時に阿好の癖あれども湖は青厓の提撕を受くるも已れ亦特地の見解ありて別に一家を成さんと試み、寧は俠氣あり覇氣あり湖は淡然泊然老衲の定に入るが如し、されども二人容易に人に許可せず高く自ら標置するは相似たり、蓋し詩人として寧は湖に駕して上るべく學者としては湖當に寧を脚下に睥睨すべし、

○當今の少壯詩人槐門に往かざれば必ず青厓種竹二子の面前に拜舞す、之を除きては別に一頭地を拔んづるもの少し、强て求むるも福井學圃籾山衣洲大江敬香の數輩に過ぎず、

○學圃の詩初めは平凡觀るに足るもの無かりしが兩三年來進境殊に著しく復呉下の舊阿蒙にあらず五言尤も妙なり、敬香衣洲輩に伍すれば雞群の一鶴と稱するも溢美にあらず、

○敬香の詩名世に聞ゆる既に三十年、學圃寧齋の如き

も一時は其門に至りて雌黄を乞ひしことありとか、數年前までは平淡爛熟の調を以て青邱一部餘師ありと稱せられしが、今や勉めて青厓槐南の如き體裁を學び淺俗の誚を免れんとするも扛鼎絶臏益々拙劣を極む、たゞ田舍書生を相手にして鬼面兒を嚇するのみ、衣洲臺灣に航して彼地の吟權を握り得意の顔色ありと雖も其技倆敬香と伯仲の間にあらん、

○北條鷗處岩溪裳川の二人何れも故春濤翁の口講指書を受けたるものにして共に刀筆の吏として一時地方に在りしが今輦轂の下にあり、森門の傍系として敢て槐南の餘唾を舐らず、其詩を論ずれば裳川遙かに鷗處の上にありと雖も標榜相競ふて相下らざるなり、

○以上概論するところ未だ詩壇の消息十分の一を盡さずと雖も、餘りくだ〳〵しければ之を省き更に論詩絶句を作りて其足らざるを補はん、但し口に任せて放吟し敢て撿覈を加へざれば罪を諸氏に獲ること多からん、されど胸臆の間更に挾む所無きを以て諸氏の雅量必ず一場の笑資に供して止まん、

看盡名山氣自雄。專心規撫李空同。評林別出新機軸。
妙在滑稽諧謔中。　國分青厓

風流不減玉溪才。懺綺幾年心未灰。穠艶更無寒乞相。
滄浪閣下牡丹開。　森槐南

世上爭傳懷古詩。搜求陳迹拾珠璣。囊中更有驚人句。
萬里長風破浪歸。　本田種竹

以詩爲命太沈酣。吟苦應同島佛龕。覇氣壓人無假借。
眼中唯有一槐南。　野口寧齋

催租吏亦賦重陽。畬句吟來更斷腸。縱把文章換刀筆。
故園三逕就蕪荒。　巖溪裳川

永晝圍棋雙眼白。深宵對卷一燈青。家如淨室絕葷肉。
却怪詩中龍氣腥。　桂湖村

南浦歸來得意多。高吟鷗鷺浴恩波。知君昨夜夢驚處。
髣髴雲間鳴珮珂。　北條鷗所

衣冠優孟古文辭。病入膏肓不可醫。漫放大言驚俗士。
六朝以後更無詩。　長尾雨山

二十六音諳蟹行。三十一字亦研精。一身兼妙眞堪羨。
仄々平々更得名。　石田東陵

論錢子母久營生。只奈青蚨羽翼輕。貨殖文章難兩得。千金散盡買詩名。
福井學圃

貪多休道搜枯腸。隻眼漸窺王孟鴻。今日大牢誰復供。一杯應侑蛤蜊湯。
福田靜處

吏隱多年鬢已皤。簿書餘暇試吟哦。森門第一好人物。詩亦粹然珠自磨。
關澤霞庵

石破天驚稱鬼才。風雲意氣一朝摧。囊中詩草未焚盡。獲罪黃金心似灰。
宮崎晴瀾

屠狗論交伍黨盟。曾爲逐客出皇京。可憐今日窮途作。或署湘烟女史名。
坂崎紫瀾

袖中文字挾風濤。剽竊全篇不自勞。本是紫瀾居士作。詞林亦見綠林豪。
山田天籟

心血嘔來惆悵詞。者般消息少人知。紅繩一斷還相續。彩筆生花更畫眉。
森川竹磎

沈酣貪飲盃中物。慷慨高談紙上兵。自說朱門多故舊。枉將詩賦干公卿。
大庭雲心

詩律太嚴黃石翁。誰傳衣鉢繼高風。偏欽一片鳳毛在。句々剪裁隨手工。
岡本隨軒

撰出明詩災棗梨。難分美玉混沙泥。細心須讀省翁序。便是一丸驅毒劑。
田邊松坡

東台山上一頭陀。萬里波濤飛錫過。道術更驚能縮地。淅江咫尺接黃河。
小見清潭

螢雪多年在伯林。學修經濟果何心。誰知綠酒紅燈底。買得狂名擲萬金。
金井秋蘋

早熟馳名早稻田。博文館裡久經年。此君述作未多讀。纔記美人光菊篇。
柳井絅齋

粗才淺學賺村童。漫擬風流柳北翁。俗臭紛々花月社。花皆憔悴月朦朧。
大江敬香

南溟昨夜駕艨艟。笑指新高第一峰。縱到風雲吞吐境。如何蚯蚓化蛟龍。
籾山衣洲

欲賦雪門新課題。推敲漸就執刀圭。鶯湖山下詩兄弟。頭角嶄然稱仲兮。
横川唐陽

森門四雋推東郭。次則二川難弟兄。知爾低頭居下乘。露華棚底一蟲鳴。（結句用楓橋句）
谷楓橋

自古才人命數奇。窮途落托不須悲。風流破盡千金產。嬴得囊中幾首詩。
岩佐眉山

詩味自含村俗臭。何唯麥氣滿樽罍。稿中評點紛於雨。
醉殺幾多騷客來。　淺田澱橋

式達才情未及之。一時名姓世皆知。近來游戲入三昧。
乘興漫吟狂體詩。　佐藤六石

飛出楊花入李花。春來釀密護蜂衙。他時造詣應期待。
咀嚼諸家作一家。　仁賀保香城

右三十首の中本事の註すべきものを下に摘記せん、嘗川曾て埼玉縣の收税吏となり督税の途次重陽の佳節に値ひ催租吏亦賦重陽の句あり今や官を罷めて專ら賣文過活猶都門に淹滯せり、湖村食葷肉を嫌ひ其人となり自ら蔬筍の氣あり而して詩は却て魚龍風雲の氣あるを喜ぶに似たり、鷗所客歲沼津の離宮に於て東宮の寵賜を拜し鷗鷺浴恩波の句あり、雨山は蒼海伯論詩の旨を服膺して口を開けば漢魏漢魏と叫び其作觀るべきありと雖も大概優孟の衣冠なり、東陵英語に通じ和歌を善くし詩も亦格調高朗を以て稱せらる、學圃の家曾て千金の貲を積み人に貸して息を收めしと云ふ、靜處王孟韋柳冲淡蕭曠の體を慕ひ擬作する所甚だ多し詩壇蕭條の今日人意を强うするに足る、晴瀾經綸を以て自ら任じ黨人中錚々たる者なりしが罪を黃金に獲て一蹶復た起ず往年舊作を掇拾して梓に上せ李卓吾の焚書に倣ひ焚詩と題し春畝侯石破天驚の四字を卷頭に書せり、紫瀾亦土州の黨人曾て保安條例のため逐客となりしことあり袖中文字挾風濤云々の一律は當時慷慨の餘放吟せしものなり然るに客歲山田天籟之を竊みて『日本』文苑に揭げ己れの作となせり紫瀾又故中島長城男と知己の感あり男の未亡人湘烟女史の詩は半紫瀾の代作なりと云ふ如何にや、竹磎槐南の妹婿善病善愁の風流才子嘗て惆悵詞の作あり、雲心長州の出身楊州の狂杜牧を以て自ら任ず頃日土方秦山に呈する長篇あり、隨軒の詩近來稍觀るべし勉めて怠らずんば箕裘を辱めざるべし、松坡は頻りに明詩を崇拜し近々明十家詩撰を上梓せんとす龜谷省軒序して曰く『明詩大率格調を倘び其弊動もすれば膚廓に墮つ是れ學者の當に戒むべき者なり昔者物徂徠七子の詩を唱へ擧世靡然皆摹擬を事とし萬喙一音人をして厭倦せしめ遂に宋詩を以て之に代る

に至る故に學者其氣格神韻を學ふは則ち可なり徒らに字句を剽竊して以て工となすものは子愼（松坡）選詩の旨にあらずと是れ松坡頂門の一針三復して自ら顧みるべきなり、淸潭江浙道中の詩に黄河を渡るの作あり江浙と黄河と相距る數百里神仙縮地の術に非んば此の如きを得ざるなり又上海に航する途次太平洋中に於て淸客（江南の人）に遇へりと詩人大言の弊戒律精勤の比丘をしてかゝる妄語戒を犯さしむされどもこは事の尤も小なるものなり更に大なるものあれども今は之を恕せん、秋嶺金井之恭の愛子多年伯林に遊びて經濟學を修めたり綱齋早稻田專門學校の出身讀賣新聞曾て壯丹侯の寵婢光菊の肖像を掲げ其上に綱齋の長歌を題せしことあり、衣洲臺灣に航して奇絶壯絶の風景に接するも詩境益頓挫せり、唐陽は諏訪の人伯を三松と云ひ叔を雲波と云ひ兄弟三人皆吟詠を嗜む就中唐陽尤も著はれ槐南の雪門に參して詩道の三昧を得たり今名を軍醫の籍に置く、楓橋往年落合東郭横川唐陽森川竹磎と共に森門の四傑と稱せり眉山阿州の人種竹と桑梓を同じくす、澱橋は惠比壽麥酒釀造元の若旦那なり、六石は弌達即ち寧齋湘南と一時名を齊うせしが今は專ら狂詩を作る日々新聞に連日掲載せるもの即ち是なり、香城初めは詩を敬香に學び後松坡省軒諸家の門を歴訪して教を乞ひ更に轉じて三李堂に參す故に人或ひは風來人を以て之を目すされども斯道に熱心なるより致す所今日の作未だ論ずるに足らずと雖も他日必ず刮目して觀るべきものあらん、

華顛八十七春秋。耆宿當推第一流。草莽詩人班五位。
恩波浩蕩浴閑鷗。　小野湖山

青宮羽翼姓名譁。七十壽詞堆壓車。記得先生詩一句。
電燈爛々照櫻花。　結先生句　三島中州

白髮蒼顏氣未磨。縱横健筆兎蹉跎。直將文法爲詩法。
五字長城得意多。　依田學海

吟成樂府響鏘鏗。不怪詩壇仰主盟。一句金丹猶讓効。
長生有訣啻其精。　結先生句　龜谷省軒

聖堂當日鳳雛兒。末路纔餘筆一枝。猶有綺懷抛不得。
白頭何讓少年時。　田邊蓮舟

温容接客太慇懃。涵養之深勝所聞。悟得宋詩佳處者。
黄村歿後獨推君。　大島怡齋

絶代風流推玉池。老詩人是老醫師。青囊孰若錦囊重。
長吉應無嘔血時。　永坂石埭

鐵兜門下一時英。夙博風流判事評。翰墨優遊挂冠後。
詩名未得並書名。　西岡宜軒

美人捧硯笑相迎。銜口成章見性情。醉墨淋漓千萬紙。
書名早已掩詩名。　巖谷一六

一斗百篇詩忽成。不論格調只言情。縱橫覇氣誰能敵。
胸裡知君藏甲兵。　秋月天放

七十五齡腰似弓。風流得意太平翁。壯時槍術稱無敵。
未見詩壇奏首功。　杉浦梅潭

破鏡歎成眼似盆。慣餘猶吐幾千言。新聞當日傳名字。
誰讀恕軒爲恕軒。　信夫恕軒

白頭鉛槧寄殘生。詩賦自誇追盛明。如讀崇求標目字。
十篇八九雜人名。　石川鴻齋

氣骨稜々夙挂冠。臨書讀畫廢三餐。壯時出入死生路。
也做雲烟過眼看。　薄井小蓮

無雜雖非韶濩音。詩中滋味亦堪尋。漫吟猶得立言體。
善謔更存規諷心。　蒲生褧亭

右老大家を詠ずるものは其本事大抵人の知る所なれば敢て註せず、更に逢んで臺閣詩人即ち伊藤春畝、山縣含雪、芳川越山、清浦奎堂等の論詩絶句を作らんと欲せしが餘白無きを以て他日に讓り一先づ筆を擱することゝせり

坐禪談

犢村

坐禪は必要である、膽が坐るといふ事に見てよろしい、膽を鍊るのは藥を錬ると同じことで鍊る程堅くなるのである、三十棒を加へるとか云ふこともツマリ餅を搗く樣なものである、餅は力のあるものだが搗き損ねるところ／＼になつて味もなくなる、藥も呑み過ると却て毒になる、凡て其の加減と云ふことがむつかしいので坐禪したものは多く石の如くなるので困る、此等の人は未だ眞個に大悟徹底しないのである、大悟徹底し

たものは雲の如くである、雲は無心で石には角がある、この角を取捨る爲に坐禪するので別に深い意味のある譯ではない、角のある中は兎角物に觸れるので觸れる度に動く、動く度に熱する、熱する度に心火の如くなる、この火はなか〳〵恐ろしい火である、煩惱の焰を吐くこと蛇の如く無形の物迄も燒拂つて亂暴を働く、これが膽の坐らない證據である、膽の坐つたものは虛心平氣である、虛心平氣即雲である、雲は嬾の如く見えて居るが鵬翼を張つて大空を掩ふ處の勢力もある、又雨露を降して能く物を潤すと云ふ德も備つてゐる、丁度君子愚なるが如くして道を行ひ、仁者寡慾にして善く天下の民を救ふと云ふ樣なもので本當に坐禪したのはこれと一つである、ソレ故に名僧は雲の如くである、石の如きものは道心堅固と云ふ意味を誤解して爲るらしく思はれる、四角に堅いのではなくて圓く堅いのである、この差別を知らないと坐禪は却て無必要となるわい

現今の博物館を評す

水雲僊客

美術の標範となり、風俗の徵證ともなるべき者を蒐集して、一堂の內によく千古万世の歷史的、藝術的知識を授けしめる博物館が、要用であるか。無いかといふ樣なことは、あまりに明白なので問題にはならぬ、が、しかしその博物館といふ者は、どういふ風にこしらへるか、どんな方法に據れば最も適當であるかといふのは、大いに研究すべき事であらうと考へる。

無暗に古い物や、珍らしい者をあつめて、それを順序よく、たゞ通り一遍のやり方で、例へば、一寸時代の順位で陳列してをく、こんな事丈で完全な博物館といふことが出來やうか、よし出來るとした處で、少くとも、專門の腦髓のない者に、歷史的知識といふ程の者が授け得らるゝであらうか、これは大いに危まれる處ではない、斷じて出來る氣使はないのである、博物館は骨董店でもなければ、ものもちの倉庫でもない、も

つと學術的な、組織的な、研究的な處である、その蒐集の工合は飽くまでも學術的に、說明的でなくてはならぬ。

それで我邦現在の博物館、唯一最高の東京にある博物館はどうであるか、よくこれらの難點を免れ得る事が出來やうか、如何ばかり、その事業の方法が說明的であるか、といふと、實に情ない程亂雜な幼稚な有樣になつて居る。第一不親切なのは、美術部へはへると、たしぬけに、推古時代といふので、法隆寺の壁畫の模寫がある、そして何も外に解說がしてない、この壁畫が何で推古時代のなのだか、どう云ふ具合に何處に現品が保存されてあるのだか、乃至はその圖樣は何であるか、分明か不分明か位の事は、高等小學校程度の兒供でも起す疑問ではなからうか。つゞいて同室內に天智時代で東院堂の聖觀音があり、天平で三月堂の執金剛神、藤原で中尊寺の本尊鎌倉で運慶の維广がある、何れも皆同斷のやり方で、殊に最も肝要な、天平と藤原とは何處かどうだか、そんな事は一向に頓着してない、あまりに臆測な樣式の說明は難有くないとした處で、ざつとした時代〳〵の著しい特點を說明する位の事がなくては、折角かうやつていろ〳〵集める詮がないやうに思はれる、また可笑のは何も唐突に推古時代からはじめずとも、史的にやるならば、石器時代から一通り集めねばならぬ筈である、何でこれをやらぬのか、美術部は、美術史部のつもりで無いとか、それならば美術史部は何處にあるか、或はあの鳥佛師の四十八躰佛のやうな者が史的、骨董的を離れて別に藝術上の價値があるか、それから、模造と眞作とを何故無意味にあやつて分けて置くか、系統的にやるのならば相互にぶち込んで說明の料にするのが宜いではないか、これらは皆始に骨董的の考があるから、無意味に眞物と、模製とを分けたり、古い物丈を置いて說明を忘れるやうなことになるのである。

それから品物の足らぬ事がまた實に驚く程である、美術部等はどうやらかうやら足らず乍ら模製があるが、工藝美術部などゆくと實に大變だ、品物か少くて、陳列

が無茶で、說明がなくて、稀に誤りが記してある、外にも誤りはあるがことに多いのは、陶器のあるところ等であらう、誰れか一寸した古陶器の沿革、たゞ茶人の種類位でもこの館內にはいつて解し得たものがあるであらうか、恐くはあるまいと吾人は考へる。そればかりではない、こゝでも陶器を見せるならば、繩紋土器から、埴輪土器、古瓦の殘品等いくらもやるべきものがある、竈の構造、それに使用する道具、製作場の光景等も、容易い事で多くは人の知らぬものであるから、尤も觀せる必要があらう。瓦は就中古い者に澤山種類があるから別に文様の研究にても一室を設ける程の必要がある、きく所では大分博物館にも庫のなかには古瓦があるさうだが出てゐるのは、僅に大佛の瓦の大きいのに驚くばかりである。

裝束や、甲冑の部もさうである、鳥羽天皇前後の區別はどうであるか、古いのはどれらの圖に出てをるか、其着用の須序はどうであるか、文官の束帶かどうで、武官の束帶がどうで、禮服が或は衣冠が、狩衣が、と一々圖解でもしたり、人形に着せて置いたりせねば頓と古着屋の品物をガラスの外で見るやうに思はれて、一向風俗史といふやうな智識を滿足せしめぬのである。甲冑の方も元よりこの通りに。鎧は何時代から大約何迄、腹卷と胴丸はどれ丈違ふか、その着用の順序はどうか、威毛の種類はどうかといふ樣な、尤も肝要な事は寸毫も記してないのである。

殊に建築部といふ所へはへると、殆と呆然として言葉なからしめる程である、羅城門の扉の金物、飛雲閣の雛形、外に二三枚の古繪圖、これが建築部の狀態とは、實に情ないとも何ともいひ樣がない、それは是非共大々的に改革して、もつと親切に、申譯的でなくやられたい、その注文をいはうならば、穴居の遺跡の摸型、その內部の建築的繪圖、千木勝男木の最初といはるゝ想像的の家、南洋土人等の我か祖先の者に似たるたて方の家、大廟の雛形、法隆等、鳳凰堂等其他古社等の摸型若くは、實測圖、茶室等の配景圖、及建築圖等各時代の、殿舍邸宅の摸型圖より、內部裝飾圖、及裝飾品等

を集めてもらはねばならぬ。何にせよ、建築といふものは尤もよくその時代の人間の嗜好や、趣味が分るものであるから、博物館等では充分之れに力を注かねばならぬ者たらうと考へる。

こゝで一寸その誤りのあるのを二つ三つあげて置かうまづ、興福寺の無着、世親の像を時代凡一千年はあまり亂暴過ぎるその寫生風のほり方が無論運慶といふ處なのを外にしても、木彫の像に玉眼が鎌倉以前にない位の事はすぐ分ることではないか、大きな金物の掛絡をかけたのも禪宗渡來以後たるを證するに易いことである。天平繪の扉の左右に梵天と帝釋が描いてあるが、それを梵天の方に帝釋、帝釋の方を梵天としるしてをる。建築部に、たしか御物で元興寺かの塔の覆鉢があつた、之を露盤とかいふてをる、何處の圖にあんな鉢の形をした露盤があらうか、露盤といふ者は方形であの覆鉢の下に位する者である。印度部に西藏のラマ寺にたてる佛幡を印度の佛幡としてある。興福寺だかどこだかゝら出た鑄造當時の古錢といふ者の中に一つ支那の元の錢がいれてある隨分可笑しな話ではないか。これら一々詮索したなら、中々號をかへるもかきゝれない程あらうが、ざつとした處でこれ位のドダイ著にかゝらぬ誤謬がある。」

それから美術部で古畫や、古彫刻の時代を鑑めてあるのに、年代凡七百三十年、八百六十年、八百年、六百二十年等とやつてある、實に馬鹿々々しいやり方ではないか。誰も博物館へはいつて駄法螺の時代を見やうといふ者もあるまい、八百年と、八百六十年と、八百三十年とこれ程の微細な鑑賞が、實際與へ得らるゝ者であらうか、たしかに八百三十年といふ者は、八百五十年でなく三十年代に出來たといふ事を信ずるものかあるであらうか、恐くは鑑賞家その人と確とは信用しては居らぬけれども、無據さういふところへ行つたのであらう。たとへば藤原の末と思はれるものが一つ標準に出る、次で鎌倉の者が出るもしこの間に出來たと思はれる者があると、すぐに其間の年代を平分して時代何百何十年とする、それより一寸古さうな者があるとま

た同し筆法で何百何十何年とする。こんな愚な寧ろ滑稽な事が實際藝術史上に何如ばかりのきゝ目があるであらうか、様式の古いとか新しいとかは唯其時代の作品大勢の上に於てゞあるから、實は作者の都合で必ずしも其大勢に伴はん者が出來てゐたに違いない、それを少しの様式の工合が新しい様だ、古い様だといふので、十年新しくしたり、十五年昔にしたりするのは、實に背理の極である。つまり時代々々といふものをあまりに死的に、ものさし的にするからして斯ふいふ下らぬ弊害が生じてくる。それも外ですることなら格別通人揃といはる、博物館の仕事としては、頗る突飛過ぎはせぬかと思はれる。この調子でだん／＼ゆけば、百年、百一年、百二年、といふやうに遣らねばならぬ事となる、どうかこんな自分で別に拵らへる年代をやめて、少くとも其物の實際にあつたらしい時代丈を正確にきめて、その肝要な説明と、研究とを忘れずに、そして怪しげな師宣の繪などをとり除いて貰いたいものである。

要するにもつと秩序を立てゝ、如何にも人の會得のゆくやうに、學問的にやつて欲しい、それには、いろ／＼とその順序の立て方もあらう、或は、石器時代、古墳時代、それから奈良朝以後といふやうな工合に（一寸今の如く）するにしても、石器時代ならその時代丈の、それを使用した人類の生活の狀態、穴居の遺跡の模型、遺物について人類學の研究から得た、すべての結果等を、一目瞭然たらしめるとか、古墳にしても車塚や、兜塚の模型、樹物をたてた工合、石棺の雛形棺のうづまりやう、槨のつくりやう等のひな形もしくは圖、發掘當時の棺内槨内の副葬品配列のさまなどは尤も必要な者である、それに現在のありさまは、只遺品がならべてあるばかりで、雷斧は何にした者だか、どういふ處から出るものか、埴輪は甕は何にした者か丸で分らぬ、まだ／＼激しいのは、貝塚や古塚のに分布圖さへつるしてないとは、不整頓も極るではないか。奈良以後のことである。儀式に關係した者は飽くまで一つや二つ位でなく、完全に蒐集して、年中行事の説明や圖解が

あつても宜い、もし時代々々で分けずに、皆一貫した歷史沿革を示す方法ならば、元より前いふた通り猶のこと整頓の急を要するのである。それからも一つの希望は、

佛教に關するもの丶室、及神道の儀式に關するもの丶室、があつてもよからうと思ふ。ことに、佛教各宗の本尊、殿内のかざり工合、また密教の曼荼羅の蒐集及壇上莊嚴のさまなどは、尤も面白いもので、博物館としては大なる價値のあるものだらうと考へる。これは强ち佛教室を設けなくとも、美術部や、建築部を擴張して、その一部分として、儀軌的の配列をするも妙である。無暗に木像を陳べて置くよりは餘程趣味があつて、また有益ではなからうか。この他外國品の陳列物もせめて圖でも模製でも宜いから、まとめて終始をつけて、話の分るやうにしてもらいたい、埃及や小亞細亞地方とまではゆかいでも、支那、朝鮮、安南位はもうすこし整へねばなるまい、岡倉氏が先に支那へいつた樣であつたが、その後一向何のきゝ目もなかつたとみえる。印度や、埃及の者をほんの二つ三つ、ならべてあるのも、實に骨董店の如くに思はれる。それから、西洋美術室はどうだ、まさかに一品も陳列する品がないではなからう、否々ある筈だ、確かにある筈だが同館內には昔から西洋排斥熱の盛んな爲めに、空しく庫の番をしてゐるのである、これをも出して、一つ陳列せねばならぬ、しかしこれを完全にやるのは中々日本の御齒にはあふまいが。

まづ館內陳列品についてはこれ丈でやめるが、これの根本、即ち歷史課、美術課といふ者についても少々言はねばならぬことがある。元來陳列品の不整頓といふとは、この美術課なり、歷史課なりの怠慢で、それに研究の行き廣いて居らぬのは、皆この各課の學問的に成立して居ない、研究的に組織的に出來た頭をもつて居る者がないから起つたことである。博物館へ品物を買入れても、二年位たゝぬと、漸く陳列品の內へ出る運に行かんなどは、實に怠慢も甚たしい、或は偶ま〱好古の士が誤を指摘してやる事があつても、あれは誰

の受持だ、これは彼の受持だと、些も訂正しない、何がそんなに急がしいのか知らんが、余輩等には不熱心としか思はれない。尤も並に寛大にいふた處で、歴史部から風俗史の一部やそこらは出來たといふ爵位をきゝても宜い頃である。どうかこれも一つ改革して、もつと活氣をつけて、各課を二つにも、三つにもして宜いから熱心に、殆と大學の人類學室といつたやうな風に、漆器、陶器、繪畫、彫刻、とか、或は裝束甲冑とか、佛像とか、儀式とかもしくは何時代とかいふやうに手分けして研究することにしたら、宜い結果も上らうし、また各自の學問にもなるであらう。さう成つて來ると厭でも今の樣な非學問的、骨董的陳列法にして打遣つて置くことが出來なくなる。

何にしても何の博物館が、あまりに迂濶であるといふことは、具眼者、有識者の等しく認めて居る處であるから、當局者は大いに奮勵せねばなるまいと考へる。

錢財の性質

批把山人

錢財は貴むべきものか、錢字は兩才金に從ふの象なり、上は王侯將相より下は閭巷の匹夫匹婦に至るまで、錢財即ち富と云へる一怪物のために、骨肉の至親を忘れて、爭訟を開き、反目嫉視し、甚しきは兇器を執りて相殘傷するに至る、古人も錢財のために相爭ふの鄙しむべきを知り、兩才貝に從ふの象を以て賤の字とせり、貝は即ち支那の古俗一種の貝殼を以て錢の用をなせしによる、されば今日に至るまで錢財を視ること塵芥糞土の如くするを以て、高士なり廉夫なり大人君子なりと稱讃す、晉の王衍口錢を言はず、家人試に其身邊を繞らすに錢を以てせしかば、王衍は急に奴婢を呼び、阿堵物を去れと命ず、阿堵即ちこゝと云ふ義にして錢と云へるを嫌ふてかく呼びしなり、今の人々話次錢に到れば食指と拇指とを以て環形を示しれこと云ふの類ならん、されば錢と云へる字に伴隨する觀念は、卑劣

醜穢危險妖魔等ありとあらゆる醜文字を排列するも之を形容し盡すを得ず、ア、錢財は斯くの如きもの豈之を貴ふべき理あらんや、

然らば錢財は果して賤むべきものか、魯褒錢神論を作りて其の德を頌し、至れり盡せり、淸の尤西堂更に錢の賦を作りて曰く、　天用莫レ如レ龍、地用莫レ如レ馬、人用莫レ如レ錢、………………惟錢至尊、尊レ之如レ神、惟錢至親、親レ之如レ兄、朝廷爵祿、非レ錢不レ登、市井舟車、非レ錢不レ行、賓客交游、非レ錢不レ盟、官司訟獄、非レ錢不レ贏、美人粉黛、非レ錢不レ呈、魂神香火、非レ錢不レ馨、隱士買レ山非レ錢不レ名、文人諛レ墓、非レ錢不レ稱、朝而韋布、暮而金紫、三公五侯、秖爲レ錢市、昔爲二寇讐一、今如二兄弟一、肝膽呉越、總爲レ錢使、無レ令二公怒一、有レ令二公喜一、誰靦面目、唯錢是視、得レ之則生、不レ得則死、人生百年、與レ錢終始、美矣至矣、蔑二以加一矣、自二生民一以來、未レ有レ盛二孔方子一者也、と此文を讀む者誰が然らずと云はん、諺に云ふ阿彌陀も金で光る世の中、地獄の沙汰金次第と、口では拜金宗の鄙しむべきを說くも、一日片時たりとも念頭錢財を離れず、錢財の前に渴仰歸依隨喜の涙を灑ぐは獨り今日の人情のみにあらず、釋迦孔子再び世に生れて庶民を敎化するも斯くの如き心服を得るは望むべからざるなり、ア、錢なるものも亦貴ふべきにあらずや、故に寶の字は宇內の珍とするところの象を示し、財は才あるものゝ有するところの義を示し、不才愚鈍の輩は錢に見離さるゝの意を含めり、されば顏回一を聞て十を知るの智あるも、簞瓢屢空しきを以て、孔子之を稱して其愚や及ぶべからずと云へり、呵々

抑も錢財なるものは陽に排斥せらるゝこと惡鬼羅刹の如く、陰に尊崇せらるゝこと如來菩薩にも勝れり、之を好み之を欲するは人情の自然にして、之を鄙み之を遠くるは情を矯め性を枉ぐるなり、

數卷の靑表紙を繙くもの必ず口を極めて財利の鄙むべきを說く、而して其實財利のためは煩悶苦惱するは吾人の常に見る所なり、之を閭巷の匹夫眼に一丁字無きものゝ、數緡の錢を獲て、滿面堆笑、天眞爛熳の態あるに比すれば孰れが是にして孰れが非なるや、故に古

今高人隱士の名を得るものにても、案外率直の風あるものあり、明の王元章は梅花を畫きて人に售るに、縑素の廣狹によりて其價を定め敢て增減せず、即ち現金懸直無しなり、唐伯虎は潤筆の收入を記する簿册に大吉利市と書す、即ち大福帳の意なり、人卒然之を聞かば大俗大俗と連呼して之を罵らん、されども二士の風流曠達古來稀に見る所此一事を以て其高致を害せず、却つて天眞爛熳愛すべき處あり、信夫恕軒翁は當代の儒者として人の知る所なれども、現金主義のために世人の誚を招く、翁曾て伊藤圭介氏のために著書の序文を作りしが、圭介氏の謝儀を忘れたるを責め、又秩父の人某の乞ひに應じて筆を操りしことありしが其人の潤筆を贈らざるを憤り、恕軒漫筆に於て之を罵り、文人を惱ますの油蟲と云へり、依田學海翁之を評して恕軒は直情徑行、些の矯飾を加へず、實に愛すべく敬すべきの好人物なりと稱讚せり、尤も學海翁も現金主義を以て聞えたる人なれば左もあるべきなり、之に反して根本通明博士に至りは、錢財を忌むこと陀蝎の如し、某學校より博士を聘せんがため使者を遣りて請ふ所あり、略其承諾を得しが、最後に使者の口上として、時に甚だ失禮なれども、先生への報酬は月に何程と評議も決定致し居ればそれにて御承諾を乞ふと、云ひ出しに博士は赫と怒り聲色倶に厲しく、聖人の道を講ずるに、さる穢らはしきことを申し込まれては、斷然承諾し難しと、云ひ放つて再び取り合はず、使者のはふ〲の躰にて遁け歸り、更に學校の職員と協議して前言の失を謝し、漸く承諾を得たり、而して月々の報酬は水引を懸け三寶に載せ忝しく之を捧ぐるなりと、至極躰裁宜しき次第なるが、博士も之を辭せず、取りて米鹽薪蔬の費に供するに至りては、學海恕軒と何の異なる所かあらん、其之を欲するの情は即ち一なり、

蓋し錢財を賤むこと漢學者より甚しきは無し、而して之を貪り求むこと亦漢學者より甚しきは無し、たゞ口に之を斥けて心に之を冀ふのみ、其之を斥くるは學ぶ所の道に對して躰面を保たんと欲するなり其之を貪るは漢學衰頹の今日容易に財を獲難きを以てなり通明博

士と學海忽軒は各々其極端に走りて自ら其本領を露呈せしなり、されば普通の學者は博士の口吻を以て其外見虚飾となし、二翁の心を以て之を迎ふるなり、其人に對し世に處するの術に就て、經營慘澹の工夫を凝らす、亦勞せるかな、

以上の例によりて觀れば錢財の性質は決して賤むべきものにあらず、其之を賤むは外見虚飾より來れるなり、人にして外見虚飾に拘泥せず、區々なる禮數を廢するときは、他人に對し迷惑を與へざる限りに於て、錢財を愛好するも何の不可あらん、されども其程度の宜しきを得ざるときは、大に其人の品格を損することあり、たとへば夏熱しとて衣服を脱し赤條々となり、街上を彷徨せば誰か其失態を咎めざらん、腹飢えたりとて賓客の面前に於て遠慮無く茶漬を搔込む者あらば、禮を知らざるものとして笑はれん、是に於て相當の外見虚飾亦必要の場合あるべし、さればとて錢財を惜むこと彼が如く甚しきを粧ふは愚人の爲す所なり、通明博士と忽軒翁とを兩極に置きて、其中を執らば即ち程度の宜しきを得ん、

更に當今の人物に就て一例を示さんか、島田三郎と云へば今日の政治家中比較的に無慾なる人と思はん、彼自身も利慾の人を蠱惑する事を喋々と吹聽し、暗に淸廉潔白の君子を以て自ら許す、されども其監督せる所の新聞は如何なる記事を以て滿たされをるか、之を讀む者彼の言ふ所と相背馳するの事を怪まん、(此處大に論評すべきものあれども他日に讓らん)蓋し新聞の販路を擴張し、愚夫愚婦の歡心を買はんと欲するよりかゝる矛盾の事實を見るなり、即ち彼の言ふ所は表面の躰裁にて其實は阿堵物に戀々たるの情あるを知る、之に反して星亨に至りては、己れの慾望を滿足せしめんがために、世人の詬罵嘲笑を顧みず、勇猛直進して、人の敢て爲さざる所を爲す、一は外見虚飾のために其情を矯め其慾を塞ぎ、一は己れの欲する所に任せて忌憚せず、一は根本博士に似て一は忽軒翁に似たる所あり、前者は己れを欺き併せて人を欺くの誚を免れず、後者は人を凌ぐの罪重しと雖も情に於て隱す所無し、

然れども世人唯後者を責むるに急にして、前者の罪を不問に置くのみならず、多くは之が讃辭を呈す、古往今來歷史上に於て賢人君子高士隱者の名を博して千萬歳の後まで欺く狡猾者幾何なるを知るべからず、かゝる輩常に錢財の鄙むべきを說きて、虛名を竊む、錢財果して何の罪かある、若し靈ありて之を知らば必ず寃を訴へて止まざるべし、

果して前述の如くんば、錢財なるものは實に貴ぶべきものか、曰く否、錢財固より價無し、たゞ之に換へて何物をも獲らるゝが故なり、たとひ千萬の錢財を積むも、之を庫中に鎖して、其用をなさしめざれば、瓦礫と何ぞ擇ばん、

近來何の社會を問はず、人々錢財を望んて之に就くこと流水の卑きに赴くが如く、鷙鶚の燕雀を襲ふが如く、其勢の猛烈制すべからす、是に於て賄賂流行して風俗愈墮れ、社會の紀綱全く紐を失へり、又一方には之を難ずる聲喧しく、或ひは貨幣廢止の議論さへ出づ、蓋し錢財を以て諸惡の泉源醜類の元素なりとなすなり、ア、寃なり、枉なり、

海外新潮

海外大勢

●西大后の戰爭的政策

左に紹介せんとする一文は、「亞米利加評論の評論」に於てウヰリアム、エヌ、ブリユースター氏の支那の戰爭的政策に付て言說したる者なり、今同紙より其大要を摘載すへし

支那は今や再び其廣大なる領土を覬覦せんとする者に對して、再び其軍備を擴張せんとす、昨年間に於て西大后は全力を盡して、帝國の防備を要害にせんとを力め、種々の財源を集收して、終に首府防禦の爲めに、殆んと二十万の兵士に近代の武器を與へ、亦新らたに數隻の軍艦を製造し、又現に歐洲に注文中の者數隻あり、各省總督は競ふて其の地方防備の爲めに、軍隊の募集及び訓練に從事したり、又全帝國を通して民兵を組織せんとする計畫を試みたるとあり、此計畫や妄想にして且つ却て自から困難を加ふる者と云はさるへからず、民兵は却て其防くへき政府を嫌惡するの情を有し、有事の日に於ては軍に從ふ者あらさるへく、若し軍に從ふ者ありとすれは、そは却て無用と云はんよりは寧ろ害を來すへき者なり、而れとも兎に角千八百九十九年に於ては、支那軍政は甚た活動し、モーセル及マギシム銃を有する兵數も鮮少ならさりしを以て、諸外國も多少手を扣ゆる所ありしは疑なし、

今少しく昨年十一月二十一日に下したりし、四大后秘密訓令に就て述ふる所あるへし、此訓令は甚た秘密に保たれり、英米の社會か之れを知るに至りたるは、僅かに近來のことなり、抑も此訓令は各省の大官に發したる者にして、四大后か見て以て外來人を排斥するに必要なる行爲と認めたる者を命したるなり、各省總督は其領地內に來る凡ての外國は蠶食的勢力を排斥すへきを命せられ、從來の盲從的政策を捨てゝ、已むを得さる場合には武力に訴へても、其領地を守るへきを命し、若し外國權力の威嚇に屈從するか如き事あらは、嚴罰立ろに到るへしと脅かされたり、殆んと同時に總理衙門は四大后の命令に從つて、凡ての外國の蠶食に武力を以て抵抗すへき設備を爲すへきことを、各省の大官に訓令し、若し帝國の安全を害せんとする如き危機に瀕したる場合に於ては、北京政府の訓令を仰かすして、直ちに獨斷を以て其行動を爲すへき權力を總督に附與したり、今や各省の首府は北京と電線接續し居ろに拘はらす、此の如き命令を下したるは最も愕くに堪へたり、

而れとも若し此の等の命令にして、嚴正に各省總督の遵奉する所とならは、近き將來に於て、支那に難局を來すこともあるへきは、識者を俟たすして明なり、目下支那は何等の艦隊を有せす、又殆んと何等の滊船をも有せさるを以て、其長き海岸線は事實上無防備なり、軍隊は支那の滊船に由りては、北方より輸送するを能はさるなり、加ふるに鉄道を有せさるを以て、輸送は海路に由らさるへからす、而して海上は敵の艦隊の支配する所となるへし、各省の軍隊は一二の例外を除くの外は、盡く紙上の假設に過きす、例へは千人の兵と稱するも、其實武器を執る者は其半數に充たす、而して兵士は定額以下を支給せられ、其の訓練は見るに足らす、徵兵も杜撰なり、而して兵士に忠勇の心を抱く者なし、佛國は今や南方に於ける、二士官虐殺問題を決着して、礦山採掘鉄道布敷の權利を亦た新らたに得たり、佛國は虎視眈々として、東京に接續する支那領土を獲得するの機會を待つ者の如し、若し兩廣總督にして上に述へたる訓令に從ふこともあらは、佛國は直ちに其機會を利用するに躊躇せさるへし、此危機に際して、外政上並ひに軍政上に老熟せる李鴻章か、兩廣總督として任命せられたるは、支那に好意を寄する諸國の好ふ所なり、李は克く州兵の爲すに足らさるを知るを以て、假令ひ權力を有すと雖とも、敢て暴斷を試みさるへし、彼は能ふへくんば、名譽ある平和を維持するに力め、戰爭を强制せらるゝに至る迄は、正當なる戰爭の機會を得されは、決して戰ふこともあらさるへし、

刻下露西亞の鉄道は將さに完成を告けんとせり、今年の夏期に於て列車はセント、ピータースブルグより北京に開通すへしと唱へらるゝ此鉄道の貫通したる曉に於て、露帝にして若し抵當とせる滿州を沒收するを以て、已れに利ありとせは、首府を保護する二十万の支那兵は、果して如何なる効能を有するや、コサック兵は二週間に於て相尋れて滿州に浸入する事を得るなり、此の際に當て支那政府にして開戰の態度を採るときは、是れ却て露西亞の望む所に陷るものなり、露西亞は其資本を滿州の鉄道及ひ礦山に投し、又線路に傍ふて多數の露人は居住せるなり、彼等の生命財産は常に危嶮なるなり、而も支那官吏は彼等を保護するに於ては、微弱ならすんは頑固なり、之に於て露西亞は自から其臣民生命財産を保護するの要あり、此の如き理由に對しては、克く何人か反論する事を得るや、支那政府にして戰爭の態度を示すこと、益々盛なれは、益々其分割の機會を切迫せしむるなり、露佛同盟は常に此機會を待ち、且つ近かしめんことに力めゝあるなり、露佛は支那と爭端を釀すことに由りて何等の失ふ處なくして、得る所大なるなり、若し西大后の此戰爭的政策にして放棄せらるゝ事なくんば、支那の危機は恐く決して消滅するの時な

かるへし、

若し米國にして支那帝國の凡ての部分に於て、其商業の爲めに門戸開放の政策を維持せんとせは、急速に之を爲さゝるへからす、『天か人を滅ほさんとするや、先つ之れを狂亂せしむ』狂亂なる語は現時の支那政府を評するに、最も適當したる語なり、若し米國にして門戸開放を贊成する諸國を一致せしめ、漸次支那を改革し、支那か自から獨立して、國際團躰に於て其正當なる地位を占め得るに至る迄、帝國の防備を充實するをに助力を與へ得るならは、其曉に於て支那か現時の此政策を取るも、未た遲きにあらさるなり、而れとも支那か現時に於て、露佛と開戰せんとするの政策を執るは、却て自から其不幸を招くものなり、何となれは支那の門戸開放政策を贊するの諸國は、袖手傍觀するに至るへく、其結果は遠からさる將來に於て、無際限の外交上の紛議を生し、商業國民に大損害を蒙らしむるに至るへけれはなり、

露西亞佛蘭西か如何なる質言をなすとも、終に空言に過きさるへし、彼等は一度必す支那の領土の廣大なる部分に於て、其統治權を得るに機會を得る事あるへし、而して早晩開放したる門戸か吾人の面前に於て閉鎖せらるゝの時あるへきなり、

◉佛蘭西伊太利及三角同盟

十九世紀の下半期に於ける佛蘭西伊太利間の關係か、甚た親密ならざりし事實は、世界の熟知する處なり、佛蘭西は一時半島に於て、覇權を有し、佛蘭西人か伊太利人を臣僕の如く遇したるに依り、伊太利に於て佛蘭西人を嫌惡する國民的感情を勃興せしむるに至りたり、加之共和井に帝政の佛蘭西か俗權に關して、法王に援助を與へたるを以て、愈此感情を盛ならしめたり、然れとも近來に於ては伊太利佛蘭西間の交情は、愈親密に赴くの兆候を呈し來り、一方に於ては佛蘭西は益伊太利の國權を尊重し、伊太利に於ても佛蘭西との交情は、將來に於て三角同盟に比して、一層價値あるものと認むるもの少なからざるに至れり、シナー、ピダリー氏は、其著書『近代の伊太利の政治的及社會的狀態』に於て次の如く謂へり、

伊太利かビスマークの妖寬的政略に服從するによりて被る如き大なる障害はあらざるべし、此政略は伊太利を驅て、獨逸との不自然なる同盟を結ばしむるに至らしめたり、此同盟は伊太利國民の心裡に非常なる危險を生じ、且つ伊太利の財政を紊亂せしめたり、而して又伊太利人民に最も過重の軍備を負擔せしめ、且つ佛國より隔離するに依て、吾人の商業及產業の健全なる發達を阻害したり、

然れども多數の日耳曼新聞雜誌は、伊太利佛蘭西間の確執不和は、三角同盟の重なる結果にあらざる事を主張し、且つ三角同盟は日耳曼の利益となるよりは、寧ろ伊太利の利益となること多しと主張せり、然れども墺太利に於ては、伊太利が三角同盟より分離せんとするの形跡あるに就き、大に危懼を懷くものあり、維納發行の『ノイエ、フライエ、プレッセ』は、伊太利が佛蘭西と接近せんとするの危險に就て伊太利に忠告を試みたり、之に對して巴里の『ジュールナル、デ、デバー』は、長文の反駁を試みたり、其中に曰く、

クラウス氏が論じたる重なる說の一は、吾佛人は伊太利合同に對する不倶戴天の敵なり、地中海及び小亞細亞の覇權に對する、吾人の主張は、合同したる伊太利の存在の爲に阻害せられたりと想像せらるゝを以て、吾人は伊太利を絕滅せざるべからずといふに在り、然れども吾人の見る所を以てすれば、地中海に於ては一の權力より多數の權力の存在を許すの餘地多く、且つ又吾人の所謂主張は、英國の主張若くは

墺太利自身の主張に比して、伊太利に對して一層危險なりと謂ふこと能はざるべし、又他の攻擊は、佛蘭西が法王の主張に援助を與へ、又海牙會議に法王の使臣を出席せしむるに就き、吾人が努力したりといふに在り、然れども佛蘭西が、法王と伊太利王間の鬪爭に關しては、嚴正なる中立を保つことは事實なり、

此の如き說は、若し日耳曼新聞紙の主張する所ならば、多少の價値を有するならんも、澳斯太利人が佛蘭西人を以て伊太利統一に對する不倶戴天の仇敵なりと云ふに至つては、實に噴飯に堪へざるなり、澳斯太利人こそ却て伊太利統一に反對したる爲めに、佛蘭西の攻擊を蒙りたることあるなれ、又吾人を以て法王の俗權恢復に援助を與ふる者となすは誣言と云はざるへからす、却て澳帝フランシス、ジョセフこそ、法王を盲目的に尊敬したるより、伊太利王フンベルトを羅馬に訪問することを避けたるなれ、澳斯太利の議論は實に一笑にも價せざるなり、抑も伊太利が三角同盟に加入したるは、果して如何なる理由に依るや、カベリー氏の正式なる宣言に依れは、實に澳斯太利に對して伊太利統一を保護せんか爲なりしなりと、

●コンゴー自由國の進步

コンゴー自由國は面積八十万平方哩を有し、其位地赤道直下にありて、南緯十四度北緯五度の間に出入す、其面積は約佛蘭西の四倍に當る、レオポルド二世（比耳時の王にして同時にコンゴー自由國の主權者なる）の寬大にして野心なき政策に由りて、過去二十五年間に於て、其商業及ひ文明を增進したること、實に驚くへき者あり、今チカコ刊行の『インターナショナル』紙上に於ける、ハーリー、トラツイ、セルマン氏の記する所により、其大要を窺へは

コンゴーに於ける商業、

コンゴー自由國に於ける將來は、希望を以て極度に赫々たり、商業上の企業は、凡の豫想以外に於て著々成効しつゝあるなり、放下したる比耳時の資本は、コンゴーに於ては驚くへき利息を生しつゝあるなり、象牙及ひ護謨は殆んど無盡藏にして、生產地及熱帶的產物の最良品も亦た無制限なり、歐羅巴の諸國は、今や中央阿弗利加が、將來に於ける商業上の極樂園たるの事實に、漸次注目するに至らんとするものゝ如し、此新進國に於て此の如き立脚地を得たる比耳時人は、其先見と企業とによりて、目下已に非常に利益を獲得しつゝあるなり、

コンゴーの文化、

國內到る所に建設せられたる學校は、大抵皆良結果を得つゝあるなり、コンゴーの青年は容易なる亦た進步著しき教育を受けつゝあるなり、此等青年にして比耳時に到つて、種々の職業に從事する者も少なからさるなり、彼等は巧みに佛語を話し、又高等教育を受くるの能力をも有す、

凡ての觀察點より見て、比耳時人が中央阿弗利加の殖民及ひ文化の上に、非常なる進步を來したりと、斷言するも敢て過言にあらざるべし、コンゴーに對する施政を以て、畢生の事業となしたるレオポルド王は、今や其勞力の結果を享有しつゝあるなり、其臣民は此廣大なる領土に依て利益を獲得しつゝあるなり、其始め危險を冒して、此領土に放資したる比耳時人は、今や急速に且正確に增加する利益の財源を取得するに至れり、比耳時の產業は新たなる得意場を發見し、其商業はコンゴーの熱帶產物の漸次增加する輸入に由りて、活潑なる市況を來すに至りたり、多年ならずしてコンゴー自由國が、凡ての熱帶諸國中最も富有にして、又最も繁盛なる國として目せらるゝに至るへきは、吾人の豫言して誤らざる所なりとす、

●西班の難局

西班牙は尙未た合衆國との戰爭の結果に由りて、非常に苦境に沈淪しつゝあるなり、一年の歲計の不足は實に六千万弗に上る、如何にして此不足を補充せんかは、西班牙政府の焦心苦慮する所なり、而して六千万弗中三千五万弗は、國債の轉換によりて之れを補ひ、五百万弗は恩給金養老金等の削減に由りて補ふとを得たり、而れとも殘り二千万弗は、增稅に由るの外、他に之を得るの途なきなり、是に於て現大藏大臣ビラバード氏は、所得、酒精、礦山、煙草輸送印紙、死亡及讓與等の如き者に向て、新稅を課するの案を建てたり、而るに西班牙國民は左なきだに已に過重の租稅を負擔せるを以て、國會は如何にして國家の事局を救濟せんとするやの問題は、之れを別問題として、益々此の新附加稅に反對したり、此課稅案は國會に提出せらるゝや、國論囂々として實に鼎の沸くか如くなりしなり、マドリッドニ於ける一新聞紙を見るに

假令ひ政府は此の如き苛酷なる議案を、强て通過せしめ得たりとするも、バラドリッドに於ける全國商業會議所の會合に於ては、全西班牙を通して納稅を拒絕すへきとを決議しなり、吾人にして若しバルセロナに於ける、一部の納稅拒絕すら殆んと一揆に類するか如き、結果を惹起したるの事實を臆起せは、全國を通して此の如き運動の行はるゝに至たれり、如何に戰慄すへき光景を呈するは、想像するに難からす、此際に當てシルベラ內閣の爲めに計るに、最良の方法は、內閣總辭職をなすにあり、若し否らすんは、少くとも此の如き大反抗を招く議案を提出したる、ビラバードを免官せさるへからず、

西班牙內閣の運命亦憐むへきなり、加之羅馬加特利教は、增稅に對する反對運動を助けて、中央政府に反抗するに至れり、而して西班牙に於ては此宗教か勢力甚た偉大なるを以て、或は此運動よりて延ひて、內亂を釀すの恐あり、或は曰くカナロニアに於ては、已に叛亂の形跡顯然たる者ありと、而して其尻押は實に僧俗の爲す所にかゝる、伯林の「ポスト」は曰く、西班牙にして現時の財政の危殆を脫し、其他種々の紛々雜々たる難問題を避けんと欲せは、宜しく大英斷を以て、其の殖地を放棄すへしと、而れとも是は西班牙人の決て容るゝを肯んせさる所ならへし、

海外雜纂

●ボアー婦人と南阿戰爭

史に稱す古昔スパルタ男子の征途に上るに當てや、其妻女皆國家の爲めに忠死せんとを冀ふて生還するとを冀はすと、スパルタの久しく覇を希臘に稱したる亦所以ある哉、英杜戰爭開始せられて已に七閱月、激戰奮鬪破れて而して氣燄盛んなるボアー人の勇氣壯烈は吾人の嘆稱する所なり、而して吾人はボアー婦人の狀態を知るに及んで益々嘆稱の念を禁する能はさるなり、乞ふ少しくボアー婦人に就て述ふる所あるへし

均しく戰爭に從事するボアー人間に於ても、其トランスバール共和國にある者と、オレンヂ自由國にある者とは、少しく其性情を異にする所あり、而も其婦人の勇氣に滿てるの點に至ては異なる所なし、トランスバールに於ては一朝外敵の四境を壓するか如き場合に際しては、婦人と雖とも皆起ッて國事に力め、偉大なる功勞を國家に盡すもの少からさるは世界の均しく知る所なり、『ホルクステム』の傳ふ所に由れは婦人は男子と共に捕虜拘禁の任務に從事する者ありと、而も婦人の多數は其夫婿と共に共に戰場に臨み互いに戰爭の苦楚を分ち或は負傷者の看護に從事す

る者多きなり、オレンヂ自由國民に至てはトランスパール國民に比して、永く平和の生活に慣れ且つ資產に富む者多きを以て、戰爭の始めに當りて醫師の診斷を以て戰爭の役務を免れんとする者も少なからざりしかは、一婦人は其怯懦を怒りて檄を國內に發したり、其文に曰く、

吁我國男子は何たる無恥ぞや、甲は云ふ我れ心臟を病めりと、乙は曰ふ四肢不具なり、而して丙亦曰く我れ熱病に苦しむと、彼等は其怯懦を蔽はんとして皆な其懷中に診斷書を携ふ、尙ほ又た他の者は諸君に語るへし、我等は家に親愛なる妻を有す、而して妻や吾人を愛慕するの念深く、吾人の戰場に臨むを許さずと、妾は實に之れを信する能はさるなり、而も若し之れをして事實ならしめは吁何んたることぞや、姉妹諸君妾は已に吾夫に從つて出陣せんと用意せり、而も夫を愛するの熱情に於ては敢て少しも諸君に讓る所なし、妾は吾夫の傍に死せんことを冀ふ、妾は確信す獨立の爲めに奮戰することを冀ふ婦人の多數なることを、吾人婦女は我自由國の男子諸君に決して劣らさるなり、來れ諸君吾人婦女は諸君に男子の義務及び國民の義務を敎ゆへし、

此の如き檄文は蓋し其稀ならさりしなるへし、而して其の男子間に如何なる影響を及ほしたるかは問はすして明なるへし、英國の强大を以てして尙未た全く南阿に於ける兩共和國を征服し能はさるものボアー婦人の力多きに由ると云ふも過言にあらさるへし、

●トラストの利益

トラストに關する利弊論は紛々として歸する所を知らす、左に揭ぐる一章は、スタンダードの石油會社のジョン、ディー、アークーボルドが、トラストは、勞働者の數を減少せずして、反て增加するものなりとの點より、大にトラストの利益を論したるものなり、氏は曰く、勞働者が一時減少するとの事實よりして、一時早計にも、トラストは勞働者の數を減少すとの說は誤謬なりと言はざるを得す、經濟上進步改良したる方法により、廉價にして且つ良好なる生產物を得るの結果は、大仕掛の生產を要し、大仕掛の生產は、多數の勞力を要するを以て、勞働者の數が減少せずして反つて增加するは、火を見るよりも明なりと、此點を明にする爲に、器械工業が手工に代りたる當時の狀態を引用して曰く、

蒸氣を以てする紡績及織布の初めて英國に行はれたる當時に於ては、從來の勞働者は、一時其職を失ひ、國內に彷徨したり、當時英國に於ては、是等勞働者の數は八千人以下なりしも、十年後に於ては、此等の工業に使用さるゝ人民は、三十五萬人となり、今日に於ては直接若くは間接に、勞働に從事する人民二百萬以上に及ぶべし、

印刷業も亦好適例なり、予は近世の印刷界の發明せられたる當時に於て、舊來の印刷に從事したる勞働者の數は果して幾件なるを知らざるも、恐らくは數百千人に過ぎざるべし、新印刷器械によつて增加せられたる印刷業者の數は、實に驚くべき者あり、蓋し之に依て其生產費を減少し、從て讀者の數を增加したるを以て、其需用を急劇に增加したるに因る、

原則は明白なり、即ち廉價なる生產は消費を增加し、增加したる消費は、勞働の需用を增加す、

トラストに反對するものは曰く、トラストは勞働者の賃銀幷に數を減少すと、アークボールド氏は之に答へて曰く、此點に就ては、事實が尤も能く其誤謬なることを證明す、尤も成功すべき事業を營むトラストは、最良の賃銀を支拂ふ、而して良好なる賃銀を受くることの外に、勞働者はトラストが食物、衣服及生活の必要品の價を減少したるを以て、其貨幣の購買力の增加するの結果を得たり、

トラストに反對する他の說は、トラストは被傭者を奴隷の境遇に沈ましめ、之を以て其從事する事業より利益を得るの望を絕たしむるものなりと、氏は之に答へて曰く、

凡て成功したる事業家及管理者は、多くは、其初め勞働者たり、加之トラスト若くは資本合同に於て、普通の勞働者と雖も、其所得を貯蓄し、之を其事業に放資することに依りて、其事業に利害を感じ、及び其利益の分配に與かることを得べし、

トラストが勞働者に與ふる利益を要約して、且つ氏の關係したるスタンダード石油會社に就て曰く、トラストは其生產物の價を減少し、被傭者に良好なる賃銀を支拂ひ、且つ其支拂は精確にして不變なり、トラストは使役者の數を增加し、又會社が有する如き忠實にして滿足したる勞働者は、從來未だ曾て存在せず、此の如き資本の合同及大資本存ぜざりせば、今日三萬五千の勞働者と、一日十萬弗の賃銀を支拂ふの事實は生ぜざるべし、且つ廉價なる光は各大陸の宮殿及陋屋を照さゞるべしと、

●四十年間の英國海外貿易

一千八百九十九年度に於ける英國海外貿易の總額は實に八億一千五百萬磅に上れり、一國民にして八億磅以上の貿易額に上りたる者は古來嘗て聞かざる所なり、嗚呼亦た盛なりと云ふべし、三月刊行の『コンテンポラリー』紙上に於てミッチエル、ムールホール氏は千八百五十九年以來の英國海外貿易の進步に付て一文を揭けたり、今其要點を簡畧に讀者に紹介して以て英國貿易の過去及び現在の狀態の槪要を窺ふの資に供せんとす、即ち氏の論文の槪畧左の如し

一、千八百九十九年に於ける英國貿易額の每一人に對するの比は從來嘗て見ざる高度に上れり、

二、千八百六十八年以來の英國貿易の發達の比は輸入に於て五割二分の增加せしも輸出に於ては五割に過ぎず、

三、獨乙、和佛蘭西、和蘭陀、比耳義よりの輸入は大速度を以て增加しつゝありと雖とも輸出は獨乙を除くの外漸次減少しつゝあり、

四、西班牙と英國との貿易は千八百六十八年以來二倍となれり、一方に於ては伊太利との貿易は、非常に減退したり、

五、合衆國と英國との關係は、英國殖民時代の三倍に增進したり、輸入の輸出に對する比は、實に三と一なり、

六、アルゼンチンを除きたる南亞米利加は、今や英國の手を去て日耳曼に赴きつゝあり、

七、極東に於ては、淸英貿易は非常に減退しつゝあるが、之れに反して日本との貿易は、增進しつゝあるなり、印度及埃及とは減退しつゝあり、

八、オーストラリヤ及びカナダは、英國に對して益輸入を增せり、然れども英國よりの輸出は、以前より減じたり、

九、ブリテン西印度との貿易は減退したりと雖も、南亞弗利加との貿易は、大增進を來したり、

十、金銀地金の輸入は、四十年間に於て、每年平均三百萬磅なり、一千八百八十九年より九十八年に至る十年間に於ては、每年平均四百五十萬磅なり、

十一、一千八百九十九年の貿易は、一千八百九十八年に比して、輸入に於て一千五百萬磅を增加し、輸出に於て三千六百萬磅を增加せり、

十二、英國の輸入超過は每年一億五千萬磅に上る、而して此の差額は英國商船の收入及び外國に放資したる資本の利子を以て、補償することを得るなり、

●世界に於ける最大神學校

數の點より見て世界に於ける最大なる學校は、伯林の大學にもあらず、また巴里の大學にもあらず、此等の大學は五千乃至一萬の學生を有するのみ、二萬の學生を有するカイロ府に於けるエル、アザール學校こそ、世界に於ける最大なるものなれ、此學校は、コーランを以て凡ての教育の基礎となせり、

エル、アーザルは、數百年間マホメット諸國間に通ずる、教育系統の中樞にして、大學及び回々教禮拜堂を有し、其教育は純粹に宗教的なり、マホメット教の學者の謂ふ所に從へば、凡ての科學はみなコーランに基けり、コーランは、啻に文典上の教科書として使用せらるゝのみならず、尚凡ての科學の教科書として使用せらる、法律學、歷史、理學若くは地理等の學科に於て、習得し得べき學識は、直接若くは間接に、みなコーランより習得するを得、神が科學の凡ての秘密を、表示したる此コーランこそ、科學の最後の決定者なれと、又其或學者は謂ふ、亞歷山の圖書館に於ける五十萬の書籍も、要約すればコーランのいふ所と一致すべし、若し然らずんば只空言たるに過ぎざるべしと、

コーランはエル、アザールの教授に向つては絕對必要なるものなり、其教授は今日に於ても、なほ地球は平坦なりと教ゆ、他の學科に於ける價値も、また此類なり、然れども此學校は、東方に於ける大勢力たるを失はず、回々教諸國の學生は此學校に雲集す、而して各國よりの學生は、各特別なる學房を占む、或は東印度より來るものあり、或は波斯より來るものあり、其他土耳其、トリポリー、チュニス、アルヂアー、モロッコ、アラビア、等より來る、此等學生の多數は、多年の間アザールに止まり、班白に至るまで去ることなし、

以上の如き絕對的保守に反對する何等の勢力も埃及に存せざるや、此方向に於ては、僅に其萌芽を見るのみ、埃及の官立學校は、此點に就て稍或ものをなしたり、歐羅巴に留學したる青年若くは歐人に學びたる青年が、自然にアザール學生の陳腐なる智識を擯斥するは自然の勢なり、加之政府は、アザールの試驗制度を承認せざるを以て、其出身者を採用するに當ては、特別なる試驗を試む、又時勢の進化に伴ひ、他宗の教義も漸次勢力を得るに至り、遂に回々教の運命にも影響を及ぼし、從つてエル、アザール大學校の運命にも影響を及ぼすの日あるべし、

●盲人の雜誌

インキなくして印刷したる雜誌は、亞米利加に於て唯一なるのみ、即ちヒラデルヒヤに於て發行するポイント、プリント、スタンダード是れなり、其白紙は目を有するものゝ讀む能はざるものにして、盲者の爲に印刷せられたるものなり、ヒラデルヒヤに於ける北亞米利加雜誌より、此異常なる出版物に關する次の一節を紹介せん

『ポイント、プリント、スタンダード』(針頭を以て印刷したる雜誌)は盲者の爲に發行したる雜誌にして、二年間盛に發行せられ、全合衆國の數萬の失明者に、幸福と娛樂とを與へたるものなるが、既にして其創立者死亡したり、創立者は亦盲人にして、其全生活を捧げて自己と同様なる苦痛を感ずる者に、文字上の娛樂を與へんことに力めたり、昨年の下半期間は、多數の盲目者は此雜誌の休刊によつて、一層寂寞なる生活を感じたり、然れども此狀態は、今や既に過去に屬し、盲者の熱心なる指頭は再び凸起を有する白紙に接するを得るに至れり、即ち一婦人は復活したる雜誌の主筆の地位を占めたり、而して二月發行の雜誌を見るに、此婦人が將來ますます成功を奏すべきこと明なるが如

し、

盲者が讀み得る方法に、二あり、一は古き方法にして一文字を凸起せしめたるものなり、他は所謂點凸起と稱するものにして、近年ニューヨークのウイット氏の發明に係るものなり、而して甲者は一アルハベットを現すに、唯六個の點を要するのみにして、此六點の配合に依て全アルハベットを造ることを得るなり、點凸起の方法によつて、讀書することを學ぶは、舊方法に比して一層困難なること明なれども、一たび之を習得したる時は、盲者は殆んど常人と異ならざる速度を以て讀書することを得るなり、之れを以てクニース氏はポイント、プリント、スタンダードを發行するに至れり、然かも氏は凸起文學の舊方法によつて、發行したる雜誌を廢刊せずして、新方法に熟練し能はざる盲者の利益の爲に、舊方法を以てする雜誌を繼續したり、

此等雜誌の發行所は北第四街に於ける一小屋に過ぎず、クニース氏は、其助手として、ジョセフイン、ビー、コップ孃を用ひたり、一年前に於て彼の死するや、彼に心服したるコップ孃は、彼の爲したる此赫々たる事業を繼續せんことを欲したるも、數月間は他より何等の援助を受くる能はずして、之を繼續すること能はざりし、然れども孃は之に屈せずして、種々奔走の結果遂に雜誌の發行に必要なる設備をなし得るに至り、ポイント、プリント、スタンダード及びヒラデルヒヤ、マガジン、ホワー、ゼ、ブラインド（盲者の爲めの雜誌）は再び盲者の心を慰むるに至れり、

盲者の爲に發行したる此等の雜誌は、凡て宗教的の性質を有す、然れどもポイント、プリント、スタンダードは、他の諸雜誌の精華を拔萃し、且つ重要なる紀事を記載することに力む、二月刊行の雜誌は、ポートリコー港の紀事、デウエーの歸國、ドレフユースの審問、トランスバール事件等の重要なる紀事を載せたり、

詞藻

新體詩

山東角の燈臺

蒲原有明

たけり うつ 荒海(あらみ)の 波は、しほけむり
とざしたる 夜半(よは)に とゞろと 鳴り ひびき、
影 たれて、沈みがちなる 星の 邊(へ)の
幾灘(いくなだ)の 千里(ちさと)の ほかの いきほひは、
あたり たつ 磯礁(いそいは)ごしに くつがへる。
見よ、闇に いかりの 花か、さながらに
巌壑の たけき いなづま せかれては、
八十隈(やそくま)に 火(ほ)くつの あらに たばしらせ、
千尋(ちひろ)なす 底に 散り かふ かと、あやに、
みなぎりて、くだけ 落つるは? あゝ、さばれ、

そのまゝに　おけやゝまた、かの　うちぎらす
雲に　すら　たゞ　しばしだも　かくろはず、
吹き　すさぶ　風も　およばで　消し　なづみ、
よろづ　すむ　星より　あとに　殘されつ、
なほ　高く、なほ、さし　さかる　ひかり　こそ
しりてむ　と　まことを　もとむれ。くしや、けに
あかされぬ　位を　しめて　いさゝかも
まじろがず　みたれぬ　かげの　こゝろには、
靜やかに　そも　なにものか　宿からむ。」
　降り　くめる　みゆきや　やがて。角や　冴え、
笳や　氷る　しひて　音に　たて　渡り　こし、
飄へる　はやての　曲に、あるは、また
奔濤の　さかまき　せまる　みねの　脊に、
ともすれば、しら雪　こゝに　きはだちて、
かたよりに　ひらめき　もるゝ。時に　きけ！
よぎり　とぶ　こゑは　かくこそ——『吹けや　風、
うてや　浪、かく　さはげども、いましらも
天地の　法に　したがふ　わが　友よ。
のる　船よ、とく　進まずや。佩く　大刀の
物象て　ひらき　あかさむ　時は、いま
きざみ　くる　刹那の　ひまよ——かは　あらぬ、
かは　まちし　燈臺の　火か、吹雪より
あらはれて、われらが　あかき　あら肝を
照らしつゝ、むかへ　はげます　光　かな。
とこもえに　もえ　へだてなく　よしや　なれ、
とほときや　あはれ、山東岬角に
そびえ　たつ　燈臺の　火よ、いのらくは、
とこしへに　うるはしく　あれ』こゑは　かく
こゑや　わが、やまと　をのこが　たまの緒を
くろかねの　心　ふるはし　擊たなくば、
その　ほかに　かゝる　響は　いでまじを、
なぞや、なぞ、あだには　けなむ、大空に
さけぶ　もの、とく　わだつみを　はしる　もの、
きほひつゝ　遠つたへ　ゆげ　されば　こそ。
世は　ために　おどろきぬべし、しかれども
くしと　見し、いまも　さと　みる　光　のみ、

北辰か　こゝに　あもれる、　宿座より
かりにだも　さはだち　うつる　ことぞ　なき。」
あしたには　あはき　明珠を　鯨鯢の
もたげ　くる　かしらに　墜し、ゆふべには
うすれ　ゆく　かもめ　いくむれ　送りつゝ、
獨、まづ、微熒の　おとを　まもるかし。
韓山の　くもは　かなたに　よこたはり、
こなたには　魯山の　ゆきぞ　うづたかき。
あくず、けふ　すでに、いましの　ほとりには、
世の　海や　浩渺として　きはみ　なく、
おのづから　無期の　あらしに　さそはれて、
蠻瘴も　その　ふちよりや　むらたたむ。
しかれども　なが　遍照の　光明は
とこやみの　うちに　かゞやき　つきざたむ。

（二十六年冬稿）

詩

鵜山七曲

池谷觀海

水繞如大環。參差爲七曲。曲曲山峇長。爭先鵜欲逸。
背上有行人。下瞰笑胼胼。曾聞使鵜者。手具操縱術。
吾立最高峰。隨風一呼叱。萬木震翼翅。驚起齊奔軼。

征途脚疾復作爲賦短歌

木屐葛藟。予疾在趾。婦兮憂傷忘身。慰以征途已邇。
雲行漉漉。風鳴蕭蕭。艱險艱險。客心欲消。

遂賃竹輿

長途駕病白雲間。寂寞身經幾阻艱。好語重思前日宴。
肩輿羽扇入青山。（同人祖道宴戲日入山須綸巾羽扇乘肩輿也）

山家晩望

構屋知何日。青溪自有家。人歸炊煙起。山上足明霞。
麗彩分黃葉。邐迤映白沙。攬之指如染。凔深口吐華。
久欲徵仙事。誰謂薄荒遐。

得一山復遊

此山傾心久。願爲煙霞叟。行行谷自深。流雲繞其口。
遂入無所覩。空洞傳鳴吼。須臾復寂然。澄凝如喪耦。
涓涓隨性泉。掬飲方醒後。逕邃欲通天。傍石皆守醜。
水石雖不同。交來爲吾友。

雜吟十七首

稲田靜處

客歸對明月。客到復淸言。迎送白雲在。山中不掩門。
柴門初日上。開戶落花深。綠樹淸陰合。來禽有好音。
夙昔期君子。豈徒伍小人。貧居雖莫酒。花落綠陰新。
開門江上冷。淸夜所思多。草岸微風度。搖搖月在波。
東風草堂上。獨座傾玉缸。人去閑白日。花飛入虛窓。
竹院無人到。柴門苔一蹊。幽花雙蝶去。深樹老鶯啼。
落花依草渚。微雨晩來晴。惜春江上客。徐弄輕槳行。
閑花墜流水。墟落々陽明。悅目新綠色。愜心幽鳥聲。
處處白雲在。山中夕氣明。幽花巖際笑。馥郁不知名。
淸冽山家酒。看花一笑傾。山頭明月出。門外大江橫。
昔日折楊柳。送君淚濕衣。今日楊柳綠。春回君未歸。
江南與君別。攀柳思依依。此去一千里。春風吹我衣。
大道通宇宙。一心愼履行。深哉聖賢誠。涵日碧潭明。
乾坤何納納。風月是吾文。胸裏藏邱壑。眼中多白雲。
掬水蛟龍窟。月搖波自光。頷珠不能獲。空使我心傷。
道固適心內。終無一卷書。風花三四片。吹室自沖虛。
蕙蘭君子佩。入室見光輝。穆穆淸香在。月明吹我衣。

彌富驛送人歸柳城二首

服部擔風

紅遍桃花繪夕霏。雨絲風片餞君歸。柳城此去牛鳴地。
猶怯離愁作絮飛。
驛門折柳駐征驂。且賭旗亭酒一酣。相對無言唯握手。
桃花煙雨似江南。

題三傑圖 横井某囑

堀起英雄大耳兒。虎髯鳳眼亦肩隨。義猶骨肉死生約。
情到君臣魚水知。計定南陽訪廬日。淚零白帝托孤時。
丹靑千古慕餘烈。辟幅同留颯爽姿。

賀立松晴濤擧女併似雪妹時庚子古重三後二日也

妹家擧女玉爲肌。三月桃花頰面時。小婢紅閨傳細語。

嬌妍不劣紙人姿。

滿座春風笑舉觴。少夫婦亦作爺孃。通家同有女兒福。
遊戲應看姊妹行。

送春　前田止舟

九十韶光日易斜。憑欄惆悵惜春華。風無聊賴漫飄絮。
雨有情思頻妬花。滿橐詩留鷄肋歎。一肱夢剩蝶心奢。
以何餞得東皇別。只擬孤吟達曉鴉。

入東京僦居駒籠有作

千里浮萍始寄蹤。駒門春暖客情慵。滿簾花影三竿日。
夢破傳通院裡鍾。（居與傳通院遙相對）

移琴書得入京城。節過花朝衆鳥鳴。客眼喜看新景色。
櫻雲歛處岳蓮明。

曉霽

浄蕊群紅雨迹新。滿城曉樹綠津津。一鵑帶月度凉爽。
喚醒春愁梵裡人。

牡丹

儂豔千叢暎曉霞。天香吹滿魏姚家。梨白杏紅無顏色。
花到牡丹眞是花。

過墨堤

幾簇櫻雲擁翠娥。梅兒塚畔酒聲多。悠悠都鳥無人問。
閑弄飛花浴暖波。

百草園　栗村春江

虛亭懸在樹梢間。人自花雲深處攀。欲舉一杯酬落日。
酡顏紅映十州山。

暮入小金井村

斜陽相促醉人回。堤上未收羅綺埃。今夜月中看更好。
黃昏獨自問花來。

溪田漉漉水聲加。十里長堤靄暮霞。紈扇畫羅人已去。
紅燈一點逗櫻花。

晩倚旗亭連侑巵。春蟾花外欲升時。一堤千朶萬枝影。
落在醉衣人不知。

諸公應感聖恩隆。盡日看花跨御驄。不識何州二千石。
兩三騎返月明中。

偶吟

未到工夫求放心。春來詩酒儘招尋。今朝唯好掩門臥。
一巷落花煙雨深。

賀島地默雷師六十　關　旭　巖

廣舌翻瀾忽默然。法雷百里震人天。而今六秩眉如雪。生作金身不壞僊。

庚子四月八日。高島呑象翁。行孔子祭其家。大張雅宴。余亦見招。乃賦此以贈。

兩楹奠罷宴高臺。浩蕩春波當面開。爲是主翁需酒食。客皆不速上堂來。

訪塡海師席上作

剪燭夜談劇。交情酒味深。瓶梅紅片片。似表主人心。

次旭巖韻　痴山　塡海

談屑皆珠玉。煎茶坐夜深。瓶花高潔趣。孰若道人心。

俳句

四方太選

灌佛

打寄つて甘茶すゝるや佛生會　時雨
灌佛や町中の寺にぎはしき　仝
げん／＼を三葉四葉に花御堂　仝
筋違に柄杓置きたり花御堂　坡醉
花散りて甘茶に浮ぶ御堂哉　仝
佛壇に甘茶の桶を移しけり　仝
鶯を放ちやりけり佛生會　青藍
葉牡丹の苗貰ひけり佛生會　仝
灌佛や寺子の遊ぶ堂の椽　仝
心ゆく飾られしや花御堂　紫溟郎
なみ／＼と甘き泉や花御堂　仝
ぐるりから甘茶を灌ぎ參らする　仝
灌佛やあぶせ參らす通りがけ　稻青
灌佛の次ぎへと杓をまはしけり　仝
挿し添へし籔の椿や花御堂　仝
三四杯かけ參らせし甘茶哉　柳家
花御堂ぺん／＼草もふかれけり　仝

眞黒な小さな像や花御堂　仝
御佛に甘茶をそゝぐ念佛哉　晁東
灌佛の甘茶を瓶に貰ひけり　仝
灌佛や棕梠の樹多き南蠻寺　仝
灌佛や午の鐘鳴る躑躅寺　笠雨
灌佛の甘茶貰うて戻りけり　仝
御佛に夕日さしけり花御堂　仝
山吹の雨や小寺の佛生會　空居子
灌佛や甘茶いたゞく掌　仝
山寺の晝靜かなり佛生會　仝
灌佛の寺は躑躅の名所哉　蘇白
灌佛や菜種咲く野の人通り　仝
灌佛にげんく〳〵の束捧げけり　仝
灌佛の甘茶戴く念佛哉　天風
灌佛の寺に詣づる袷かな　仝
灌佛の甘茶も盡きてしまひけり　仝

御佛にそゝぎ參らす甘茶哉　仝
手を取てかけさせ申す甘茶哉　麥圃
世に未だ彌勒も出でず佛生會　仝
南無阿彌と唱へかける甘茶哉　仝
灌佛や櫻の花も散つて後　仝
鐘鳴らす若葉の寺や佛生會　夓々
灌佛や桶をあふるゝ五香水　仝
卯の花や甘茶をわかす灌佛會　仝
灌佛や甥の僧訪ふ東大寺　仝
灌佛や廢れてありし黃檗寺　四方太
灌佛の寺から里へ麥の秋　仝
藤寺の藤のさかりや佛生會　仝
二つ三つ小柄杓浮けて花御堂　仝

次號　夏草　（十句を限る）

五月五日締切

評論

政治

●政界の休息時代

不思議なるは、最近數ヶ月に於ける、政界の情態なり。動くが如くして、而かも動かず、變ずるが如くして、而かも變せず。

第十四議會の閉會せらるゝや、各政黨、各政客は政界の將來如何、及び之れに對するの方針につき沈思熟考したりき。是れ政界思案の時代なり。思案の時代過ぎて、新局面發展の叫聲となり、自由黨は現狀打破の運動に一歩を進めぬ。是れ運動の時代なり。而して新局面發展の運動は、首相邸第二回の會見と共に、一先づ中止せられて、軈て萬事は御慶事後と延期せられぬ。政界は實に活動の境より休息の域に進みしなり。

所謂休息は休息なり。政客の放言高談に、策士の運動も、政海觀測者の觀測談も、談判も、交渉も、示威的懇親會も、景氣附けの演説會も、地方の遊説も、殆んど中止せられて、政界は休息すると共に、亦た殆んど全く沈默したりき。政客は殆んど論議すべき題目を有せざりしを以てなり。

●進歩黨の外交論

進歩黨が一方には、軍備縮少、三税復舊抔と消極主義を呼號しつゝ、他方には支那保全論を主張し、露國の滿洲經營に迄反對するものありて、外交上積極主義を標榜したるは、矛盾の甚しきものとして、識者の笑齒を冷かにしたる所なりき。

近者黨内に於て、此れが矛盾に氣附きたるものあるが如く、黨中の外交通として自ら許す大石正巳氏の如きは、同黨の主義政策の一貫を圖るが爲めに、今後は日露協商に力を注ぎ、露國をして滿洲經營に、日本をして朝鮮經營に、各其の自由の手腕を揮ふとし、以て我が國の軍備を縮小すべしとの提議を、同黨外交調査部に出したりと傳へらる。

平和の擔保は軍備の擴張にありとは、何人も知る所なるに非らずや。協商を爲して、軍備を縮少せんといふ、是れ畢竟するに、協商其の物を一片の反古化せしめんとするものに非らずや。此の如きは書生の空論としては或は可ならん。苟くも大政黨の名士の外交論としては、殆んど識者の一顧にだも値せざらんとす。

進歩黨が政策の一貫を圖ちんとするはよし。而かも彼等か偏ほ減租論、軍備縮少論に固著して、世界の大勢に逆抗し、飽く迄も消極主義を唱道せんと欲するは、嘆惜の至りなり。

◉進歩黨の討論會

進歩黨が政務調査に主力を傾け、黨員をして政務上の知識を養成せしめんとせしとは、彼等か害ありて益なき、消極論を唱道するに比して、優るや萬々なりしなり。

而して進歩黨の所謂政務調査なるものは、一變して黨員の討論會と化せんとす。或は殖民政策につき、或は對清政策につき、若くは經濟界の救濟法につき、政務調査局員總出となりて、一是一非、甲論乙駁、慶應義塾、專門學校の學生等をして之れを傍聽せしめつゝあり。

斯の如き討論會は、堂々たる一大政黨の本部に於て試むるよりは、寧ろ法律學校の講堂に於て試むるを適當なりとす。堂々たる政黨、幾多の名士、口角泡を飛ばして、政黨の本部に討論會を試むるに至りては、滑稽の至りならずや。忙中閑といふもあり、而かも斯の如きは、閑中の閑なるものに非らずして何ぞや。

◉文官任用令の改正

昨年三月、文官に關する三敕令の公布せらるゝや、自由黨内の一部は、忽ちにして躍鬼運動を開始し、總務委員に迫りて、除外例の請求を山縣内閣に爲さしめしは人の知る所。

除外例は直ちに發布せらるべしと傳へられぬ。而して其の範圍は、各省の次官、局長、警視總監、法制局長官、内閣書記官長、參與官に迄及びしと傳へられぬ。而して自由黨の冀望は各地方長官に迄及ぼすにありと傳へられぬ。

待ち設けたりし所謂除外例は、四月を以て發布せられたり、參與官廢せられて、官房長新設せられぬ。而して除外例の範圍は僅かに官房長と、内閣書記官長とに限

られたりき。獵官派の失望も察知すべきのみ。

●一奇觀

文官任用令の除外例は發布せられたり。除外例の範圍は甚だ狹かりき。

進歩黨は曰く、自由黨は政府に向つて、除外例の請求を爲したりき。而して其の範圍なるものは、甚だ狹隘なるに非らずや、之れ政府か自由黨を踏み付けにせしものに非らざる乎と。

自由黨は曰く、否な、文官任用令の除外例は自由黨の請求の結果として發布せられたるものに非らずと。所謂除外例に對して、自由黨の是非の論を聞かざるは一奇觀なり。

●西郷侯と帝國黨

帝國黨は西郷侯を首領に推戴せんことを懇請し、侯は之れを承諾したりとは、坊間に傳へられたる風說にてありき。而して九日の午後を以て、侯と帝國黨の領袖等と會見し、黨の將來に關し、協議する所あるべしと報ぜられぬ。

而かも會見は、都合といふ名義の下に中止せられたり。而して侯が同黨の首領たることを承諾したりといふとも、訛傳なりとして、打ち消されたり。西侯を擔ぎ立て、黨勢の擴張に資せんとせし、末諶等の落膽思ふべし。

●伊藤侯の九州漫遊

高知選出の代議士等は、四月中旬高知市に開かる可かりし、憲政四國大會に、伊藤侯の臨席を請ひ、伊藤侯は之れを拒絕せり、四國大會は之れか爲めに延期せられぬ。

四國大會に出席を拒絕せし、伊藤侯は毛利公銅像除幕式に臨み、再度の九州漫遊を試みて、熊本福岡等に演說し、非常なる歡迎を崇りぬ。而して歸途各地よりの、歡迎迄謝絕して歸京したり。侯の人氣盛なる察すべく、侯の得意知るべし。

●板垣伯と社會問題

政界は殆んど板垣伯の名を忘れんとするものゝ如く、最も關繫深き自由黨すらも、殆んど板垣伯を忘れんとするの觀なきに非らず。

而して板垣伯自らは、政界より隱遁したりと稱し、今や其の力を風俗改良、貧民問題、勞働問題、監獄改良等の社會問題に注瀉せんとす。伯が斯の如き問題を解釋せんとするは最も喜ぶべきことなりと雖も、自由黨が伯に對するに熱心の度を缺きたるか如き觀あるは、誠に惜むべきの至りなり。

●自由黨と進歩黨

自由黨中の一員の語る所なりとて、傳ふるもの曰く、自由黨が進歩黨に比して遜色あるもの二あり。一は彼れに比して機關新聞を有せざること、一は彼れの尾崎、武富等に比敵する程の雄辨家を有せざること是れなりと。

自由黨の弱點或は此にあらん。

●山侯引退せず伊侯出でず

自由黨の實際的首領と目せらるゝ、星亨氏近者語りて曰く、山縣侯の內閣を組織するや、國務を疏通せんと欲するにありき、彼時を以て今時に比す、一難排し去つて、一難至るといふか如き有樣なれば、侯は決して功成り、名遂げたりとて引退するが如きこと無かるべし。況んや侯にして引退せんと欲するも、適當の後繼者無きをやと。

又た曰く、伊藤侯は今俄かに足を擧ぐることを爲さゞる可し。侯の冀望は政黨を善用せんとするにあると、且つ貴族院に對する準備の未だ全く備はざるによると。

山侯にして引退せず、伊侯にして出でず。然らば自由黨は如何にせんとする乎。星氏は黨員入閣の要求を、最後迄押し通さんとするの意嚮を暗示したり。然りと雖も、自由黨の聯立內閣樹立の要求を、山縣內閣が容るべきや否やは、疑問なり。然り大なる疑問なり。

●自由黨有志者の決議

御慶事の翌日、自由黨の代議士、前代議士等は高輪萬清樓に秘密會を催ふしたり。

秘密會の決議には、現內閣をして速かに新局面を開展せしむべしとの一項もありき。

而して彼等は此の決議を齎らして本部に到り、總務委員會の開會を請求したり。總務委員會は開かれたり。

而して其の要求は總務委員會の容るゝ所となれり。

政界新局面發展の運動は、更らに再び開始せられんと

するなり。

●第三回の交渉會

自由黨總務委員對山縣首相との交渉會は再度首相邸に開かれ、談結局に至らずして、更らに御慶事後に於て開かるべしと決定せられぬ。

第三回の交渉會は二十日頃、若くは其の以後に於て開かるべしと噂す。

知らず交渉會の結果は如何、知らず局面發展運動の成行は如何。

(以上十四日稿)

經濟

經濟時事

◎輸入超過の趨勢は更らに衰ふる所なく、四月中の輸入超過高約二千萬圓にして、一月以降の累計約五千二百万圓。然れども昨年の初冬、將來の景氣を見越して發したる注文品は前月中に大概到着したるもの丶如く、輸出超過の一因たりし棉花の輸入季節も亦た既に經過し。且つ製茶及綿糸の賣行も追々好況を呈せんとする模樣なれば、輸入超過も前月を絶頂として向後漸次減少すべきか。

◎一方に於いて商品の輸入超過あれば、他方に於いて正貨の流出あるは己むを得さることにして、一月以降正貨の流出するもの約二千万圓。然れども商品の輸入超過額に比すれば及はさること約三千万圓。是れ本邦の借に屬するものにして。向後商品の輸出超過によりて之れを償はさる限りは、必らず正貨を以て之れを償はさるべからず。左れば向後商品の輸入超過假令多少減少することあるも、正貨の流出は尙ほ當分止むことなかるべきか。

◎商品の輸入超過右の如く、正貨の輸出超過右の如し。而して例年金融緩和すべき昨今に於いて、資金の需要は格別減少する所なく、動もすれば制限分發行を見んとす。金融の緩和すべき時期に於いて既に斯くの如しとすれば、後半季に於ける資金需要增加の程度も略察することを得べく、之れに對して準備するあらんためには、比較的金融緩漫なる今日に於て金利を引上げ、成るべく資金の需要を節減せさるべからず。是れ日本銀行か今春に入りて以來前後二回(三月十九日 四月十七日)金利を

引上げたる所以。蓋し他日の大なる困厄を免れんためには、目前多少の困難は到底忍はさるべからさるなり。

◎目前多少の困難は到底忍はざるべからず。而かも尙ほ忍ふ能はず、動もすれば怨嗟の聲を發せんとするは常人の免れさる所にして。殊とに自家の所有する株式が逐日下落するを見ては、彼等は殆んど爲す所を知らず、唯政府の救濟によりて其苦患を脫せんと欲するものゝ如く。經濟研究會員によりて其主權を掌握せられ居る東京商業會議所は自ら主動者となり、明後十五日を以て、府下實業團躰の代表者及各銀行會社の代表者を會して、一大評定會を開らかんとす。左れど如何に評定したればとて名案の生ずべくもあらず。唯大勢の自然に回り來るを待つの外あらさるへし。

◎連月輸入超過の結果、倫敦支店に對し正金銀行の借となり居るもの約二千万圓。左れば正金銀行にては倫敦支店の爲替資金を充實するため、從來多少正貨を現送する所ありしも、正貨の現送は當局者の忌む所にして、嚴命已むなく、其後は外國銀行に就いて爲換手形を買入るゝこととなり、而かも其手形は正貨現送よりも尙ほ不利益なる相場を以て買入れつゝありと傳ふ。元來一方に於ては商品の輸入超過を見る以上は、他方に於いて正貨の流出を見るは當然の事にして。假令正金銀行をして正貨現送を避くるため、外國銀行に就いて爲替手形買入れしむるも、其結果は正金銀行によりて現送せらるべき正貨は外國銀行によりて現送せらるゝことなるべく。即ち現送する人こそ異なれ、其分量に至りては少しも異なるべきなり。當局者は何を苦んで斯くの如き策を行はしめつゝあるか。是れ吾人の解する能はさる所。

◎當局者の施設、解する能さるもの之に止まらず。以上陳述する如く正金銀行に於て倫敦支店に於ける爲替資金を充實するため資金を現送するの必要ある以上は若し政府に於て倫敦に於ける資金を回收するの必要あらんか、倫敦に在る資金を正金銀行倫敦支店に貸與し、本店よりして其替金を受取れは可なり。是れ政府及正金銀行をして現送費用を利せしむる一擧兩得の策にして、爲替手形の妙用も亦た茲に在り。而かも當局者は資金を倫敦支店に預け入るゝを欲せず、態々本邦に回送せしめ、既に本邦に着せしもの二百二拾餘萬圓。向後到着すべきものを合すれば約五百萬圓に達すべしと傳ふ。是れ吾人の解する能はさる第二。

教育

●囚人の教育

（一）

言ふまでもなく、監獄教誨の必要なる所以は、囚人をして改過遷善せしむるにありて存するなり、常人を教育することと、尙且つ甚だ難し、少なくとも校舍の設備完からざるべからず、教科書の撰擇よろしからざるべからず、教師その人を得ざるべからざればなり。況や彼等囚人を教誨することをや。又況や改過せしめ遷善せしむることをや。然り實にこれ至難の事、吾人はもとより、普通教育すら尙ほ漸くその緒につきしのみなる、現代の日本國家に、囚人を教誨するために、十分の設備を爲すべしと望むの愚なるを知る。また今日の宗教家に、かゝる重荷の全部を負はしめむとすることの、不可能なるを信ずるなり。然れども、苟くも改過遷善の要を認め、これを教誨せざるべからずとすれば、國家と言はず、宗教家と言はず、また多少これが爲めに力を致すところこれなからざるべからず。現に各宗教家が自ら進みてその教誨の任に當り、國家また出來得る限りこれに便宜を與へつゝあるは、當にそのところなりとす。然れども、吾人は單にこれを以て滿足すること能はざるなり、否吾人が滿足せざるのみならず、五百の囚人に對する一人の教誨師にして、果して能く何等の効果を奏し得べきか、特に教誨師その人の伎倆、甚だ疑ふべきものありて存するをや。忌憚なく言ふを許せ、今日の監獄教誨は、實にその効果甚だ少きなり。教誨師の數少きが爲めに。教誨師の手腕大ならざるが爲めに。看守に教誨感化的の精神缺如せるが爲めに。

（二）

聞く、囚人三百に對する醫師の數は一人なりと。アヽ、形躰に關する疾病の治療を爲す醫にして、旣に三百に對する一なり。然るに精神の疾病を快癒せしめむとする教誨師が、却つて五百に對する一なりとは、豈また矛盾ならずや。形躰上の疾病は、三百人一時にこれに惱むが如きことこれなきも、精神上の疾病に至りては、彼等悉くこれに冒されつゝあるなり。此くの如くむば、囚人百に對して一人の教誨師あるも、未だ以て足れりとするにあらざるなり。されどこれ到底今に行はるべきところの事にあらず、止むなくむば二百五十

の囚人に對して、一人の敎誨師あらしむるを以て可なりとせむ。

（三）

迂愚無能の敎誨師ならば、縱令囚人と同數のものあるも何かせむ。而して現任監獄敎誨師中、少數の人を除きて他は、恐らくはこれ一山百文的駄人足なるにはあらざるなきか。典獄に卑しまれ、看守に誹られ、囚人に侮らるゝもの尠からずといふにあらずや。此くの如くにして、囚人を改過遷善せしめむとす、寧ろ可笑からずや。此の重大の任務を帶べる人の中に於て、かゝる駄人足あるは、その待遇甚だ厚からざるが故に、有爲の人進みてこれに當らむことを欲せざること、蓋しその一因たるべしと雖も、しかも宗敎家が、自己の天職に想到するの明なく、此の高大なる社會的事業の爲めに、大慈悲心を傾倒するを知らざるにも因れるなり。是の故に、一方に於ては、宗敎家をして自己の天職を自覺せしめ、他方に於ては、これが優遇の道を啓き、以て達識高德にして大手腕ある宗敎家が、歡喜勇躍して、此の事の爲めに身心を献ずるに至らしめさるべからざるなり。

（四）

如何に達識高德にして大手腕あるも、たゞ少數の敎誨師のみを以て、多數の囚人を改過遷善せしむること甚だ難し。故に吾人は、上は典獄より下は看守押丁に至るまで、敎誨感化の精神を以て半面となし、直接に間接に、敎誨師を助けて、その効果を奏せしむるの覺悟あらむことを欲するなり。然るに夫の看守の如きは、その學力に於て、その德行に於て、果して能く囚人の敎誨感化の補助を爲すに堪へ得べきか如何。吾人は現今の彼等が位置より觀て、現今の彼等の待遇法に見て、頗る心細からさるを得ず。玆に於て吾人は、苟も敎誨師たらむものは、直接間接に、自己の事業を助けしめむが爲めに、常に看守の敎育をも怠ること能はざるを感ずるなり。彼等看守は、既に監督作業衞生等の事項に關して須要なる知識は、これをその担任看守長及び醫師より、訓授せられつゝありといへば、敎誨師は、自ら囚人を敎誨するの外、更に看守に向ひて敎誨感化上の訓授を爲さゞるべからず。此くにして、司獄官全躰が敎誨感化を施すに於ては、改過遷善の効、恐らくは非常に顯著なるものあらむかな。

●籠城主義と躰格

學生の躰格が、藝人に比して遙に劣等なりとの事は、端なくも敎育家を驚かしめたるが如し。然り、今の學生は實にその身躰脆弱なり、彼等は學校に於ける唯一の躰育機關たる、躰操を厭嫌すること甚だしく、力めてこれを避けむとするが如き狀あるを見る。加之、日本人の通弊として、彼等は概して籠城主義なり、出不精なり、蟄居好なり、散歩嫌なり、下宿屋樓上に枕を友とするにあらずむば、友を訪ひて烟芋を喫り、無駄口を叩きながら日を暮すなり。啻に然るのみならず、間居して不善を爲さゞるもの、蓋し甚だ稀にして、山の秀でたるところに清新の氣を呼吸し、水の明なるところに俗膓を洗はむと欲するが如きもの、絕えてこれあるなきが如くならずや。此くの如くにして身躰の强健を冀ふ、妄もまた甚だしと言はざるべからず。

身躰既に虚弱なり、こゝに宿れる精神、豈活潑なることを得むや。宜なり、今の青年學生の輕佻浮薄にして、堅忍不拔の氣象乏しきや、小成に安じて、大効を樹つるを知らざるや。吾人はこれを救ふの一策として、散歩を主張し、遠足を唱道す。即ちこれによりて、進取の氣象を助長することなきを保せざれはなり。

●學年の始期と終期

小學校も中學校も、共にその學年の終りは三月にして、學年の始は四月なり。高等の學校は、官公私立に論なく、その學年の終りは七月にして、學年の始は九月なり。これを以て、小學校より中學校に入らむものは、過渡の期に於て、多くの時間を空消することこれなきも、若し中學校より高等の學校に入らむとするものにありては、四月より九月に至る滿五ヶ月間の日子を、徒費せざるを得ざるなり。

或は言ふ、此の五ヶ月間に於て入學の準備を爲さざるべからず、入學試驗をも受けざるべからず、從ひて身心に休息を與へざるべからず、これが爲めには五ヶ月の日子、未だ必ずしも多しとせず、何ぞこれを空消徒費といふべけむやと。夫れ或は然らむ、然れども入學の試撿は、中學校の卒業試驗の餘威を驅り、張り詰めし鋭氣の未だ緩まざる間に於て、これを爲すこともとより容易のこと。况や準備の日子多ければ、却つてこゝに油斷を生じ、不測の失敗を招く事多かるをや。又况んや長き日子間に於ては、多くの人の言に誘はれて、當初の目的を變更し、高等商業學校に入るべかり

しものが、第一高等學校に入らむとして、落第の不幸を見るあるをや。

吾人は敢て多くの利害を擧けざるべし。要は小學校及び中學校も、他の高等の學校と等しく、その學年は、これを九月に始めて七月に終へしめむことを、冀ふにあるなり。

●下宿屋を利用せよ

學生を監督し學生の風紀を取締る唯一の法方は、これを完全なる寄宿舍に收容するにあること、吾人既にしばしこれを言へり。殊に東京に於ける學生に於て、その然るを認むるなり。

東京に現在せる公私立中學校、その數實に二十有六、而して完全なる寄宿舍を有せるもの果して幾校ぞ。否寄宿舍らしきものさへ有するもの幾何ありや。彼等は當然寄宿舍を有せざるべからざるものなりと雖も、しかも彼等の多くは、尚未だ校舍の完全なるものを有せざるなり、制規の運動場を有せざるなり、博物の標本、理化の機械さへ充分に整ひ得ざるなり。此くの如きものに向ひて、寄宿舍の設立を望むこと、既に太だ酷なりとす。況やこれに望むに、完全なる寄宿舍の設立を以てするをや。

是れに於て吾人に一策あり、請ふ試みにこれを語らむか。曰はく、下宿屋の利用即ち是れなり。學校は下宿營業者に議りて、その客室の全部を借り受け、自校の生徒を以てこれを塡充し、敢て他の客を下宿せざらしめ、その舍監として監督の任に當るは、これを教職員中事情の許すあるものに委囑し、賄の如きは、頭數の多きと臨時に出入なきことゝを保障として、極めて薄利を以てせむことを、下宿營業者に一任する、また妙ならずや。

今や下宿營業者の日一日に增加すること、青年學生の月一月に多きを加ふること、共に著るしき現象なりとす。然るに物價騰貴を名として、下宿營業者が暴利を貪るに避易し、青年學生中、貸間を寺院及び素人屋に求むるもの多く、遂に下宿營業者をして、素人下宿撲滅の運動に熱中せしむるに至れるなり。然るに前述の方法によて、各學校が下宿屋を利用するに至らむか、獨り青年學生の幸福、その父兄の滿足のみにあらずして、また實に下宿營業者の利益たるなり。

●國定教科書の出版

吾人は、敎科書審査に伴ふ弊害に堪へずして、その編纂を、文部省の事業とせられむことを述べたることありき。而して若しその編纂は、これを文部省に於て爲すべしとせば、これが出版及び販賣の方法は如何、是れ尋いで起り來るべき疑問なりとす。

吾人は恐る、これが出版を民間書肆の手に委ぬるとせば、謂はゆる競爭、謂はゆる運動は、彼等同業者間に起り來らむことを。競爭といひ運動といふ、必ず幾多の醜陋を意味し、幾多の腐敗を伴ふ。吾人は切にこれを悲しむなり。然らばこれを如何すべきか。

吾人はその出版及び賣下は、これを文部省の事業と爲すこと至當なるを見るなり。敎科書の編纂を、文部省に於てすることを可とすると同一の理由によりて。

●高等女學校

高等女學校を卒業したる女子が、果して人の妻となり、人の母となるに足るべき要件を、具備せりや否やは、これを別問題とするも、高等小學を卒業したるのみの女子にして、中流以上の家庭に主婦として、能くその本分を全うし得るもの果して幾人ぞ。しかも女子敎育機關の整備せざること、今日の如くむば、これをも尙止を得ずとして、忍ばざるべからざるのみ。聞け、東京市中二個の高等女學校に入學を志願せるもの、實に四百餘名、而して此の二校が收容したる人員は、たゞ僅に七十名に過ぎざりきといふにあらずや。收容せられざりし彼等三百三十名の可憐なる女子中、他の私立學校に入學せるもの多少これあらむ。されどたゞ機に、茶の湯生花の稽古のみに日を暮すもの、尠からざるべく、また全く無爲に消光しつゝあるものも多からむ。是等の女子、一朝求婚に應じて人の妻となる、吾人頗る不安の念を禁ずる能はざるなり。高等女學校以外、私立女學校の設計ある東京の現狀既に此の如し。これを他地方に觀ば、更らに一層甚しきものあらむなり。

最近の調査に據るに、全國の高等女學校は、公私立を通じて僅かに四十有九なりといふ。嗚呼五十に滿たざる高等女學校を有せる國民よ、女子の普通敎育に關して、少しく自ら覺るところあれ。夫の女子大學の設立に狂奔せる人々よ、卿等が主張の根底を爲すべき、女子普通敎育の現狀に觀て、如何に卿等の主張の突然なるかを知れ。是れ蓋し、國民の子の爲めなり、國民それ自身の爲めなり、大にしては實に國家將來の爲めな

●兩調査會員と其の數

國語調査會といひ、修身敎科書調査會といふ、共にこれ國家重要の事、その委員の任命の如きは、最も公平にして且つ最も多方面ならざるべからず。然るに過般發表せられたる委員の顏觸に接して、吾人は直にその甚だしく官臭を去れることを感ずると共に、又その人員の甚だ少かりしに慊らざりしなり。修身敎科書調査會の委員たりしものは、何故に國語調査會の委員たる能はざるか。また宗敎と敎育との關係に於て、文部省と宗敎家との間、しば／＼意見の衝突を見て、天下未だその歸するところを知るに苦しめるものあるとき、佛耶兩敎の徒を擧げて、滿腔の大抱負を吐かしむるは、何故に不可能なるか。

吾人は此委員の任命囑託に關して、極めて公平なる態度を取りし文部省の雅量を多とし、委員の數の尠きが爲めに、多方面の意見を聽く能はざるを遺憾とす。冀は當局の人、反省一番して、更に數人の增員を敢てせよ。



社會

●改良と空論

改良改良又改良、宴會の改良といひ、風俗の改良といひ、國字の改良といふ。何ぞ夫れ改良せらるべきもの多くして、改良の必要を唱ふるもの夥しきや、しかも果して能く改良せられたるもの幾何ありや。

改良は、實行にありて空論にあらず。實行の伴はざる言論、これを空論といふ。立言如何に高大なるも、所說如何に深奧なるも、採りてこれを實行に資する能はずむば則ち是れ空論、社會文化の上にこれを見て、釐毫の價値もこれあらざるなり。改良せられざるべからざるもの多く、改良の必要を唱ふるもの夥しく、而して能く改良の實を擧げたるもの尠しとすれば、喧々囂々の議、畢竟是れ空論たらざるなきを得るか。

能く時弊を觀破し、能く社會の情狀を知悉し、極めて簡單容易にして且つ適切なる方法を具し、以て舊習の改良を敎ふるも、人のこれを敢行する勇氣なくむば、是れ亦遂に空論たるに了らむのみ。然らば今の如く改良を要すべきもの多く、今の如く改良の必要を唱ふるもの夥しきにも拘らず、一のこれが實行を爲したるも

のこれあるを聞かざるは、今人善を爲すの勇氣乏しきによるか。嗚呼、甲か、乙か。吾人は夫の宴會改良にの事關して、這般の疑團を解く所以を知らざるなり。

●宴會改良（三たび）

今日の宴會に伴へる弊害の多きこと、世人は等しくこれを承認し、且つ自らそれに堪へずとなせるところ、而して新聞に雜誌に、これが改良の方案の公にせられたるもの、また甚だ多しとす。然れども一たびその實行如何と顧みれば、一個半個の反響だにこれなきは、寧ろ驚くべからずや。是れ蓋し、因襲の久しき、俄にこれを變改すること能はざるが如き事情あるにも由るべく、その改良法案が、實際に適切ならざるにも基すべしと雖も、世人が改良を敢行する勇氣に乏しきこと、その大原因たるべきなり。

吾人は、總ての會合に、酒なからむことを望むものなり。藝妓あらざらむことを冀ふものなり。言ふまでもなく、酒と藝妓とが、會合を腐敗せしめ會合を墮落せしむること、猶個人が此の爲めに腐敗し墮落するが如きなり。されど吾人は眞にこれを今日の宴會に施さむことの、聊か無慈悲なるを知らざるにあらず。

是を以て單に藝妓を斥けて、これをして絕えて杯盤の間を周旋せしむることなからしめ、酒は量を限りて豫めその瓶を膳に添へ、飲まむと欲するもの自ら酌みて敢てまた他を煩さず、繁縟なる獻酬の陋習を破りて、代ふるに簡潔なる捧盞の美風を以てし、酒と食とはこれを同時に取り、且つ飲み且つ食ひてまたその終を同時ならしめ、此くの如くにして宴會の神聖(?)は保たれ、亂に至らずして了るを得むなり。

若しそれ食膳の間に給仕するものゝ如きは、童男可なり、童女可なり。而して藝妓なく三味線なく、歌なく踊なきが爲めに、多少の寂寞を感ずるあらば、食後別席に於て、落語狂言等の餘興を催さしむるを妨げざるなり。

要するに、在來の宴會が、亂雜不整、百弊續出する所以のものは、酒に重きを置きて食を顧みず、藝妓によりて飲食と餘興とを同時に取らむとせるに存するや疑なし。是の故に、如上吾人の所見をして實際に施行するに於ては、冀くは彼の百弊を芟除すること甚だ容易ならむか。是れ啻に吾人の私見なるのみならず、實に天下具眼の士の公論なりとす。世人請ふ、義に勇にして行に敏なれ。

●花牌トランプの課税

悲しむべきことなりと雖も、經濟的制裁力の强大にして、優に他の制裁力を壓倒しつゝあるは事實なり。嗚呼、止むなくむばたゞそれ此の强大の力を有せる經濟的制裁を利用して、以て今の社會の溷濁と醜穢とを救はむは如何に。

凡そ社會をして溷濁ならしめ醜穢ならしむるもの、二三にして足らず。娼妓然り、藝妓然り、酒然り、烟草然り、賭博の如き、もとより敢て言ふを竢たざるなり。然るに今の謂はゆる紳士紳商たるもの、賭博の方法を解せざるを以て無上の耻辱となし、賭博を爲さゞるものを見ては、共に齒せざるなり。啻に然るのみならず、皇室の藩屛を以て人も許し自も任ぜる華族の家庭に於ても、國民を代表して大政を議する國會議員も、物堅き老舗の番頭手代小僧の如きも、將來社會の一員として大に爲すあらざるべからざる靑年學生も、……嗚呼、此の賭博の悪風は、滔々漲天の勢を以て、社會の有らゆる階級を浸しつゝあるにあらずや。此くの如くにして社會の大墮落となり、大腐敗となり、人は遂に人として世に生存すること能はざるに至るなり。

社會の濁溷もこれが爲にして、社會の醜穢もこれが爲なりとすれば、社會をして淸淨ならしめ健全ならしめむ爲めには、是等の誘惑物を剿絶せざるべからず。然りと雖も、一旦にしてこれを剿絶せむとするが如きは、もとより能ふべからざるの事、乃ちこれが勦絶の目的を以て、これに課するに峻酷なるまでの重税を以てし、多くの需用者をしてその價の貴きに避易せしめ、多くの供給者をしてその利益の少きに堪へざらしめ、依りて以て業を正道に轉ぜしむべきなり。勿論巨万の富を有して、是等醜穢の所行を敢てせむとするが如き痴漢は、その價の高下を問ふが如きことこれなかるべし。されどこれ極めて少數、少數なるこれ等需用者の爲めには、重税を納付して前業を繼續する少數の供給者あること、また實に止むを得ざるなり。

吾人は今こゝに、特に重税を課するの必要あるものとして、花牌トランプの類を擧げむとす。これ等は、敎育的玩具として用ゐらるべき性質のものにあらず、否これ等は、既に娯樂的玩具としてだに用ゐらるゝこと太だ少きに至れり。これ等が盛に製造せられ夥しく購買せらるゝは、悉くこれ賭博の用に供せらるゝものと言ふを得るなり。重税を課して購買者を減少せしめ、

製造人をして他の業に轉せしめ、遂に全くこれを勸絕せずして豈可なむや。

宗敎の制裁、光り薄く、道德の制裁、力弱し。而して社會の溷濁は月にます〳〵溷濁に、社會の醜穢は日にます〳〵醜穢なり。此の時に當り、經濟的制裁を利用して、以て宗敎道德の制裁力を助くるは、蓋し徒事ならざるべきなり。

●社交俱樂部

開化の德澤普く波及し、文明の利器漸く整備し、交通の便いよ〳〵開け、交際の道ます〳〵進み、東京に在留するものは、身尙一介の書生、下宿屋樓上、燒芋を喫ッて氣焰万丈なるものと雖も、往來頻繁、時に或は應接に遑あらざること少しとせず。是を以て勸勉なる學生中、或は詐りて不在と稱して來客を謝絕するものあり。或は豫め迎賓面會の期日を定めて、期日以外の來訪を謝絕するものあり。學生にして尙且つ此くの如し、況や多少の地位あるもの名望あるものに於てをや。要事多端、眞に目の廻る程の忙しき時、何等の用談もなく、たゞブラリと來遊せられ、悠々寬々落つき拂ッて趣味なき世間話を聞さるゝ程、苦しきものはこれあらざるなり。かゝる場合に當りて、その來訪を謝絕せむには、果して如何なる方法を以てか適當とする。吾人の觀るところを以てすれば、夫の詐りて不在と稱するが如きは、眞に止むを得ざるに出でたる最後の窮策なりとは言へ、甚た卑怯の振舞にして、苟も男兒の爲すべきところにあらず。即ち豫め迎賓面會の期日を定めて、汎くこれを告知し、若し面會日以外に來訪するものあらば、事の緊急を要するものを除きて、他は當然これを謝絕するを以て最も適當なりと信ずるなり。

然れども、またこれ多少の缺點これなきこと能はず。何をか缺點といふ、曰はく、若し人各々迎賓面會の日を定めむか、用事(普通に謂ゆる)なくして人を訪問すること能はざるに至らむ。又訪問者多きが故に、用事了らば直に歸るべく覺悟せざるべからざること即ち是れなり。然らば何を以てか、斷金の友、水魚の交、相寄りて以てその美しくその温なる感情を滿足せしむることを得む。たゞ無趣味殺風景なるのみにして、交情の濃なること遂に望むべからざるに至らむ。況や相會して放言高論し、閑話雜談する間に於て、知らず識らず、互に相發明するところ尠しとせざるに於てをや。

吾人は、世人が各々迎賓面會の日を定め、面會日以外

に人を訪問するなからむことを冀ふものなり。然れども如上の缺點これあるが爲めに、今にして直にこれが實行を欲せざるなり。即ち能く如上の缺點を補塡するを得るに至るを待たむと欲するもの。謂はゆる缺點を補塡するの方法如何、曰はく、簡便なる社交倶樂部の設立即ち是れなり。一方に於ては社交倶樂部の設け備り、隨時こゝに出入して身心に慰籍を與へらるゝを得ば、他方に面會期日の嚴として犯すべからざるものあるも、却つて是れ眞に社交の一進歩として、また眞にその一大光華として歡び迎ふべきものならずや。

●人の批評（忠告と誹毀）

人の相集りて語るところ、滔々として日を銜いて出で、滾々として流れて盡くることなきものは、それ人の批評か。人と相語りて飽くことを知らず、興に乘じて膝の進むを覺えしめざるものは、またそれ人の批評か。人の批評、強ちにこれを排拒すべきにあらずと雖も、吾人は、現今世人が好みて爲すが如き人の批評を悦ばざるなり。彼等は、人の短を揚げて人の長を揚げず、人の惡を摘發して人人の善を容認せず、猥りに罵倒して敢て賞贊せざればなり。

等しくこれ短を擧ぐるなり、惡を摘發するなり、罵倒するなり。されど直にその人と相對してこれを語り、その反省を促さむとすれば、則ち忠告となり、その人あらざるとき、これを他人に語れば、則ち誹毀となる。惟ふに、人にして弱點なきものはこれあらざるべく、短所なきものもまたこれあらざるべし。若し益友のこれを指示するものあらば、誰か歡喜してこの忠言を容るゝに吝ならむや。然れども事こゝに出でず、他人に對してその缺點その短所を吹聽せられむか、誰かその無情を恨まざらむや。蓋し短を擧げ惡を摘發し猥りに罵倒すること、不可はもとより不可なりと雖も、しかも時としてまた可なることこれなきにしもあらず。即ちその可否のよりて岐るゝ所以は、これが運用の方法と、その場合とに存するあるなり。

邦人由來話下手なり。相對して數分、談泉忽ち涸渇してまた如何ともすべからず。乃ち人の好むこゝろに阿り、己の欲するところに乘して、人の批評を爲す。人を罵り、人を誹り、人を嘲り、人を笑ひ、甚しきに至りては、人を傷け、人を陷れて、以て一塲の快を買はむとす。嗚呼、此くの如きは眞に沙汰の限りにして、惡德の最も大なるものにあらずや。然れども、夫のしば〳〵忠告

を重ぬるも、その非行を悛めざるもの、及び單に一個人に對して爲すこと能はざるが如き場合の忠告を、或は新聞に、或は雜誌に、或は演説によりてこれを社會に訴へ、以て社會の制裁を請ふことの可否の如きは、自ら是れ別個の問題にして、此の文の所要にあらざるなり。

●美術館の位置

立皇太子妃祝賀紀念美術館の位置如何。博物館、動物園、圖書館等を有せる上野公園は、權衡上此の美術館を他公園に讓るを至當とす。而して淺草公園の俗なる、世人恐らくはこゝに美術館を建設するに忍びざるべく。九段坂上、また適當の地所なきを如何せむ。然らば則ちこれが建設地は、芝公園にあらずむば、日比谷公園未來のたらざるべからず。吾人は芝公園の地が、餘りに一方に偏せるを妙とせず。況や將來中央公園として、大々的光華あらしめざるべからざる日比谷公園が、未だこれに適へる建築物を有せざるに於てをや。即ち吾人は、日比谷公園を以て、美術館建設の最良地と爲す。或は曰ふ、日比谷の地、地質輕鬆、能く大厦の建設に堪ふべからざらむと。或は相當の用意これあるに於ては、地質の輕鬆、敢て憂ふるに足らざるなりと。吾人は、寧ろ後の言に與せむなり。

●爵と遊民

國家に偉勳大効あるもの、これを賞するに爵位を以てす、もとより當然のこと、吾人は、此くの如き人の多く輩出せむことを希望するものなり。然れども、父祖の効によりて、その子孫が、永遠に此の恩賞を恣にすることを冀はず。彼等は、決して父祖の勳効を想ふものにあらず、國家の殊遇を感ずるものにあらず。たゞ世襲の財産あるを恃みて優遊逸樂し、常に社會腐敗の先駈を爲すものなり。即ち爵の世襲は、人の子を愚ならしめ、遊民を多からしめ、社會を腐敗せしむる所以にして、國家の爲めに慶すべきことにあらざるなり。爵位勳章の授與は、これ　天皇の大權、何ぞ敢て臣下の容喙を許さむや。たゞ吾人は、常に華族の隨落に憤慨するもの、今や新に授爵の光榮を擔ひたるもの幾數十人、感ずるところ殊に深からざるを得ざるなり。

太平危言

月嶺生

○青木外相に告ぐ　由來外相程社會より攻擊せらるゝものなしと雖も現在外相青木子に至ては更に其の極端にして吾人は未だ曾て此の如く攻擊せらるゝ外相を見ざるなり新聞紙及び雜誌の多數は公然嘲刺、罵詈、誹謗の言を作し或者は辭職を勸告し新紙及び雜誌上殆ど無能外相の文字を見ざるなく無能とは青木子の代名詞なるかの如くに感ぜらるゝなり想ふに此の如きは我堂々たる外相に對するの所以に非るべし蓋し日清戰役の當時、子は公使として獨逸に駐在中なりしに拘らず彼の三國干涉の來るを豫知する能はざりしより漸く無能の聲を胚胎し始め現内閣に外相となりて以來清國問題或は對露國問題等、陸續として起りしも之が施設方針に至ては杳として知るに由なく否常に退嬰防守の窮策手段を取りしを以て無能の聲愈々高まるに至りしなり

社會の褒貶は素より深く介意するに足らずと雖も衆口は時に金を爍し積羽遂に舟を沈む故に子が此の際一擧手、一投足の勞を以て衆痴の疑を解く亦可ならずや

子も一個の人材なれば必ず何か重大なる事件を目論見つゝあるに相違なかるべきも不幸にして吾人は未だ其の結果を見る能はざるは大に遺憾とする處なり

然るに今や東洋の風雲暗澹として轉た急を告げ危機朝夕を計るべからずして子が快手腕の來るを待ちつゝあるなり而して子が背後には强大なる陸海軍の藩屛あり加之過般西海に於て擧行されたる海軍大演習及び神戸に於ける觀艦式は外交上に偉大の勢援を與へしや疑なし故に此の際、子たるもの驚天動地の快擧壯圖をなし以て列强をして拱手屛息せしめ將た又子を無能と冷罵つゝある批評家の口を緘默せしめては如何敢て告ぐ

○何故に獨り武官を厚遇するや　文官と云ひ武官と云ひ共に之れ國家の官吏なり其用に於て高下、尊卑あるべからず即ち其の待遇は彼此の間均等なるべし決して不等あるべからず然るに武官の待遇文官に比して厚遇なる且つ其の昇進に於ても速なるは何故ぞや

今試に兩者の前生修業の來歷を見よ、尋常中學卒業の學力あるものは直に士官學校生となるを得、而して其の糧餉及び其の他一切の經費は凡て國家の賄ふ處なり故に彼は尋中の課程を履修するために私財を費したるの外一金を投ぜずして直に候補生となるを得るものにして其の間費す處の日月僅に二年にして即ち陸軍少尉となるを得るなり之を彼の尋常中學卒業後高等學校に入り同校に三年を費し更に大學に入りて三年若くは四年を費し又大學以外の諸高等專門學校に入り四年若くは五年の長日月を費して始て人となる迄常に其の私財を投けつゝあるものに比すれば學問の深淺、業の難易、勞の多寡實に雲泥の差ありと云ふべし

故に道理上より言はゞ文官の待遇こそ武官より厚かるべきこと至當なるに事實は之に反し各高等專門學校出身者は大概判任籍より身を立つるを常とし偶々最初より奏任籍に列するものあるも、そは極少數にて且つ其の所得は少尉給と伯仲の間にあり少尉は最初より奏任籍に列し加ふるに位記あり勳章あり又其の陞進に至ても文官に比し遙に速かなり

以上說く所の如し吾人は何故に武官のみに厚くして文官に薄きかを了解に苦むなり

○御臨校を望む　陸軍省所轄各學校の卒業式には必ず陛下の御臨校あり然るに文部省直轄學校の卒業式には之なし只昨年始て帝國大學卒業式に御臨幸ありてのみ吾人は向後文部直轄各學校の卒業式にも陸軍同樣に必ず御臨校を仰ぎ奉らんことを望むや切なり

○士官學校生徒の不成績　士官學校生徒の成績歲を追ふて不成績に赴きつゝあるは最早蔽ふべからざる事實なり之には素より種々の源因あるならんも先づ第一の源因とも稱すべきものは下に說く處の如くなるべし

社會の日に月に進步して學問旺盛となるに從ひ人々皆學者的のものにならんとし軍人の如き淺學のものを志願するもの寥々たるに至るは數の免れざる處なり故に尋中の生徒中少しく氣のきゝしもの或は家財の豊富なるものは皆文官的學校を志望し各學校の失敗者、貧困者或はお坊チヤンの從五位樣等が軍人を志望するを以て其の成績の不良なるは少しも怪しむに足らず、否らず寧ろ當然なり故に今の青年士官を見よ一人として、ろく、なものなく實に不人物の揃ひなり第一學問なく思想卑近に仕末に終へぬなり而して又其の入學試驗の非常に容易なるに、搗てゝ加へて採點法非常に寬なり

今や軍備は擴張せられ有爲の將校必要なる場合に其の源泉たる同校か此の如しとは實に慨嘆に堪へざるなり當局者之が改善策を講ぜずして可ならんや

○噫學生の不幸　防禦嚴重なる城砦を攻擊せんか之に突入する兵士は大苦戰をなし重傷を蒙らざるべからず近時學生の多病なる或は自害するもの多き之に例ふべし、何ぞや文部省が前後の思慮なく、無定見の極、徒らに中學校を增設し其の以上の高等諸學校の增設をなさゞるを以て中學卒業生の各高等諸學校の門前に充溢すること歲を追ふに從て愈々甚し而して各學校は特更に其の壘壁を高くして容易に之を入れしめず從て勢ひ學生は過度の勞力を費さゞるべからざるを以て其の心身疲勞して多病となり爲めに中途にして廢學するの已むを得ざるに至り殊に甚しきは煩悶の餘、自殺をなすもの頻々たるは吾人の屢々見聞する處にして實に痛嘆に堪へざるなり『天下の學生を過るものは文部省なり將た又之を殺すものも文部省なり』との叫聲起る誠に偶然に非るなり當局者夫れ一顧せずして可ならんや

○鐵道と郵便　近來官設鐵道の不整頓、係員の乘客に對して往々不都合の所爲ある又、郵便物の不着或は延着等のことあるは屢々見聞する處なり吾人は切に遞信省の注意を望む

○時間を勵行せよ　我國從來の因襲として時間を勵行せざるの惡習あり例へば午后三時に開會すと云ふ宴會は三時半乃至四時に至て漸く開會し二時の出棺は三時となり正午十二時出帆の廣告ある汽船は午后一時乃至二時に至て漸く出帆するが如き少くとも半時間乃至一、二時間の懸値あり從て行くものも豫定の時刻よりは殊更に後れて赴くなり故に偶々時間を勵行する人ありて其の豫定の時間通りに宴會等に臨むも他の出席者來らざるを其の間非常に手持無沙汰を感ずるなり今や已に內地雜居も實施されたる今日なれば吾人は一日も早く此の弊習を離脫せんことを國民に望むものなり

文學

●『手向の笛』を讀む

『手向の笛』は宙外氏の『新小說』に揭げたる短篇なり。

落魄せる一遊子、故舊を尋ねて岩手縣下一の關に到らんとし、途に磐城陸前の國境なる越河山麓に宿る。家に女あり、芳紀十六七、手束の髮亂れて素肌に着たる

袖無羽織いと鄙びたれど、容色は此山中に相應からぬ嫖致好し。懇に遊子を待ちて風呂場に伴ひ、四方雑談の後、遊子の一の關に赴くといふを聞いて、途上宮城縣長沼を通過せざるやを問ふ、遊子すなはち通過すべきを答へて、その故を究めんとす、いまた究めず、少女墻根に咲ける山吹の花一枝を手折り、姉樣に捧げんといひて去る。此夕月色明にして山中寂なり。遊子前途を想うて眠る能はず、角柱の枕に頭痛みて心幾度か悶ゆ。忽ちにして屋後尺八の響起る。

耳を澄して聞くに、長く引きて嘆くが如き聲には、故郷の景色吹き起され、緩く顫ひて泣くが如き音には亡父母の事搖起され、獨汗臭き寐具の襟を濡して樣々の物思に徒に情を惱す。

怪むべし、此時少女徐に身を起して戶外に忍び出づ。遊子好奇の心動きて禁ずる能はず、竊に後を逐うてその擧動をうかゞふ。既にして尺八の音絶え、少女踵をかへして古井の側に至り、底を仰下して、

姉さま、悔しいと思はつしやうが、老婆樣のこんだから、堪辨さつしやりやせよ、お前のやうになると負へねんだから、私等も此所にやァ長く居ねえだ。明日にも押走つて叔父樣所へも往く氣だよ

と嗚咽して生人に語るが如し。遊子光景の奇なるに驚き、歸つて床に横はる。尺八ふたゝび吹き起りて哀れ夜と共に深し。翌朝家人に辭して越河峠を越ゆ。歩を

［笠澤春風杜若香］　放翁



［古道の杜若訪ふ日ぞ長き］　白雄

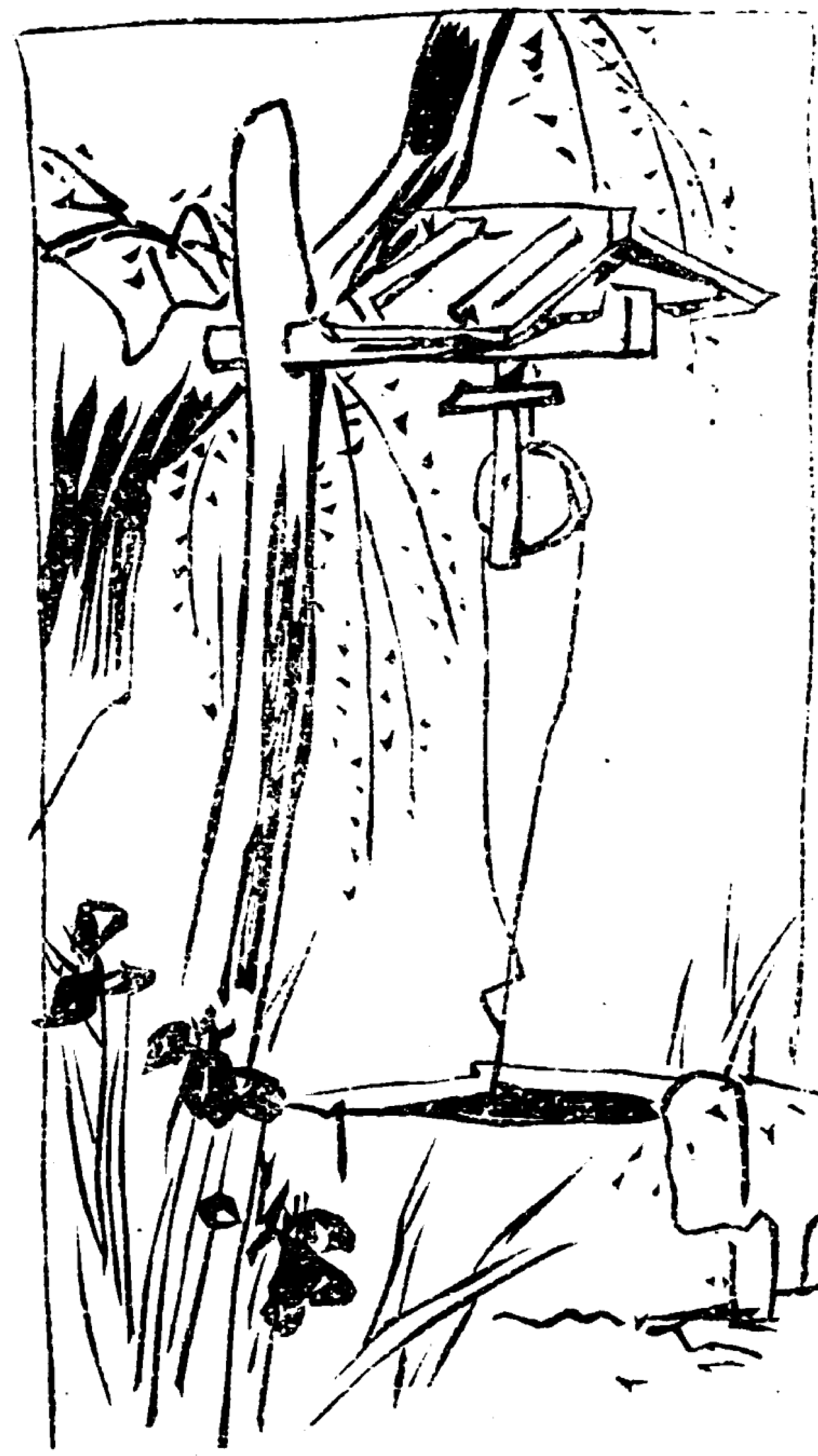
とゞめて眺望すれば、馬の背を見る如く突出でたる麓の松山を繞りて曲れる湖水、我が足下の斷崖に靡く枝に絡める、紫陽花

に似たる葛の花の亂るゝ邊に白く又蒼くきらめき、阿武隈川は白金の帶を曳けるが如く、綠陰多き里をすべりて、赤禿目に立つ丘陵を縫ひ林を絡みて、蜿蜒り流るゝ末は、夏霞十里の空を横にかすめて靑し。

忽ち後に跫音あり、顧みれば、前宵の少女なり。切に請うて同行せんことを求む。遊子固く辭して獨り行かしむ。後五年、遊子身を立てゝ一の關銀行員となり、事によりて千葉縣下登戸に到る。旅亭酒を呼んで微醉を買ひ、厠に赴かんとして端なくも洗髮の佳人に相遭ふ。佳人熟視すること多時、遂に入りて室に隱る。その擧動を訝りこれを婢に問ふ、婢知らず。既にして醉發して華胥の境に入る。海風扇を吹いて浴衣冷かなり、夢覺めて枕頭を顧れば葭簀戸越に此方を窺ふものあり。眸を凝らして諦視すれば、圖らざりき、越河山麓の少女なり。すなはちその奇遇に驚き、就て近况を問へば、少女羞恥して、委々その來歷を語る。妾年十二三、雙親を失ひ、姉と共に祖母に養はる、祖母性强慾、姉に逼りて遊女たらしめんとす、姉、情郎あり、絕つに忍びず、一夜古井に投じて死す。こゝに於て、祖母また少女に逼りて遊女たらしむ。少女これを厭うて竊に家を遁れ、遊子の扶助を得て長沼に赴かんとし、途捕る所となりて、遂に白石の娼妓となる。後神奈川に轉じ、二月以前、仝縣の吏某に落藉せられてこの所に居ると、更に當夜の奇行を問へば、佳人面を赧うして、姉の情郎某、甚だ尺八に巧にして、姉またこれを聞くを好む。投身の後、某、想うて措かず、夜々來つてこれを手向く、彼の哀れな音を聞くに附け、その吹手の心の底は無かしと察しやれば、中々睡られる空はなく、遂跳起きて戶外に出でたりと、二年の後、妻子を携へて日光に詣づ。滊車白石を過ぐるの時、七年以前の落魄時を追懷して今昔の感涌くが如し。すなはち窓によりて越河山下を望めば、嬰兒を抱いて椽頭に佇むものあり。顏は二年以前登戶の佳人の如く、衣は七年以前山中の少女に似たり。頭を回らして更に見んと欲せば、滊車茂林に入りて遂に見ること能はず。

人は運命の繼子なり。人に生をうくるもの、誰か運命のために翻弄せられざるものある。越河山下の少女、運命の翻弄するなくんば、無垢なる可憐兒として、悠々一世を終ふべきものにてありき。しかも、殘忍なる女神は、少女をしてかくの如くならしむるを欲せず、一

たび祖母によりてその心を苦ましめ、次てまた人をして、遂にこれを憂苦の淵に投ぜしむ、宙外氏、これに配するに落魄せる一遊子を以てし、薄命の少女と失意の年少と、兩々相對せしめて、矛盾せる人生の運命を描



く。年少落魄せるの時、少女は村娘として戀に情を盡したるもの、しかも、年少身を立てゝ地位を得るの時、少女墜落し了して淺ましき人の姿となる。人生と境遇と、境遇と運命と、無情なる世態を寫し出して、讀む者をして、覺えず襟を霑さしむ。その裏背戸に尺八を聞くの一段、やゝローマンチックに流るゝの嫌あるも、月色と卯の花と、四邊の風物を點綴して、悲憺場裡、さらに一味の情趣を加ふ。『手向の笛』一篇、實に近時の傑作也。柳浪氏やうやく老いて鏡花氏邪路に馳せ、所謂新進作家の氣焔昂らざるの日、宙外氏のひとり、舊に依りて健在なるは、はなはだ賀すべし。

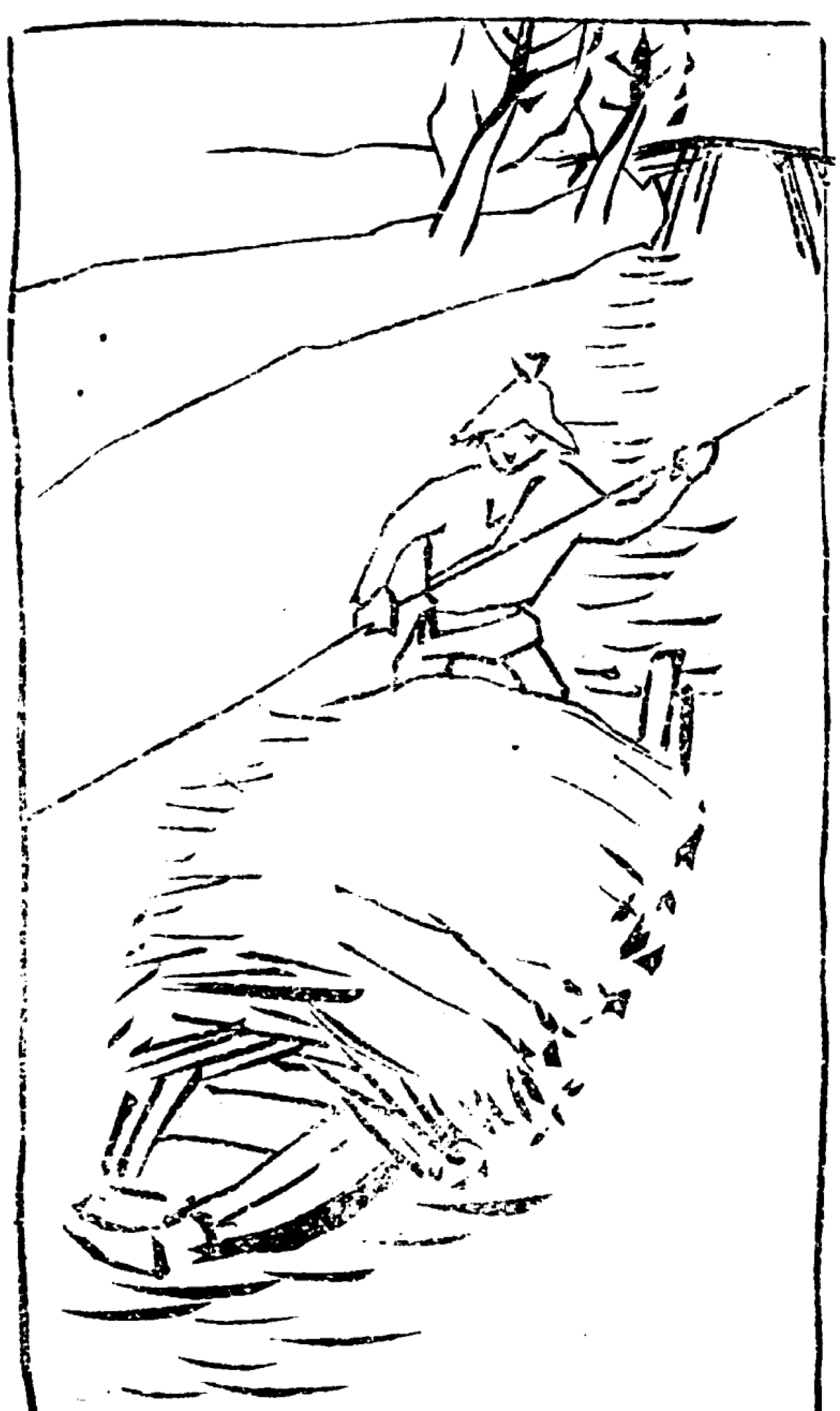
●新聞讀者の變遷

我國新聞紙の創刊以來、今日にいたるまで、三たび讀者の變遷せるを見る。第一期、創始時代にありては、維新草創の際、時事―少なくとも時事的文字を解するもの、官吏、學校敎師若くは政黨者流すなはち所謂上流社會なりしを以て、その行はるゝところ、隨つてこの間に限られ、その記事は高尙にして、その文章はた漢文句調の硬堅なるものなりき。第二期に及んでは、政黨熱及び實業熱の勃興とゝもにその讀者やうやく降りて中流社會に移り、下級官吏、小學敎員より商賈等の間に行はるゝに至りぬ。この時代にありては、反對黨もしくは政府の攻擊、建言、意見書類の記事大に喜ばれ、その文章、亂雜にして辭調はなはだ殺伐なりき。第三期すなはち今日に於ては、さらに降りて下流社會に移り、小商賈、少年學生、供待の車夫馬丁より靑樓の賤婦等これを手にせるを見る。こゝに於て、その記

事は、人殺し、心中等、猥褻野卑なるものを以てし、記者またこの方面に力を盡すにいたり、嘗て大新聞として高く標置したるものすら、また品位を墜して所謂三面雑報を添ふに至る。如上の變遷は、新聞紙の進歩自然の趨勢として、必ず一たび經過せざるべからざるもの、今日に於て、既にその達するところにいたりて極まれるものたり。今より後、新聞紙は、何れかに向つて、必ず一轉化せざるべからず。この轉化の何れにあるかを觀取して、その氣運に乘ずるもの、すなはち將來に於て覇を唱ふるを得んか。

●惡好奇心の增長

現今の新聞紙中、最も發賣高多しと稱せらるゝものは、萬朝報、報知及び二六なり。而して、これら新聞の記事を檢するに、いづれも人殺し、心中、强盗等、晦婬頽俗の事實を誇張し擴大して、大げうに書きたてたるにあらざるはなし、中にも報知の如きは、その所謂探偵部とやらんを設けて巧に內秘を剔抉し、苟も事のその人に關する時は、すなはち忌憚なくその弱點過失を暴露して剩す所なし。けだし、これらの新聞紙は、社會の意向を察るに敏にして、今日の氣運に乘じたるもの、營利の方面より見れば、もとより成功したといふを得べし。しかれども、これを社會道德の方面より見れば如何、これらの新聞紙が社會に與ふる所の害は、それ幾何ぞ。かく言はゞ、これら新聞の記者は必ずいはん、これ新聞紙の罪にあらず、これらの記事を勸迎す



る社會の罪のみと、しかり、これを勸迎するはもとより社會の罪なり、しかれども、かれらは、これを口實として、冥々裡に社會の惡好奇心を增長せしめつゝあるにあらざるか。易にいはく、再三すれば瀆ると、惡といへども、慣るれば、すなはち異まざるにいたるは人の情なり。毎朝これらの新聞紙に親むもの、遂に慣

れて異まざるに至らざるを得べきか。嘗て五寸釘寅吉の劇を見たるものは、寅吉たらんことを欲して、遂に强盜殺人罪を行へり。醜悪なる三面記事に親むもの、豈遂に三面記事の材料たらざるなきを得んや。

●慨すべし、新聞紙

最も賣口よき新聞は、最も社會の悪好奇心を皷吹する新聞なり。これらの新聞は、その發賣數の多きだけそれだけ世を毒することまた多し。今や士風萎靡して風俗頽廢せるの時、社會の木鐸を以て任ずるもの、これを矯正せんとして、却つてその弊風を増長せしむ。慨すべき哉。

●論議の好時機

新聞紙の三面記事に關する議論は、嘗て一部論者の間に行はれたることありき。しかも、現時論客の弊として、その初めははなはだ熱心に討究したるも、半にして、自ら倦厭して、遂に到り極る所を究めずして已みたり。三面記事の利害は、もつとも熱心に、もつとも眞率に研究して、その弊風を杜絶せしむべきもの、論者が中途にしてこれを廢したるは甚だ憾むべきなり。

今や候やうやく暑にむかうて人の脳を攪し、殺人、情死等の事件、日々累出して、腥風紙面に滿たんとす。三面記事の利害を究むるは、すなはちこの時、論者すべからく奮つて、ふたゝびこれを論議すべし。言ふことなかれ、これ曩に一たび議して、既に陳腐に屬すと。公益のために盡すもの、何ぞ新と陳とを問ふの暇あらんや。見よ、臺灣の土匪は、その初め、掃蕩し盡さゝりしがために、屢々出でゝ帝國の良民を害するにあらずや。

●探訪者の悪手段

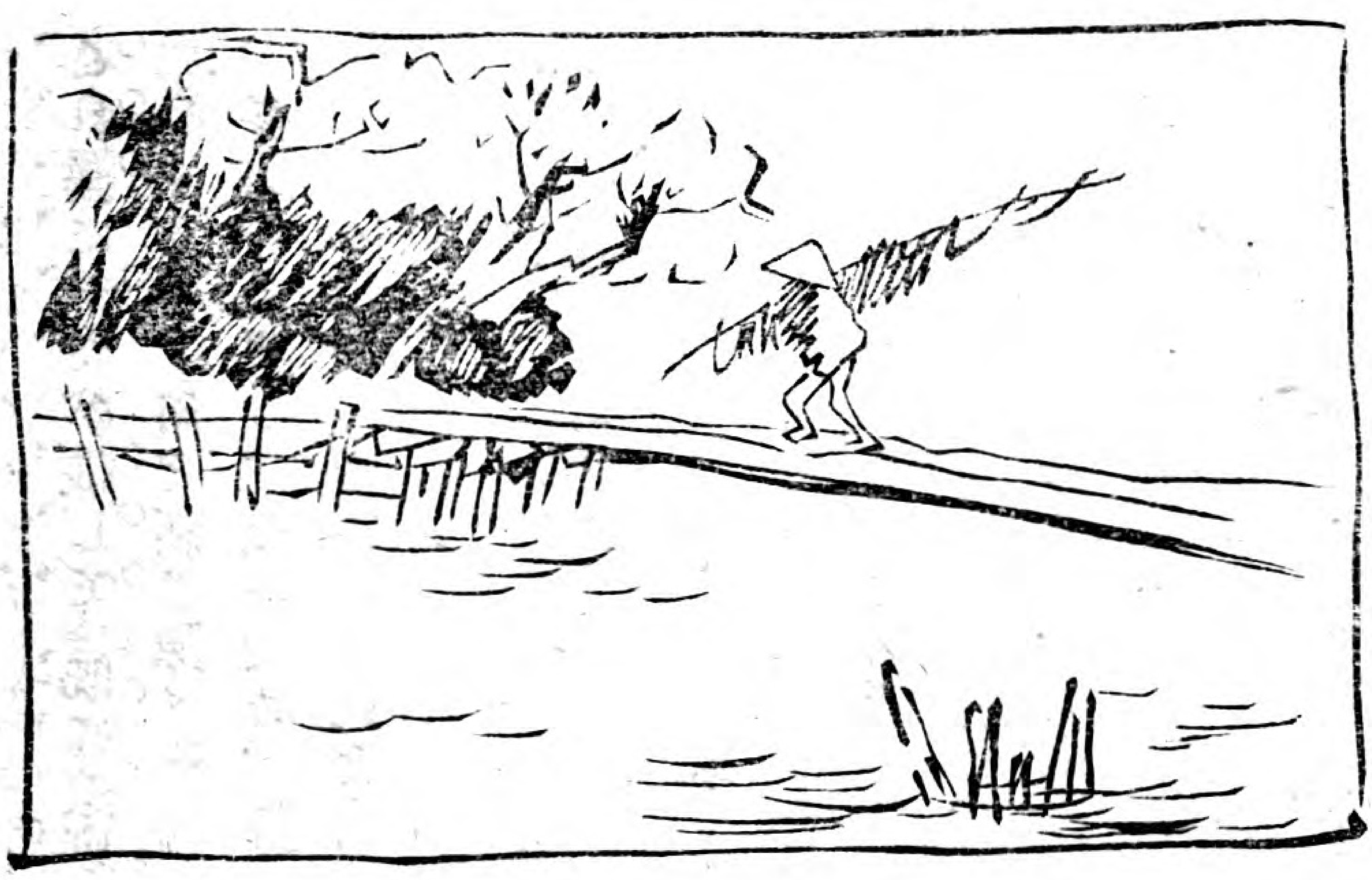
今の三面記事を論ずるもの、多くは、單に紙面のみによりて言を立つ。しかれども、三面記事を論ぜんと欲せば、さらに進んで、かの所謂探訪者なるものゝ所行を撿覈せざるべからず。けだし、記者は、室内にありて、たゞ筆を執るにとゞまるも、探訪者は社會に出でゝ、親しく材料を蒐集するを以てなり。吾人嘗て彼等に接して、その所爲を見たるごとき。彼等少しく異常の事實を得るや、自家の構想を以て巧に潤色し、興味ありげに揑造して、これを記者に致す。記者見て、その揑造なるを知るも、俗受けに利なるがために、尤め

ずして、かへつて喜ぶの風あり。しかうして、聞くところによれば、この悪手段は、ひとり吾人の知れる一探訪者に止らず。各社を擧げてかくの如く、彼等相競ふてその潤色の妙に誇るといふ。三面記事は實にかくの如くにしてなる。その事實の信ずるに足ずして、その趣味の卑野なる、まことにこれがため也。三面記事を論ぜんとするもの、探訪者の、この悪手段を弄するを知らざるべからず。

●三面記者の無學無識

三面記事は、もつとも歡迎せらるゝに係らず、三面記者は、もつとも社會に擯斥せらる。これ、一はその卑猥醜陋の事實に筆を染むるを以てなりといへども、その實は、彼等の無學無識、その主因をなすが如し。けだし、今の三面記者、悉くかくの如きにあらず、中には、専門の學術に通じ、相應の學歴を有し、しからざるも文壇に立つて盛名を負ふものなきにあらずといへども、多くは、すなはちコンマ以下の人物、校正の成り上りにあらずんば所謂羽織ごろの徒、學殖なく、識見なく、わづかに經驗と社會通とを以てお茶を濁せるものゝみ。甚しきにいたりては、普通の國語を知らず、外邦の地名を暗んぜず、さらに驚くべきは、破廉恥罪を以て入獄したるものすらあり。これらの徒が、米薪の

（半篇新潮欲生波　淺碧無痕礙越羅）



（一夜東風吹短夢　燕支湖上落花多）

料を得んがために、沒趣味なる下流社會と、頑迷なる社主の意を迎へて、卑野猥褻の事實に筆を執る、その記事の優雅高尚ならざる、もとより當然のことたり。

學殖あり識見ある一部の記者、ふかくこれを慨して、その弊を革新せんと欲するも、勢微にして所信を斷行する能はず。權は、依然として無學無識なる凡庸記者の手中にあり。今の三面記事を改善せんと欲せば、すなはちまづこの多數の庸愚を驅逐せざるべからず。しからずんば、いかに舌を爛して、その害惡を鳴らすといへども、その効は決してあらざる也。

●取消正誤と新聞紙

新聞記者がその新聞社の名によりて人權を蹂躙すること、決して少しとせず。取消および正誤の要求の如き、すなはちその一なり。既に一事實を掲載し、しかうして、これに對して取消もしくは正誤の申込をうけたる時、新聞紙は容易くこれに應じてその全文を掲ぐ。しかも、これに關して、その眞僞を辨する所なし。掲載の記事、果して申込人のいふが如しとせば、これ虛僞を天下に傳へたるものにして、もし、いふが如くならんとせば、これに對して分疏するの要あり、しかるに、新聞紙は、ともに、これに就いて、責任を負ふことなし。頃日駒込の人三浦某、これに關して、書を新聞『日本』に寄す。いはく、

> 新聞社が一旦筆を染めたる事項につき、事實と信じながら猶ほ容易に其の要求に應ずるは、即ち已が微力を表彰するものにして、畢竟無責任の譏を免かるべからず。何となれば暗に採部の不行届と曲筆舞文を疏明するものなればなり、若し曲筆舞文のことなく、全く事實の記載なるときは決して其要求を諾すべき理由なし、理由なき要求を峻拒するは當然のことたり。新聞紙の記載事項なるものは或程度の範圍内に於て法律の保護の下に在るものなるを以て、其の被保護の權利々益を抛棄するが如きは是れ謂れなきことなり、况んや身操觚社會にありて炳乎たる其の保護あるを知らずして條例に依り取消すものなりと物知り顔なる某々社の如きは沙汰の限りと謂はざるべからず。

これ、新聞紙の記事、事實なる時、申込人の要求に對して、容易に應ずるの輕擧を尤めたるものなり。しかれども、その記事、誣妄なる時、取消(もしくは正誤)の全文を記載したるのみにて、その過失を辨せざることあり。新聞社にありては、その全文を掲載したるを以て、すでにその責を盡したるものとなさん。しかも、これらの取消(もしくは正誤)は、たゞ形式にとゞまりて、被害者の寃を雪ぐがためには、些の効なきものなり。もつとも認めがたき紙面の一隅に、もつとも細少なる六號活字を以て植ゑ、讀者をして往々見落さしむるの虞あるのみならず、たとひ、認むといへども、曩

に腦裡に印したる前日の記事は、これを以て決して拭ひ去ること能はず。これを拭ひ去らんとせば、さらに注意すべき手段をとりて、充分その誣妄を辨ぜざるべからず。實際、今日の社會は、取消(もしくは正誤)を、以て、殆ど効なきものとして、一たび新聞紙に記載せらるれば、遂に寃を雪くの途なきものとなせり、新聞紙の責務、豈かくの如きものならんや。これ、畢竟その方法の可ならざるによるのみ。吾人は、新聞社に向つて、充分責任を守ると、ともに、誣妄の事實に關しては、徳義上より充分雪寃の擧に出でんことを望む。

◉言文一致論續稿　之を論ずるに方りて先づ見ざるべからざるは美妙氏の『夏木立』なり。時文記者、これを獲んと欲して上野神田兩圖書館を獵り、知友に問ひ、金港堂に問合せたるも遂に獲る能はず、これがために、本號には遺憾ながらその續稿を欠ぎたり。讀者諸君にして、これを所藏せらるゝものあらば、幸に借覽の榮を賜はんことを乞ふ。

宗教

◉宗教學校と京都

吾人は東京を以て一國の首腦となし總ての運動の中心たるを信ずるを以て宗教家も活動の根據を此地に占斷して天下に號令せんことを希望するや久しく又その意見を表發して世の識者の一顧を煩はしたるも亦一再に止らず而れども宗教々育の一事に於ては直に東京を以て京都に勝れりと信ずる能はず否現今に在ては宗教々育は寧ろ京都に於て施すの利なるを疑はざる也

第一東京は活動の地にして涵養の地に非ず塵煙紛沓諸事一として誘惑ならざるなく殊に宗教的道念を涵養するか如き尤も不適當の地なりと云はざる可らず、彼新島襄氏か先づ地を山紫水明の京都に卜し同志社の根基を定めたるか如き卓見として稱す可き處にして氏の成効は素より氏其人の人物如何にありしは勿論なりと雖も京都の地勢風氣が宗教的人材を養ふに適當したるに依らずんばあらず

第二之を佛教に見るに京都は各宗本山の所在地たるのみならず佛教諸聖が千又年來龍驤虎躍したるの迹歷々として證す可く或は比叡の紫翠を仰望しては最澄當年の偉業を想ひ天空に聳立せる東西六條の諸殿閣を見ては親鸞蓮如の遺德の如何に强大なるかに感ず各宗腐敗したりと雖も學佛の徒をして尙宗教的觀念を養はしむるに足らざらんや

第三各宗學林の京都に在る間は費用に於て亦國元父兄

及び門徒等の關係上より俄かに學生は通俗の學校に轉する能はざるの事情ありと雖も已に各宗の學林を移して東京に在らしめんか氣力あり財力ある學生にして何を苦でか勞は同しくして功の大ならさる學林に局促せんや必ずや滔々として相率ひて各種の官立學校に去り殘る所のものは到底取るに足らざる斗筲の人物のみとなり各學林は恰も不才子不肖者の掃溜となり了せん、宗内有爲の人物の進て博士となり學士となる素より賀せざるに非ずと雖も學林をして是の如く空虛ならしむるか如きあらば宗教々育としては寧ろ失敗と云はざる可らず

是の如く數へ來らは京都の東京に勝る必ずしも玆に止らざる可し、要するに學林は必ずしも學者を作るの所に非ず學問は寧ろ振はざるも信仰の血あり爲法の涙ある人士を陶鎔し得はその目的に於て成就し盡したり今日の學林の如きは何處に移すも學問の消長に於て左したる影響あるを信せざれども果して若し何等の宗派か一宗の學林を振革して護法の干城佛門の健兒を造出せんとするものあらんか吾人は適當の教育地として京都を擧けざる能はず

●寺務所と東京

吾人は前條に於て東京を活動の中心と云へ、佛教各宗は宜しく活動の機關を東京に移して全國に號令すべし、舊都の一隅に蟄伏して千又年前の舊習慣に屑々し倘此二十世紀の活潑世界を支配せんとす佛教各宗か委微として振ふ能はさる素より怪しむに足らずされば各宗の中にても東西本願寺の如きものは宜しく先づ其寺務の機關を東京に移置し大に新運動の根基を定むべし、少くともその役僧等か六條的氣質を一變するのみにても其効や莫大なる可し

●僞善の權化

難有からざるに念佛し自ら信仰せずして他人に信仰を勸む、彼の圓顱の相を見さるか彼の袈裟を掛けたる風を見ざるか彼の讀經する彼の說教するを見ざるか僧侶は是れ僞善の權化にあらずやと言太だ露骨を免る能はずと雖も天下の僧侶此激語に對して一言し得るの權利あるもの果して幾人かある

●宗教と職業

人の職業は神聖と稱する處而も宗敎の一度び僧侶の職業となるに至て宗敎は玆にその神聖を失す、彼は宗敎によて衣食せざる可らざるを以てインスピレーションの起るを待たずして念佛をも唱へざる可らず、傳道をも試みざる可らず滿腔の信念充溢して發して念佛となり讀經となり傳道的活動となるは今日の如く宗敎を喰物になす宗敎家には到底不可能に屬す彼等には葬式をなし墳墓の番人をなす位か關の山と想ふべし

●僧侶の數

世人動もすればいふ今日は僧侶の多きに堪へずと爾り今日の如き僧侶にして今日の如く無德無能葬式讀經若しくは墳墓の番人たるの外に一の用なきものにて止らんか一人だも尚多きに堪へずと雖も顧て僧侶が社會人道に悉ず可き天職如何を見んか實に今日の數に百倍するも千倍するも足らざるを見て未だ多きを知らず吾人は社會が僧侶に依賴するものあり多々增歡迎するの日の尙太だ近からざるを想ふ每に悚然たらずんばあらず

曰く錄

○六合雜誌記者佛敎家は眞に佛骨を迎へんとするかと題して曰く

宗敎家たるものが過去の祖師に戀々たるは大なる誤謬なり、原來宗敎家は預言者として將來を洞察し、常に世人に率先して改進の途に在るべき筈なるに、常に過去の祖師を追想するが故に彼等は保守に陷らざらんと欲する能はざるなり、彼等は何故に祖師を今日に求め或は將來に求めざるや、釋尊にして今日の社會にあらしめば如何・唯我獨尊てふ抱負を有したる彼は果して古人の白骨を迎ふるの愚を爲すべきや、吾人が常に朋友として同志者として見る所の佛敎家よ、白骨を迎へて僅に古聖人を追慕するてふ意氣地なきことを止めて、何ぞ唯我獨尊主義を叫破したる釋尊を現在に喚起することを努めざる

と單に敎を同ふせざるもの丶言として捨つ可きにあらざる也。

○木鷹氏によりて復活されたる「日本主義」に曰く

佛徒の根性全く餓鬼にして、此世ながら餓鬼道にさまよふものと云ふべし。今度シャムにて佛骨を發見せりとて、我國に之を迎へんとするが如き、果して何の意味する所ぞ。佛の眞の活動力は其精神にあるべし、死骸枯骨何の用をかなさん。昔は死せる諸葛活ける仲達を走らせ、生人の恥辱となれり、今又た生ける佛徒は死せる枯骨に由りて佛敎を興こさんと欲せるか、嗚呼佛敎は衰ろへたるかな、否々、生ける佛徒か枯骨の力を借りて佛敎を興こさんとするの意あらば尙ほ可なりと雖、思ふに彼等餓鬼的根生は、一切の貪欲を盡くして、尙ほ足らず、枯佛骨を迎へて之を喰ひ者にせんと欲するのみ。日本の佛徒に喰はる丶佛骨こそ、實にあはれはかなきものと云ふべし。

○村上博士釋尊降誕會の席上の演說の中に曰く

最後に偉人の出世、悲しいことには、此の第五の原因か、今日全く鈌けて居る、現今果して此の既頽の佛教を再興せんとする大偉人か、何處にありましようか、此の釋尊降誕會を開いた大日本佛教青年會は、其の看板か既に廣大で、而して其の下には、何宗何派といはず、有爲の青年、將來有望の人々か、團結して居ることであるから、此の第五の原因たる偉人の出現か、必ず此の青年會の會員中から起らればならぬ筈である、此の會員が、即ち此の佛教改革者の任に當らればならぬ筈であるが、然し若し此の會員中に、一切平等、人爵などは眼中に入れぬ筈の佛教徒か、何がし公爵とやらが有難くて、神輿か何ぞの樣に、此の公爵をかつぐ會員はありませぬか、宗教法案とかいふ問題に關係をして、腐敗せる墮落せる一部房主の尻持をしたものはありませぬか、コンナ公爵か眼さきにちらつく樣な、腐敗せる今日の房主の尻持をなする樣な青年會であるならば、佛教改革などは到底覺束ない、私しは諸君が、井上博士の演説に所謂「唯我獨尊」たる獨立自尊の志氣を確立し、益奮起せられんことを希望して止みませぬ、之を要するに、今日は諸種の方面より、明に佛教の改革を促して居ります、唯偉人の出現かない、此の大勢に乘じて旗を擧くる改革者が現はれて來ない、然しながら偉人といふものは、固より自ら我は偉人なりと名のつて出て來るものではありません、偉人の出現といふことは、後世よりいふことで、偉人出世の當時にては、偉人なりと他から目せられ、呼はれて居るではないのか多くあります、自ら偉人と稱するものは、反て怪しいので、ソレが寧ろ偉人でない證據であるのである、と氣炎万丈眞に當り難し、彼の妖僧の輩肝膽爲に寒からんとす、吾人は博士が如何なる勢力にも屈せず愈此種の苦言を腐敗したる佛教社界に與へられんとを祈らざる可らず、

○太陽記者東本願寺と題して村上氏の演説を評批し終に臨て曰く

昔者日蓮の其教を唱ふるや、曰く、吾は是れ釋尊の行者也と、如何に偉大なる宣言なるよ。今の宗教界の腐敗せるは、畢竟禪宗の行者あり、眞宗の行者あり、一法主、一舜台の行者ありて、而して釋尊の行者無きか爲ならずや。宗教は人生の爲に存す、人生宗教の爲に存ずるに非ず、腐敗せる本願寺と腐敗せる佛教との滅亡を希望したる村上氏は、須からく釋尊の行者を以て自ら任すべきに非ずや。

○傳道新誌記者東西本願寺を論して其相反目するを概して曰く

今や東西本願寺の門末を概算するに、僧侶の數三萬有餘にして、信徒の數(戸數)二百餘萬に達す、此三萬の僧、二百萬の門徒を擁て一團と爲し、勇往邁進以て教線展開の事に從はゞ、宇内萬邦を震駭すること、法案反對運動如きもの丶企て及ぶ所ならんや、吾人はご一考へても、日本の佛教をして、獨り日本の佛教に止まらしめず、廣く世界の佛教たらしめんと欲し、願王普濟の本誓をして、空く東洋の小天地に齊限せざらしめんと欲せば、宜く東西本願寺合同一致して、和衷協同の實を擧げ、教育に布教に、社會事業に、其方針歩調を同一にして進行せば、其進む所ろ、空曠無人の地を行くが如く、天下恐くは之に抵敵する者なかるべし、然るに兩派の門末は婦人女子にも劣りたる猜忌嫉妬の醜情に驅られ、恥かしうして明らさまに語衆人に語られもせぬ淺間敷感情に制せられ、西がかうした、東がかう出たと、目を三角にして

□相反目するは、何ぞ夫れ忌ま〳〵しき次第ならずや、

と

○女學雜誌記者生死の覊絆といへる下に曰ふ

『我に自由を與へよ、否らざれば死を與へよ』と叫びつる當年の憤慨は、人の屢ば傳唱する所なれど、此の自由未だ全たく自由とするに足らず、心地何をもつて自如自在の活氣を得んや。死を希がふと、亦た同じ、遂に安息の自由ならんや。人もし死を與へよと希がひて而して得可らずんば、自由を與へよと希がひて而も得ざると、其の煩惱は相ひとし、將た何の差別かある。曩には民權の士、偏えに自由を要求して、其心益々自由に遠ざかる、寧ろ求めざるものゝ自由自主たるに若かざりしなり。死を所るもの亦然り、汝もし眞とに死せんとを欲せば、其の欲すべき心志を殺し、先づ自から煩悶を滅するに及かず、則はち死せしものと相等しからん也。嗚呼、人の迷ひや、生死の覊絆に縛せらるゝより甚しきはなし。生死もと我を縛するとなきなり、我則はち自から縛す、必竟、煩惱に過ぎざるのみ。我元と自から生きしにあらず、我遂に自から死するにあらず、生死本來一場の現象、唯だ我が經過する當面の風景たるに過ぎざるなり。敢て生きんとを欲するの愚かさは、殊更に死を急がんとする愚に相似たり。死は急ぐべきものにあらず、亦た怖るべきものにもあらず。其の來るは、老年の來るが如く、晩景の近づくが如く、木の葉の落るが如く、元と當然なるが故に即はち自然なるとを知り、敢て作爲故造して心志を勞するには及ばざるとも也。夫れ、生死の覊絆、念頭より脫離し、存亡有無の異別を忘れて、只だ在の儘に活如躍如たれば、心地朗々として常に樂しく、自主自由として何の故障もなし。古人歌ひて曰く、芳野山、花さく頃のあさな〳〵心にかゝる峯の白雲。

と相變らず古哲の法語を讀むの心地す、

日野義淵氏

小観記者

○本願寺に在て日野義淵氏の死んだのはたしかに同派の一大損失だ。殊に同派青年黨に於ては尤も大なる打擊と云はねばならぬ。

○氏は備後の產で足利義山といふ本願寺の學頭の息で思慮周密誠實温藉といふ可き人だ。

○曾て里見了念氏を佐けて普通敎校に敎鞭を執りしより爾來十又余年間その職は色々に變更したが始終新運動の奬勵者保護であつたことは何人も疑はない。

○本願寺の吏僧で始めて洋服を着て老僧等の物議を引き起したものは實に氏であつた。

○反省會が普通敎校の學生間に擬められた時に尤も熱心に斡旋の勞を取られたのは氏であつて海外宣敎會の發起人も亦氏である。開明新報といふ政治的宗敎新聞の發行せられたのも矢張氏等の經畫に成たのだ

○氏が一躍して執行となつたのには多少ぶツ〳〵云ふものもあつたやふだが畢竟閲歴とか何とかいふものを有難がる奴等が氏の成功のあまりに早かたのに驚たの

と亦一は嫉妬心からとである。
○事務に精勵なることと氏の如く物を處するに周到なることと氏の如く派運の振作に忠實なる氏の如く執行として何の差支かある現に今日となつて氏に代る人物がないではないか。
○或る人は氏と久しく交際をしたがとふ／＼其人物の眞相か分からなかつたといふた。しかしそんなに秘密のある人ではないあの謹直で責任を重した盡の人であると吾輩は信ずる。
○氏に決斷がないとか意見の見る可きものがないとか彼是いふものがあつたが。今日の本願寺の執行としてそんなものは一もゐらない。それゆゑに少しも鋒矛を示さなかつたものと考へらるゝ。人の眞似の出來ない處はこゝらで氏の速かに上進した所以であらふ。
○執行などゝいふと無闇に威張て見たり無闇に賄賂をほしかるものだが氏に於ては決してそんな不潔なことはなかつた。普通教校の書記であつた時も文學寮の監事であつた時も總代會衆本山註記それから執行に上つた時も終始一日の如く少しも謹直清廉の風は變はらなかつた。
○派内の有力者でイツも青年の味方をしてくれたのは先づ氏の如きもので後進のものが一身上の事でも亦宗教上の事でも何か必要の相談を持ちかけると決して捨てゝは置かん何とか片をつけるそふして大概は自分の事のやふに心配をせられた、その人が歿くなつては實に青年者の一大打擊と云はねはならぬ。
○山師のやふな法螺吹や我利我利連中や收賄老僧は今でも隨分ないでもあるまいが氏の如き人物は太だ多く得られない。此人を失ふたは本願寺のためにも尠からざる損失で何人も痛悼する所であらふ。

新刊批評

◎上世印度宗教史

姉崎正治氏著　博文館發行

姉崎文學士か淨土宗高等學院に在て印度宗教史を講義したるものを統合して佛教を中心さして之れが由來を吠陀の神話時代及びウパニシヤドの哲學に求めて此書をなしたる也さいふ緒論さして先づ上世印度宗教史の概論を說き第一部吠陀の神話宗教、第二部波羅門教第三部佛教の興隆第四部諸宗教の混和醇化第五部餘論に至て已む各部詳細にその歷史的發達を叙し淵原未流歷々さして迹尋す可く、著者は本書の序言に於て

此書固より原造的研究の批評的叙述にあらずして一片の教案蒐錄に過きず、然りさ雖さも其斷案の據て基く所、其結果の指示する所に至ては著者自ら賴む所なきにあらす

といふもの單に氏が自負の言として見る可らず吾人は浩澣として太た統合し難き上世印度宗教史の如きものに向て本書の如きは尤も有力なる先導者として歡迎するを躊躇せざる也、（定價七十錢）

●政治汎論

永井惟直氏著　博文館發行

是亦百科全書の第四十七篇として出でたるもの也先づ緒論に於て政治の何物たるを辨し本論に於ては政治の體と用とを說きたるものにして各國制度の沿革より現今の憲法行政及び各種の制度に至てその大略を叙せり政治の何たるを知らんと欲するものは宜しく先づ一讀し置くを可となす（定價三十五錢）

●宗教坐談

內村鑑三氏著　獨立雜誌社發行

教界の奇士內村氏の宗教談なり教會、眞理、聖書、祈禱、奇蹟、靈魂、復活、永生、天國等の事を十回に分ちて談したるものにして宗教に於て一種の信仰と勇慎を有する氏の事とて一讀し來て頗る心中を快にす可きものあり「口啓き」として氏が本書の始に記したるものあり曰く

私は教師でも牧師でも神學者でも何んでもありません、私は唯の普通の信者であります、故に私の申す事に何にも深い事や六ヶ敷い事のないのは勿論であります、私は玆に宗教研究とか比較宗教とか申して宗教を學者的に論究致さうとするのではありません、私は私の信仰有の儘を御話し致さうと思ふのであります。

宗教は事實であります、議論ではありません、信仰の事實なくして宗教は議論するとの出來るものではありません、此座談の如き實に取るに足らないものでありますが、然し之とても亦事實無しの宗教談ではない積りで御座います。（定價三十錢）

●雲のちぎれ一

田岡嶺雲著　春陽堂發行

嶺雲氏の舊著を蒐めたるもの、自ら序して曰く哲學者たらんには吾は情に熱するに過ぎたり、されど詩人たらんには吾は理に冷かなるに過ぎたり、詩人たらんも得ず哲學者たらんも得ず、嗚呼駢拇倔僂の形に畸なるが如く造物戲れて吾の才を畸にせし歟、此書は即ち此の才に駢拇倔僂なる吾の片影なり、駢拇倔僂は人の見んことを愧づ、されば吾は才に畸なるを恥ぢず寧ろ畸の更に大なる畸ならざりしを恨むと、氏の文は浮華に失せず微弱に流れず、また卑野ならず粗笨ならず、雄勁にして而かも趣致あり、人或は以て粗放となすものあるも之れ氏の想の時に豪放なるを見てしかく誤れるなり此書、文學論として見る可、哲學として見る可、社會に對する抒情的論文として見る可、而して修文の摸範とする亦可、文學に志ある人の一讀すべきもの也（定價三十錢）

●世界一不思議

長田秋濤譯　春陽堂發行

一種の冒險談より、純正小說に饜き講談に饜ける今日の社會は斯の如き書を歡迎するなるべし、（定價三十錢）

●新小說

第五年第五卷　春陽堂發行

後藤宙外氏の手向の笛、佐藤迷羊氏の船供養、田村松魚氏のおもひ寐、永井荷風氏の闇の夜（以上小說）依田學海氏の學海慢筆、內田魯庵氏の天鼕鈔、天涯茫々生の村落生活、柳川春葉氏の稚ごゝろ、前田曙山氏の目かつき、神谷鶴伴氏の米國慢謠（以上雜錄）宙外氏の春と詩人、詩興と春、春と夢、春と戀、（以上時文）鳩山春子夫人（談叢）司馬意士の新俳優の內幕、上司子介氏の相撲繁昌記、くさはら坊の力士月旦（以上藝苑）足尾銅山、淺草迴覽記 以上社會）等（定價二十錢）

●續々當世活人畫

儘世翁　春陽堂發行

嘗て報知新聞に續載したるものにして、現代知名の男子及び婦人の平生

を極めて幼稚に極めて粗笨に極めて輕薄に且つ極めて冷嘲的なる筆致を以て俗受專門に書きなしたるものなり、篇中の事蹟果して事實なるか否かを知らずといへども斯の如き實文記者の同情なき筆端によりて口ぎたなく翻弄せらると所謂名士閨秀こそ氣の毒なれ卷頭に儘世翁といふ者の序文あれど獨りよがりの惡文なれば何の事やら意義少しも解らず（定價六十錢）

●道德法律進化の理

加藤弘之氏著　博文館發行

例の加藤博士の功利論及び進化主義を根據にしたる論著にして曾て「道德法律の進歩」と題して出版せられたるものを今度更に詳說布衍したるもの也といふ上編には愛己心及愛他心を四章に亘て論し下編にては道德及び法律を九章に分ちて詳說せり博士の學說は世已に定論あり今玆に之を評批するの要なし唯博士が老て增學問のために精勵せらるゝを欽す可きのみ（定價三十錢）

●政治史

森山守治氏著　博文館發行

帝國百科全書の第四十六編として出てたるものにして十九世紀即ち前世紀一百年間の歐州政界の重要事を所謂輪切體に叙說したるもの也先つ維也納會議神聖同盟等に始まり普佛戰爭露土戰爭十九世紀末諸國の動靜に畢る記者も自白せしが如く本書は紙數自ら限あり素より充分なる能はざるは已むを得ざる所なれども政治史中重に外交史に關し且つ國史中の文明社會に尤も影響を及したる事實のみを綴りたりと云へは前世紀歐州政史の一班を知悉するに餘りありといふべし（定價三十五錢）

●日南子

福本誠氏著　博文館發兌

滔々數万言、經國の大議論も之を讀むの人なく、深奧の學說耳を傾くるもの亦稀なり、福本氏の「日南子」は社會の趨向を看取し、最趣味あり、最讀み易き雜錄躰に依り、多年の抱負を表向せるものなり、全篇通じて五十六章、章々別問題を捕へ來りて、而かも全篇一貫せる一大議論なり、「政史的人民」の主義より說起して、歐州諸邦の「政史的資格」に說及ぼし、遂に我日本國の「政史的人民」たらざるべからず、且つその「政史的國民」たる所以を開示して、我國の特長性格を指摘せり、その中我「日本人種の起原」及之に關する歐州の諸況等を並擧し、之に自已の判斷を添へ遂に菲律賓島に自ら「日本人の後裔」を探尋せし事跡と述べたり、氏は又歷史的見識に富み、殊にこの點に注意せしは、我々の尤愉快を感ずる所なり、マーコポーロの旅行記の我國に關する部分を譯評し、四方に傳はりし日本國名、山田長政の事業を擧け、日本書記の孝德記に見へたる吐火羅舍衞は印度、中央亞細亞の地名に非ずして、菲立賓のタガラ人種南洋ビシヤ人種なることを斷定し、その說を慥めんとせし如き、尤妙味を感ずる所なり、學者も、經世家も、一般の讀者も之を讀み利益を享受すべき近來稀有の珍書なり、マーコ、ポーロは元の忽必烈の宰相博羅にしてその旅行紀の本書は項日共益社に於て飜刻しつゝあれば併せて福本氏の譯評せし原本をも見るを得べし、附紀して以て「日南子」の世に出でしを謝す、（定價二十錢）

●佛敎の眞精神

大﨑信一氏編　京都無盡燈社發行

大谷派先法主の七回忌紀念として無盡燈社より發行したるもの大谷新法經の題字あり中々見事なり編集せしもの南條氏の勤行求道德の解清澤氏の獨立の精神及び佛敎の眞精神として本卷の主論とするもの第一章に佛の身心、第二章に佛の心に叶ふたる人、第三章、佛の心に叶ふたる家庭、

第四章佛の心に叶ふたる町村、第五章佛の心に叶ふたる國家、第六章佛の心に叶ふたる世界等を收む、眞宗信者の讀み物としては決して片々たる駄文字の類に非ず（定價十六錢）

●高田本山名所圖會　石倉重繼氏著　尾呂志屋書店發行

眞宗名所圖會第二編として發行したるものにして高田派本山專修寺に關したる歴史、地理、現在、過去として記載されさるなく更に美麗の圖を處々に挿入し記事の足らざる所を補ひたれば同本山の事を知らんと欲するものは本書に就くを尤も便利なりとす

●月桂冠（新聲第三篇第五號）新聲社發行

懸賞の流行は遂に延いて這般少年雜誌にまで及ぼしたるか、本誌は嚢に賞を懸けて募集せし小説、新體詩、論文の當撰せしを收めたるもの。就て之を見るに論文のやゝ見るに足るのみ、他は全く讀むに堪えず、尚後に天隨の豆州名勝、泣菫の村嫁、有明の釋雲を附載せり（定價八錢）

●よしあし草（第二十五號）大坂　關西文學會發行

大坂の地と文學、批評家雜等あり、不相變御盛んと申すべし

●煙草倶樂部　第一年第十號　全發行所發行

本誌に多とすべきはその能く硯友派の新進作家を紹介するにあり、本號また漣門下の文士生田葵山の『白鷺物語』を載す此篇の外、別に松居松葉の『返りざき』あるもかれに比すれば甚だ劣れり、なほ雜錄に紅葉氏の平生を描寫せる『おもかげ草紙』等あり挿畫及表紙畫は桂舟氏の筆になれるものとて流石に凝つたものなり（定價拾錢）

●明義　第壹號　東京明義雜誌社發行

法學士上野眞正、岩田宙造二氏が憲法の大義を明にせんとて貴族及び準貴族の貿數名の贊成を得て發行するもの、其主義の如何は先づ其贊成者の性質によて知るを得可し、一派の人士に於てはかゝる雜誌も亦必要ならずと云はず

●俳星　第二號　俳星發行所發兌

印刷體裁は「ほとゝぎす」が尙地方に在りし時に似て太だ見るに足らざれども趣味の程は却て全篇に横溢して見らる、本號には子規の「春淺き庵」露月の「うぶすな」等あり

●種子くべ　第壹號　種子くべ發行所發兌

是も京都にて發行する俳諧雜誌にして俳星に比して數等進歩せり、子規の「俳句上の京と江戸」四明の「審美俳話」文芽の「文學者商人根性」等あり、體裁こそ佳ならざれ「ほとゝぎす」に劣らざる材料多し、

●明星　第一號　東京新詩社發行

歌壇の奇才子與謝野鉄幹氏の發行する月刊文學雜誌なり本詩には梅澤氏の「アストン氏和歌論」醒雪氏の「端唄評釋」天隨氏の「鵲隅詩解」諸名士の「色彩の嗜好」柳浪氏の「その節」の短篇小說其他新體詩和歌等材料豊富にして輕妙の挿畫數面あり、趣味津々として悉きず、近來發行の文學雜誌中出色のものといふを辭せざる也

報道

時事日鈔

四月三日　神武天皇祭を宮中に行はせらる

四日　國語調査の委員長及び委員の任命あり

九日　眞言宗本山分離大會を日本橋大安樂寺に開らく

十六日　林友幸黒田清綱二氏樞密顧問に任せらる

十九日　福井市大火あり

二十日　兩陛下濱離宮に行幸啓あり文武百官と觀櫻御宴を共にせらる

二十三日　東宮御慶事御用係會議あり

二十五日　皇室婚嫁令御發表相成る

二十七日　皇太子殿下來る五月十日御婚禮を行はせらるゝの旨を告示せらる

二十八日　大元帥陛下紀伊に於ける海軍大演習を御親閲遊ばさる

教育時事

○教育金の下賜　今回東宮殿下御結婚の大儀に當て教育費として兩陛下より思召を以て東京市へ八萬圓京都市へ二萬圓を下賜あらせられたりと

○福澤翁へ恩賜　福澤翁が教育上に於ける功績を思召され是亦御慶事の前日を以て金五万圓を賜はらせられたり其の御沙汰書は左の如し

福澤諭吉

夙に泰西の學を講じ校舍を開きて才俊を育し新著を頒ちて世益に資する三十餘年其功績尠からす因て思召を以て金五萬圓を賜ふ

明治三十三年五月九日

宮内大臣　子爵　田中光顯

翁は聖旨を奉體して永く才俊を育し世益に資するの用に充てんが爲に即日慶應義塾へ寄附し同塾の基本金となしたりしと

○吾國の中等教育　近來各地中等教育の發達著しく中學程度の學校の數次第に増加し來る、今文部省の調査したる全國公私立高等女學校及び中學校の數は左の如くなりと

高等女學校の部

公立	府縣立	一七
	郡立	二
	町村立	七
	市立	一五
	諸學校通則	一
私立		七
合計		四九

中學校の部

本校	公立	一六二
	私立	三四
分校	府縣立	二一
	郡立	一
	諸學校通則	二
	私立	二
合計		二二一

○實業教育局　が將來の經營すべき重なるものを聞くに曰く(一)外國實業教育の狀況視察(二)實業教育補助金の增額(三)教科書の編纂(商工農等各科を分ちて調査會を設け夫々重任の委員を置きて調査せしむる事)(四)實業教育の養成、普通教育に於ける師範學校の如く、高等にして專門なる、大養成所を設置する事(五)實業教育に關する諸種の規定、及實業學校の設備に關する規則の改正等なりと、

○兒童研究法　高島平三郎氏研究法大意に兒童期に於ける習慣の

形成さして左の要目を擧け

（一）すべて兒童の習慣を發生せしむべき衝動、反射運動及び本能運動、

（二）習慣の形成に於ける生理的基礎をあらはす所の神經系統の性質及び職能、

（三）習慣の起る原因（必要、教練、無意的接觸等）、

（四）習慣の破滅（生理的及び心理的法則）、

（五）家庭及び學校にての教練に於ける習慣の價値、

（六）身體的習慣さ精神的習慣との關係

次に兒童の發育に關しては

（一）兒童の生活中種々の時期に於て或は急劇なる發育をなし、或は遲緩なる發育をなすの原因、

（二）兒童發育の比較研究、

（三）男女共同教育發育との關係、

（四）靑年期に於ける男女心身の特質、

（五）種々の機官及び身體部の成熟期、

（六）遊戯的本能が兒童の發達に及ぼす影響、

（七）兒童の發育に適當なる身體上の練習、

の項を列せり

○**米國富豪の寄附**　「時事」の一雜報に曰く、歐米人士が公共心に富みて學校等に其財産を寄與し文明の進歩を補助するは每度の事にして大に稱賛すべき所なるが玆に又米國の富豪ロックフェラー氏がシカゴ大學に大金を寄附したる美談あり同氏が同大學に寄附したるは是迄既に一二度に止まらず其高も隨て非常にして去る頃氏は二百萬弗を同校に贈りたる節之に附言して若し他に二百萬弗を寄贈する人あらば余は更に又二百萬弗を寄贈す可しさ約定せり然るに此頃に至りて他よりの寄贈額二百萬弗に達したるより同校長は早速同氏に向つて電話を掛け賞品は余輩の物なり足下は二百萬弗を所持せらるゝや否やさ問ひければ同氏は之に對して勿論全額殘らず余の手許にあり左れども余は更に之に百萬弗を加へて三百萬弗さなし貴下に呈せんさ答へて大笑し再び語を續けて三百萬弗は確に貴校の財産目錄中に加入せりさ云へり次で翌日に至り氏は同校長に打電して余は貴校のロックフェラー大學と呼ばるゝを好まず人民の大學校さ稱せられんことを望むさ云へりさシカゴ大學の總寄附金は約一千二百萬弗（二千四百萬圓）にして內八百萬弗はロックフェラー氏の寄贈に係るさ云ふ

○**日本體育會の新築落成式と大會**　今回九段下牛ヶ淵公園の一部に新築せられたる日本體育會は去る六日其落成式をかねて大會を開きたり新室祭を訖はりて會長殿下の令旨、樺山文相其他二三の祝辭演説あり會者五千有餘非常の盛況なり

○**文部省の官制中の改正**　勅令第百六號を以て改正せらる、其管掌事務は左の如し

（一）工業學校（二）農業學校（三）商業學校（四）公私立商船學校（五）徒弟學校及補習學校（六）以上同等の學校（七）實業教育費國庫補助（八）實業學校教員等に關する事項

尙大臣官房にては通則に揭る外左の事務を掌る、

（一）公立學校職員に關する件（二）教員免許（三）圖書（四）建築營繕（五）高等教育會議（六）學校衞生（七）博覽會（八）褒賞等に關する件

專門學務局の事務左の如し、

（一）帝國大學及高等學校（二）專門學校（三）以上諸學に準ずべき各種學校（四）海外留學生及教員海外派道（五）圖書館及博物館（六）天文臺

測候所及氣象臺(七)學術技藝の奬勵及調査(八)測地學委員會及地震豫防調査會(九)學士會院(十)學術會(十一)學位及之に類する事項等

○高等學校長の交迭　去月十三日を以て交迭せり

任第二高等學校長　第五高等學校長　中川元
任第五高等學校長　仝　校教授　櫻井房記
任第六高等學校長　第三高等學校教授　酒井佐保
休職を命ず　第二高等學校長　菊池謙次郎

○新博士　岡田和一郎奥秀三の二氏は論文を提出して醫學博士の學位を授かる

○東本願寺の女學校　今度京都に於て同派は高等女學校を設立する由にて脩業年限及び學年は左の如しと

本科、補習科及技藝專修科を置き修業期限は本科(四年)、補習科(一年)、技藝專修科(三年)とし、學年は毎年四月一日と定め學科程度は本科は修身、國語、外國語、歴史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畵、音樂、體操、漢文、補習科は修身、國語、漢文、外國語、家事、裁縫、習字、圖畵、音樂、教育、技藝、專修科は修身、讀書、作文、習字、算術、理科、家事、裁縫、圖畵等なりと、

宗教片々

○佛骨の奉迎　佛骨奉迎使のさふく物になりて各宗の和尚達か耻かしくもなく噪き立つは一種の奇觀として今其準備委員會が四月二十日京都妙心寺に於て决議したるものを見るに左の如きもの也

釋尊御遺形奉迎協議案

第一項　各宗派は奉迎使七人を選擧し暹羅國へ派遣せしむる事
但眞言、臨濟、本願寺、大谷等の七宗派より各一人を選出し出發日時は奉迎使協議の上之を定む
第二項　奉迎使は互選を以て正使一人を置く事を得
第三項　各宗派は暹羅王陛下同國外務大臣稻垣公使に宛て管長連署の書面を起草しかれて奉迎使に關する信任狀を呈すべき事
第四項　各宗派は暹羅王室及其他に物品を贈呈する事
但物品の價額は合せて一千圓を程度とし物品の選定は奉迎使の協定に一任すべし
第五項　各宗派は其宗派委員に奉迎員一人を選定し奉迎に關する事件を取扱はしむべき事
但選定委員の姓名住所は本日より五日以内に通知せられたし
第六項　釋尊御遺形假奉安所及奉迎事務所を設置する事
但京都市下京區妙法院前町妙法院とす
第七項　奉迎事務所に關する費用は奉迎委員に於て之を議定する事
前項の費用は一時借入金を以て之を支出し償還方法は別途に之を定むべし
第八項　奉迎使派遣の費用豫算を定むる事左の如し

一金一萬圓　奉迎使派遣費
内
金一千圓　奉呈物品購入費
金七千圓　奉迎使往復費
金二千圓　奉迎費豫備費

非常費目は奉迎使に推選せられたる宗派にて之を協議し一時立替ふべし

第九項　御遺形佛事式典は大畧左の如し其法要の施行方法は奉迎委員に於て之を協定すべき事

一上陸會　長崎に於て之を行ふ
一奉迎會　京都に於て之を行ふ
一假安置會　同上
一拜迎會　沿道各所に於て之を行ふ
一拜讀會　假安置の後、期日を定め之を行ふ

第十項　奉迎委員は御遺形奉安に付前各項の事業計畫をなし宗派會議に提出し決定すべき事

一高廟建設の件
一同上建設地選定の件
一右費用に關する件

第十一項　奉迎に推選したる各宗派に對して當會より代表者を以て之が請願をなすべき事

而して特別協議案なる帝國佛教會設立の件に就き左の決議をなせり

一　釋尊御遺形を奉迎し及び之を奉安し日本佛教會に於て永遠護持し奉らんが爲帝國佛教會を設立する事を希望し其組織方法等は之を各宗派管長會議に提出し議決を求むべし

事後各宗より奉迎使一人づゝを派することゝし眞言よりは土宜法龍曹洞よりは弘津説三日蓮よりは田村豐亮淨土よりは神谷大周本願寺派よりは藤島了穩大谷派よりは大谷光演の諸氏を出し其の中正使として大谷光演氏を推し更に大谷派よりは南條文雄氏を隨行せしむべしといふ嗚乎又盛なるかな、

○府下の基督教會　東京府社寺課の調査に係る基督教各派の教會及び講義所の數は左の如し

宗派名稱	教會數	講義所數	合計
日本基督教會	一八	三	二一
ハリストス正教	五	四	九
日本聖公會	一六	五	二一
美以美監督派	八	〇	八
日本美以美派	六	一	七
救世軍	小隊四	救濟所一	五
天主公教	八	〇	八
バプテスト派	六	三	九
プレスビテリアン派	三	二	五
新教福音派	八	八	一六
宇宙新教	二	〇	二
クリスチャン派	三	〇	三
セブンスデーアドベンチスト	〇	二	二
日本組合基督教會	三		三
基督教友會派	一		一
同盟基督教	一		一
普及福音教會	一		一

即ち總計宗派十七、教會八十九、講義所小隊説教所救濟所等三十三合計百廿二に達せりと

○組合教會總會の議題　今回同會の議題は左の數條に在りと

（一）組合教會本年度豫算
（二）歷史編纂の事務繼續の件
（三）教役者養成法件
（四）總會の時期變更の件

（五）傳道會社本年度豫算

（六）新傳道地開始の件

（七）次回總會の場所

（八）建議案組合教會に巡回教師を置くか或は傳道會社の專任社長を置く事

○桑港の釋尊降誕會　昨年薗田文學士が西島覺了氏と桑港に趣き米國傳道を開始してより二氏の熱心其功空しからず着々効果の見る可きものあり去る四月八日を以て釋尊降誕會を開らきたるの詳報は載せて近着の「會報」に在り今其全文を左に掲くることゝなさん

釋尊降誕會の景況

▲會堂の盛裝　四月八日は是れ教祖牟尼世尊の降誕聖日なれば大に其教線を擴張せんが爲め規模を大にして準備に着手し先づ準備委員數名を擧げて之を委せしが當日に至れば玄關には日米國旗に六金色旗を交叉し入口には大燈籠を釣るし、講堂に入れば三流の旗には千古の金言を大書し Welcome の大扁額は内外人を招き、各國旗は地球上の人種を歡迎し、球燈、羅綱を彌布し東西兩洋の裝飾は施され殊に田坂畫伯の筆に成りし釋尊の歷史畫は人目を引き莊嚴至正に盛裝せられたり、

▲釋尊降誕會（外人）　同日午後二時開會、參會せる外人無慮百五十名、先づ兩開教師英文經典拜讀、次に薗田師は二千五百二十五年の今月今日に誕生せられたる佛陀は世界宗教上如何なる位置を占め居るか、又宗教的社會的革命者として如何に人類の上に光明を放ちしや例證を明晰に陳し進んで理想的のみのならず、吾人は實際的に指導者として其の途にあるものなれば進んで斯の教普及の爲めに盡すべきを誓つて降壇し、次に西島師は釋尊の事跡を詳細に說明して大に聽衆に感動を與へられたり、次にドクトル、ノーマン氏は佛耶兩教の比較論より耶蘇と釋迦との對比論、進んで哲學的に佛教の解釋を試み古今獨歩超世不拔の眞理を開展せられたるものにして斯の如き偉大人傑の誕生を祝するは人類として當然の務めなり、吾人は此の聖日を年々祝して佛光此國に遍照して蒼生を救濟するを以て務めとし佛陀の理想たる四海兄弟主義を實行せすんば止まずと氣焰万丈當たるべからざるものありたり、夫れより何れも佛陀讃聖美歌を謳ひ何れも佛恩に感泣して散會したるは四時半頃なりし、此集りには長尾氏著の英文佛教大意を施與したり、

▲同會（日本人）　在留同胞に對する同會は午後八時より開會せられたり、時に先立ち群集せる同胞、潮流の一時に寄せ來る如く參集して滿室立脚の地なく階上階下人を以て山を築き、時間後れて來るもの入るを得ずして空しく歸途に就きたるもの幾百なるを知らず、定刻に至るや野口富三郎氏司會者として此の會を司る旨を述べ、唱歌奏樂ありて開會し、兩開教師の嚴肅なる讀經あり、次に長尾幹事は開會の旨趣を陳べ、次に吉田龜太郎氏會員惣代として祝文を朗讀し、次にノーマン博士のピルマ國歌を唱へ、西島開教師の法話（別項法話欄參照）あり、次にノーマン博士を紹介せり、氏は親愛なる兄弟姉妹と巳が奉する教祖誕生日を祝し而かも自巳の意見を吐きて清聽を汚すに至りたるは生の面目之れに過ぎたるなしと冒頭に置き、進んで釋尊の哲學的學說、實行的倫理說、輪廻說、等詢々說き去り說き來り一時間半に亘る長演說を試みて降壇せり、（追て該筆記をば譯載すべし、次に薗田師は印度古代哲學的系統より釋尊當時に於ける思想の一班を論述し、進んで其思想を一變せしめ自家獨得の說を樹立し、而かも其教祖は基督を去る六百二十三年前に降誕して教法を闡揚し其教東漸して米國に於て其祝會を諸君と共に此盛會を見るとは實に佛教徒の一大飛躍すべき時機到來

せるなり、諸君進んで取る方針を變せず國の爲め教の爲め忠實ならんとを祈ると其該博なる例證と斬新な理論は聽衆に喝采を博したり、(次號には師の演說筆記を掲載すべし) 夫より會衆一同に『佛陀の福音』を頌ち散會したるは十一時半頃なりし、因に云ふ、當夜の盛會を見るに就ても吾人は最早や區々たる事に逡巡せず進んで殿堂建築に從事せざるべからず、願くは熱心なる會員諸君這般の事に鑑み、早々建築問題を提供して盡力せられん事を祈るのみ、

○眞言宗末寺の決議　眞言宗内に昨年分離論の起りたるより紛々愈紛々未だ決定する所を見ざるが去月九日末寺五千餘箇寺の總代五十餘人は日本橋小傳馬町大安樂寺に會し非分離の決議をなしたりしと

第一　請願委員選定の事

第二　大本山へ交渉の事

第一項　大本山より分離請願書を却下せしむる事

第二項　若し願書却下出願の請求に應せざるときは其理由書を徵する事

第三項　前二項に應せざる時は其の所屬を脫する手續を爲す事

第三　各分離認可後の大方針決定の事

第一項　統一運動は徹頭徹尾遂行し姑息的讓步を爲さゞる事

第二　若し分離を認可せらるゝ時は我等同志は所屬本山を分離し高祖の御遺言に係る總本山に歸一する事

第四　各支所下綱維(役名)總辭職の件

第五　各寺院檀徒信者の請願調印を取るの件

○神社局と宗教局　內務省にては今度神社局なるものを新設し、神宮及神社神官神職に關する事務を掌り、又從來の社寺局を宗教局と改め、神佛各派、寺院宗教の用に供する堂宇、僧侶及教師に關する件等の事務を掌るとなれり、而して李家裕二氏神社局長に斯波淳一郎氏宗教局長に任ぜられたり

○佛蹟に於ける本願寺新法主　歐州巡遊の途次佛蹟を參拜されたる大谷法主は鹿野園に於て左の一律を賦せられたりと

往事茫々弗易尋。法藏八萬有遺音。同流改道南兼北。歐軌異時古與今。鐵路築成致富大。妖祠不毀用謀深。可憐人口過三億。未見英雄攪衆心。

○佛教大學の職員　本派本願寺の佛教大學の職員として左の諸氏任ぜらる

赤松連城(總理)

勸學足利義山、勸學小山憲榮、司教伊井智量、輔教服部範嶺、輔教熱田靈知、輔教提山暢堂、輔教日下大痴、輔教是山惠覺（以上佛教大學教員)、岩橋興隆（佛教大學監事)、河野方賢、池田慧琳（以上大學舍監）高野長明（佛教大學藏監)、

又哲學教授として文學士草場季彥氏聘せられ前文學寮教授榊亮三郎氏も語學の教員として迎へらるへしといふ其他は尚未決なりと聞く

○島地默雷氏　は本年還曆の齡を迎へたるを以て去月廿九日小石川後樂園に壽宴を開きたるに朝野の名士の參會したるもの太だ多かりきと

○里見法爾氏　本派本願寺布教師監督として布哇に在りしが今度職を今村惠猛氏に讓て歸朝したりと

○菅直海氏　の通信の四川省重慶より來るもの左の如し

拜啓六日漢口發十日宜昌に着し十三日同所發本月二日當地着仕候條乍憚御放慮可被下宜昌よりの舟行は廿二日を費し退屈云はんかたなく

當地へ着し候節はヤット安心仕候三峽の景は聞きしに勝る雄觀壯景にて實に一遊の價値有之候何れ委細は後郵申上度今回は拙作も少々出來候故供御覽度存居候當地は人口四十萬英米佛及我國の四領事館あり街市は隨分殷盛人氣は至極平穩に候而かし不便無比洋服店なく靴店なし破れたる靴ははき裏に御座候我領事館には通譯生警部及外務省の成田と申人と三名滯在候のみ我々來りて九名と相成候代理領事一行間もなく到着仕候へは十六七名に相成候乎學堂近日開設の見込にて家屋搜索中、中島親之とは宜昌迄同行候處陸路成都に相向て今頃は到着と存候能美は無事に候由寺本は先月八日頃出發歸國致候梅田、酒生、佐竹、實閑の諸氏に宜敷又古何の義損金は近日送付可仕候匆々意長く紙短なり
不能盡意候

○日野義淵氏　本派本願寺に在て溫厚沈重の人として尤も衆望を荷ひ居りたる同氏は一昨年肋膜炎を發してより身體大に衰弱し爾來病をつとめて山務に鞅掌したりしが三月中佛教高等中學校長　職を帶ひて間もなく病俄かに重く遂に京都醫科大學病院に於て四月十二日を以て歿せられたり氏は去る十八年普通教校制立の候里見校長を助けて大に校風を振揚し引續き文學寮理事として派內新教育の中樞に立ちたる人にして同派新佛教徒の仰て依賴する處なりしが今や其人亡し惜しみても尙餘りありといふべし

社會雜信

○東宮殿下の御結婚　兼て御申出しの如く東宮殿下は去る十日を以て九條節子姬と御結婚の大儀を擧げさせられたり此日妃殿下は勳一等に敍せられ瑞寶章を授かり御實父九條道孝公は大勳位菊花大授章を授けられ東宮附諸官人も各敍勳の御沙汰を蒙り其他新に華族に列せられ男爵を授けられたるもの六十名其他恩賜を蒙りたるもの猶は尠からざりしと、謹て吾皇室の御盛運を祝し奉る

○奉祝の歌　右奉祝として府下各區小學生徒は御道筋に整列して左の唱歌を謠ふたりと

八重垣つくる御そのふのかすみて朝日照りそひて千代の友鶴鳴き渡る春のみやゐのゝどけさよ思へば國のいしずゑのいよゝ固まる今日の日ぞいざ限りなきめでたさをいはひ歌はん諸共に

○東京市の寄附金　東京市にて出願せし御慶事紀念美術館の基本金寄附額は此程迄に決定したる分は日本銀行第十五銀行は各三萬圓又日本鐵道會社日本郵船會社三井合名會社三菱合資會社は各二萬圓にして此外三百六十餘會社あれば一會社假に一千圓とするも三十六万圓なりとれば總額六十万圓以上に達すべしといふ

○徵兵檢査に關する心得　壯丁の徵募檢査に應ずる者の最も注意すべき件は左の如しと云ふ

一、檢査當日兩三日前より酒色若くは激動を禁じ不規則の起居を愼み成るべく平穩に身體を休養すべし

一、腦病、脚氣、痔病、胃弱、卑濕、梅毒、疝氣、癩疾等二週前より深く自身の健康に注意し異常ありと信ずるときは檢査官に向ひ自ら進んで申告するを忘るべからず

一、四肢五官殊に腋下肛門陰部等は充分の淸潔を心掛け檢査前に必らず入浴を實行すべし

一、其の他檢査場に於て自家の健康に關し捏造或は曲庇の言を搆ひ濫りに檢査官を煩はし時間の進行を阻滯せしむるの擧動あるべから

ず

○廢娼同盟會　島田三郎氏外二十餘名の有志者が去月青年會館に會して左の規約を定め大に廢娼の氣炎を揚けんとすといふ

廢娼同盟會規約

第一條　本會は公娼制度の全廢を期せる同志者の結合なり

第二條　本會の目的を達せんが爲に部門を分ち委員を置く其部門及委員は會員の協議を以て適宜之を定む

第三條　會員は毎月金十錢を　出して本會の經費に充つ

第四條　毎月一回例會を開く急を要する者ある時は臨時會を開く

第五條　本會の會務を處理する爲めに幹事三名を選擧す其任期は一年とす

第六條　入會せんと欲する者ある時はこれを會議に付して其許否を決す

第七條　會員中不都合の行爲ある時は之を會議に付して退會を命ず

○日本人の體量　の次第に劣等に傾き羸弱に陷るは慨す可きの事として「衞生會雜誌」は既往五箇年の徵兵入隊者の躰量平均を左の如く表示せり

二十三年	平均體量	一五、三五〇
二十四年	同	一五、三三〇
二十五年	同	一五、一〇二

右は全國徵兵の平均

二十九年	平均體量	一四、八五八
三十年	同	一四、六八〇

右は四國中國徵兵の平均

更に言を次で

斯の如く徵兵の平均體量よりして我が兵士が戰事に於て負擔すべき重量を聯想すれば背嚢に於て四貫三百四十三匁村田銃は一貫百匁合計五貫四百四十三匁にして即ち體重の三分一以上を占むるものなれば其體量以外に荷はざるべからざるの重量あるなり之を歐洲人平均十七貫三百目に比すれば數理上自然の勝敗は此點に於て彼に劣れりと謂ふべきなり

といへり大に注意す可きの事となす

○東西人の躰格の比較

身長

歐洲人	男	五尺五寸四分	女	五尺二寸一分
日本人	男	五尺一寸八分	女	四尺八寸四分

躰重

歐洲人	男	十七貫三百匁	女	十五貫六百匁
日本人	男	十五貫匁	女	十三貫匁

○富士觀象會　去る明治二十八年の冬野中至氏夫妻が富士山頂に越年して高層の觀象をなさんとして病に罹て下山するの已むを得ざるに至りたるが爾來其志愈堅く今回江湖知名の大家數十名の發起人を得て愈見出の如き會を組織しその主意會則及會員錄を頒ちたりその主意書は左の如し

富士觀象會趣旨

宇宙の廣大にして組織の複雜なる輓近理學の進歩顯著なるに拘らず其の蘊奥を攻究し得たるもの未だ幾も之れあらず抑萬有自然の顯象を攻究せんと欲せば力めて觀察の範圍を擴張し森羅萬象を集中調理するに

非ざれば確然たる成果を見ること能はず而して方今吾人の觀察區域は僅々地球表面の一小局部に限り從て其の觀察する顯象は一方に偏倚し他は僅に之を推測するに過ぎず固より全般を窺知すること能はざるなり近時歐米に在りては或は海底の深き或は南北氷洋の廣き或は山嶽の高き觀測に鉅萬の資金を投じ舟車機器を装置して學者を派出す其の目的とするところ觀察の範圍を擴大して宇宙の萬象を網羅し天地を支配するの大法を闡明し以て人生の福利を増進せんとするに在り翻て本邦の狀況を視るに外國と交通を啓きしより已來諸般の文學技術は彬々振興し其の研究に資するもの稍具はるに至りたるも廣く萬有顯象の研究に供するの機關に至りては未だ寥々の觀を免れず是れ文明世界に伍するの時に於ける一大缺點と謂ふべし

抑富士山は東海に屹立して全出露出し八面玲瓏其の高さ壹萬二千尺に餘り眼界廣遠且四時の登臨に便なる天吾人に自然の觀測臺を興ふるに非ざるなきかを疑はしむ若夫れ此の山嶺に適當なる建築を起し往來駐住を容易ならしめ精器械を具へ以て諸般の觀察に便にせば氣象の觀測は固より星學物理學地學生物學醫學其他諸般の研究に資し特り本邦のみならず世界學術の進歩を助け文明の發達を裨補する廣大なるを信ず且登山者をして大に學術上の興味を感ぜしめ此の名山をして益々其の偉觀を逞うせしめ世界の人士を招徠し文明學術の興張と共に國光を四方に輝すに至らんこと企て望むべきなり是れ余輩同志者相謀り茲に富士觀象會を設立し明治聖代の紀念として東洋唯一の觀象臺を富士山巓に築造せんと欲する所以なり仰ぎ願くは内外有志の諸君奮て本會の事業に賛同あらんことを會務の詳細の如きは載て會規に在り謹て瀏覽をこふ

○不正葡萄酒の元素

として「報知」の記する所を見るに曰く

近來葡萄酒に混成酒多き事は大抵世人の知る處なるが全躰佛國より葡萄酒を輸入するとせば二石二斗入樽一個六十圓極下等五十圓位にて之を四合入百二十本に詰入るゝとして一本二圓の代價に賣り捌きて漸々に元金となる之に關税二弗半及び減量手數運賃七圓を算入せば到底利を見ること不能のみならず日本人中多くは二圓位の葡萄酒は容易に飲用する事出來ず故に奸商等は佛領ポルトガルに産する山桃、櫻の實、無花果、桑の實等の搾液を輸入して之に八度位の酒精と水を混和し之に糖蜜を和して程よくなし若し色の黑きか赤味の薄き時はアニリンの色料を入れて色を造るものなれば葡萄酒の本料は毫もなく只に山果實と酒精のみてゴマ化す事なりと

○福井の大火

客月十九日夜橋南羽生の邊より火を失し瞬時にして木田一圓を燒燼し愛宕山に飛び火し、向岸に移り、一時は火焔六方にひろがり終に一千有餘戸を烏有となしぬ、燒失せしものゝ中殊に恨むべきは縣立鐘秀閣、及舊家鷲田、大月、三崎氏等にして就中鷲田土三郎氏は本社との關係もありし人にて現に縣會議員の要職にあり、藏書一万三千餘卷和漢の經史、詩文、歌俳、及藥方等稀有の典籍ありしが藏庫悉皆灰燼になせしは遺憾の極といふべし、又大月、三崎及黄檗寺の門は福井の三門と稱して有名なるがこれも亦片影を止めざるは眞に痛歎の外なしと（臥松）

○燒き棄せらるゝ手紙

昨三十二年中不能配達と决して燒棄てられたる實數は左の如し但し内配達とあるは燒棄てんとして開封し書中の文字によりて始めて宿所を知り夫れより配達を遂げたるものと

	不能配達	内配達	合計
一月	五、七二三	五一五	六、二三八
二月	三、〇五六	二一八	三、二七四

三月	三、六三七	一九五	二、八三一
四月	二、三四二	一七五	二、五一七
五月	一、九八〇	一〇五	二、〇八五
六月	一、八二八	一五四	一、九八二
七月	三、五五九	一〇三	三、六六二
八月	二、〇四三	六七	三、一一〇
九月	一、九五〇	六三	二、〇一三
十月	二、〇六五	一五八	二、二二三
十一月	一、七七三	二二一	一、九九四
十二月	一、八一五	一三〇	一、九四五
合計	三〇、七七一	二、一〇四	三三、八七三

○御慶事當日の馬車鐵道會社の收入は左の如しと

本社　八千七百八十二圓二十六錢

品川　千〇五十圓七十八錢

又同日水族館を見物したる總人數は一万五千六百五十二人なりしと

○郵便配達夫の制服　の改正は愈來る六月の夏服より先づ東京管内より改正せらるべく夏服は小倉地なるも冬服は羅紗を用ゆる由にて、鈕は一行釦にして金釦とし、同地質にて袴下脚絆を作る筈にて、又從前の冠笠も廢して帽子となす都合なりと

○吉原の游客　去る十日の夜のみにて吉原に浮かれ込みたる劣情漢は左の如しと

角海老	百七十八人	娼妓が	二十人
稲本樓	百四十六人	同	二十一人
中米樓	二百三十六人	同	三十六人
大文字	百四十人	同	十六人
萬華	九十一人	同	十三人
稲辨	百四十七人	同	三十人
新稲辨	百十一人	同	二十七人
辰稲辨	百二十五人	同	二十五人
相泉	三十八人	同	十三人
相万	百十一人	同	二十七人
新福岡	八十四人	同	二十一人
松金	八十三人	同	三十三人
野村	四十五人	同	十三人
松山	四十五人	同	二十一人
河内	三百五十人	同	三十二人
賞來	百十六人	同	十七人

夜聽水鷄　（星巖）

月淺秧田角角鳴。
江東羈客夢先驚。
王妃祠畔蓋時聽。
又聽王妃祠畔聲。